

---

# 戦う者達の哀歌

karon

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦う者達の哀歌

### 【NZコード】

N4884W

### 【作者名】

karon

### 【あらすじ】

世界大戦以後の世界。人類はようやく中世レベルまで、文明を戻した。そんな世界の片隅に、アルカンジエルというの名の軍人と、セレクという大公がいた。

それぞれが自国で名声高い有名人、そんな二人は、両国の老害たちの陰謀により、闘うことになる。

厭世的な軍人VS根性のひん曲がつた美少年の戦いは今始まった。

## 序章（前書き）

男まみれの上、主人公一人、かなりやる気のない連中です。ごめんなさい。

その日世界が破壊された。

大地は波打ち碎け、海は荒れ狂い、渦を巻いて大地より逃れたものを飲み込んだ。

高波は限りなく高く小島は跡形もなく碎け散る。

海の一部は高温に煮えたぎり。凧いだ場所などどこにもなかつた。灼熱の風に焼かれ、炭化すらせず灰色の灰になつて散つていく。炎は、無慈悲に大地を覆つた。

巨大な船にあまたの人々と、それ以外の生き物を乗せ、天の彼方へと逃れたものがいた。

そして、天の彼方に逃れる者たちを見送った者たちは、守護者となる者達に導かれ地の底に身を潜めた。

だがそれが叶わなかつた不運なもののたちは、人、動物植物の区別なく。大地に碎かれ、灼熱の風に焼き尽くされ、荒れ狂う海に飲まれた。

悲嘆の声はなく、ただ沈黙が世界を覆う。

大地は灰色に変色し生命の息吹はからうじて、無数の骸の狭間で瀕死の様をさらす。

そのわずかな生命の一部は異形へと変貌すら始めた。

瀕死の命が再び蘇る日は、それから世界が百回、太陽を回るほどの時の果てに。

残された命を守る守護者達が大地の復活を見極めた時に、人は再び地下から解き放たれる。

そして空と大地の狭間に戻ることを許される。

## 第1章 出る杭たちの憂鬱な午後

かつて、世界は二つに分かれて争っていた。

そしてある時、恐るべき過ちで、世界を碎いてしまった。

片方が天の彼方に飛び去り、この世界から去った。

そして残る陣営が、争いで荒廃した大地を支配した。

廃墟と化した世界を。

乾ききった荒涼とした大地、わずかな、かろうじて生き延びた縁。それが彼らに与えられたもの。

そして、縁以外にも破壊を生き延びた存在は、多くの場合、人々の災厄となつた。

作物を食い荒らす小動物。そして、人がかつて作り上げた異形の命たち。

それらは、人を食いさえした。

それでも人々は寄り添い、大地を耕し、脅威と戦い。いつしかいくつかの国が誕生した。

国は、少しずつ崩壊した世界を復興していき。世界は再び平穏へと進み。

荒廃の影は次第に消えていった。

「そしてようやく繁栄の兆しが現れた今日この頃、これから俺達は戦争に行くわけで」

歴史書を開いていた男はそう言つて本を閉じた。

「いやはや、かつて戦争ではるかに優れた文化や文明を世界的規模で破壊した過去をわれらが君主は理解しておられないようだ」

「現実逃避もいい加減にしてください」

長椅子にだらしなく寝そべって、本を読んでいた男から、本をむしりとると、その本を傍らの机に置き、寝そべっていた男を引き起

こす。

「アルカンジエル、現実は待つていてくれないんですよ、いい加減こちらに戻ってきてください。もちろん貴方は軍を率いて出陣しなくてはなりません。何故なら貴方は将軍だからです」

一息にそう言い切られ、いかにも面倒くさそうに、長椅子に座りなおす。

アルカンジエルと呼ばれた男は見たくもないというようにもう一人の男が持つて来た書類を、いかにも嫌そうに受け取った。

アルカンジエルは將軍という肩書きにふさわしい堂々とした体躯の持ち主ではあつたがその上についている顔はむしろ平凡で、一度や一度見たぐらいでは、覚えることが出来ないような印象の薄いつくりだ。

その上この国ではありふれた黒髪と黒瞳。その手入れの悪い黒髪をいかにも適當という感じで後ろにくくっているのも威厳というものを感じさせない。

そんな彼がいかにもけだるげな、やる気のない表情を浮かべているので、將軍と呼ばれても、周囲の人間が、彼のことを呼んだのではないだろうと明後日の方向にそれらしい容姿の人間を探してしまふ。

最もそんな有様を当人は微塵も気にしていない。だから改めようともしない。

もちろん、戦争は顔でやるものではないので、それなりに優秀で、戦果をそこそこ上げているのだが、初めて会った人間は対外、別の人間にアルカンジエル將軍と呼びかける。

顔ほとんどが隠れる兜をかぶっているのは、その威厳のない容姿を隠すためだと影でまことしやかに語られているのは伊達ではなかつた。

対する男は、切れ長な目の中面で、それだけ見れば纖細といつてもいい顔立ちで、身体つきは細身で身長だけがひょろ長く見え、一見するととても軍人には見えないが、見かけによらない耐久力が売り

の、それなりに優秀な軍人だった。

栗色の髪も衣類も隙なく整えられた、いかにもやり手という見てくれるがいたつて上官のだらしなさを際立てている。

しかしその茶色の目を覗き込めば、光彩の部分が小さく、どこか不気味なものを感じさせる眼差しをしており、じつと人を睨めば、たとえ疚しいことがなくても、居心地の悪いものを感じさせる。

失態の叱責を受ければ、大の大人の兵士ですらなきそうになるともっぱらの評判だった。

その名をサー・ジエントという。またの名をアルカンジエルの懐蛇。その二人が、いかにも嫌そうにこれから出陣の準備を始めているのだが。何しろ顛末からして気に食わない話だった。

攻略せねばならない相手は隣国ドール王国の有力な王族である、セレク大公。

彼は王族の中でも直系に近く、次代国王候補にも挙がっている。その上実力も人望もある。その上かなり若い。

もし呪い殺すことが可能なら、とっくに墓の下に入つていなければならぬ人間だった。

そんな彼を、アルカンジエルの国、カーヴァンクルの人間も疎ましく思つてゐる。思はないはずがない。

しかし、もつと疎ましく思つてゐる人間は、セレクの属するドール王国のほうがはるかに多かつた。

出る杭は打たれる、といふ。

新たに勢力を伸ばしつつある若手の台頭を疎んじる「老体」というものは掃いて捨てるほどいるのが世の習い。

かの国の古株たちは隙あらばこの新興してきた期待の若手の足を引っ張ろうと鵜の目鷹の目状態だ。

その拳句、隣国にセレクの居城を攻めるための手伝いまでの始末。

つまり、セレクの勢力を削ぎたい老人達が、セレクの領地と居城を攻め落とすためのお膳立てをすべて整えてくれたわけだ。

そうした老人達の妄執にアルカンジエルは毒氣を抜かれてしまつていた。

むしろ敵であり、これから倒さねばならないセレクに思わず同情してしまつたくらいだ。

そんなアルカンジエルの心境は、自國では少数派だ。

むしろ隣国に混乱こそ、上層部の望むところだろう。

優秀な指導者となる確率の高いセレクの破滅は彼らにとつて望むところだ。

何が疎ましいのか。

自國の足元を削り取つても、今現在の権力を維持しようとする隣国の老害たちか。

それとも、それを舌なめずりしている自國の権力者達か。

あるいは、いらん不心得を企んで、一族郎党を巻き込んだ不始末をしでかしてくれた従兄弟か。

どれほど不快に思おうと、それなりに一切逆らうすべのない自分自身か。

セレクは国内でのみ活躍で、諸外国とはあまり接点がない。そのセレクを攻め込む大義名分など存在しない。大義名分なき侵略。それは、国家が責任を取らねばならないこと

最終的にその時、独自の判断で、それを行つたとして誰に詰め腹を切らせるか。

そんなことは分かりきつている。指導者の自分だ。

つまりは公金に穴を開けるという不届きな従兄弟のしでかした不始末の救済と見せかけて、我が一族の出世頭の首を駆ろいつといふとか。

何だつて一族連座になるくらい多額の金を着服するんだ。

出来れば、自らの手で、この間抜けな従兄弟の首を叩き落してやりたい。それは自分でなく一族の男達すべての願いだと信じていた。

「何を考えているかは分かりますが、それでも、やらねばなりません

ん、この国の軍閥の一翼を担うものとして」

賢しげにそう奢める副官を、今は疎ましい。

たとえ、それが自分のためを思つての言葉だとしても。

逆らうことには許されない。出撃を拒否すれば、自分のみならず、親族一同まとめて処分されるだけ、出撃しただけ少しだけ長く生きられるということのみでも。

「かつての戦乱で、荒れ果てた地表に住まう」とが困難で、生き残った人間は地下深く、百と数十年籠つていたというぞ。暗い穴倉の中で産まれ、死んで行つたご先祖様が今このような愚かな戦争をしているのを見てなんと思うだらうな」

そう言つて窓の外を見る。中庭の樹木の豊かな緑に田を細める。

季節は夏が終わり、秋の始まりかけたころ、夏の名残の緑はまだ美しかつた。

「彼らはこんな美しい光景を生涯田にすることはなかつた。暗闇しか知らずに死んでいった」

「それは過ぎた過去です」

「だが、けして忘れ去つてはならない過去だ」

副官は目を伏せた。

「人が人である限り克服できないのでしよう、たとえ世界を壊しかけた過去があつても」

その言葉を耳の端に引っ掛け、書類を開いた。

「糧食はかつきり、旅順の一倍という指令は通つたようだな」

唐突にアルカンジエルは迷いを捨てた。

「あとで連隊長どもを呼び出せ、作戦会議と、出撃順を伝える」

「わかりました」

「そうだな、何が嫌かって、奴らをどんなに軽蔑しても、俺もまた同じ壇上に乗つていて、同じように生きていかねばならんということだ」

苦い笑みが唇に浮かぶ。

再び扉が開き、アルカンジエルにとつてもう一人の副官といえる人間が入ってきた。

すとんとした衣装にくるぶしまで覆い。頭からすっぽりと淡い色のベールをかぶっている。

ベールの隙間からのぞく顔は、人形のように整っているが、表情に乏しくまさしく人形のように無機質だ。

まっすぐな赤毛を肩にたらして、同色の眉と睫毛の下の瞳は薄い青で、時々青い石が嵌っているんじゃないかとアルカンジエルは錯覚しそうになる。

魔女アイーダ、かつて滅んだという文明最後の守護者の一員でもあり、そこから派遣されてきたアルカンジエルの従者だ。

魔法使いと呼ばれている彼らのことを、アルカンジエルは薄気味悪く思っている。彼らは、空を飛んだり、見えないものを当たり、風を吹かせたりと行つた異形の力を持っており、その力で主となつたものを助けると言われているが、当のアルカンジエルにとつてはただ有難迷惑なだけだった。

アルカンジエルが、成人し、軍役に付いた時に派遣されてきて以来の付き合いはあるが、サーチェントに対する時のような気持ちはおそらく生涯抱くことが出来ないと確信していた。

かの組織は国を問わず魔女や魔法使いを派遣していく。國の中枢を担う王族ともなれば、幼い子供のときに自分つきの魔法使いを与えられる。

それがどこか胡散臭いものを感じるからだ。

それでもアイーダは忠実だ、表面上という注釈がつくにしても。

「今のところ、用はないが、それとも何かあったか？」

「おそばについていることが私の任務ですので」

何の感情も感じられないアイーダの声に、どこか苛立つものを感じた。

「何でもお嫌いですね、政治の中核を担う方たちも嫌い、軍務も嫌い、魔法使いも嫌い」

驚いて、アルカンジエルはアイーダの顔を覗き込んだ。

しかし相変わらず、何の表情も浮かんではいなかつた。

ただ気が付いたことを言つてみただけ、そんな感じで一礼する。

「それでは、どちらへいらっしゃいますか、ご一緒いたします」

アルカンジエルは黙つてアイーダに背を向けてゆっくりと歩き出した。そのあとをサーチェントが付き従い、アイーダはその背を見つめて歩き始めた。

アルカンジエルがいやいや任務に就いたとき、ドール王国では、一人の王族が、議会の槍玉に挙げられていた。

議題は隣り合う領地との境界線問題。しかし問題の土地は深い森の中があり、どちらかといえば、その森自体が境界線といつてもいい。

その上その森はいまだに、過去の文明が作り上げた伝説の怪物が生息しているのではないかとまことしとやかに囁かれる、どんな無謀な人間も森の入り口から一キロ以上踏み込もうとしない第一級の危険物件だ。当然商人達や渡り芸人達も通ろうとしない。

だからほとんど、ほつたらかになつっていたのだが、それを急に蒸し返してきた。

「だから申し上げましたでしきう。あの森は、行き来が困難だと、正確な測量をするにしても、手が足りないと」

「そう抗弁しても、相手は聞く耳もたない風だ。

「しかしですな、それでもだ、貴方がかの地を拝領してからだいぶ時間がたつておられる、にもかかわらず、いまだその準備すらやつておられない」

自分の父親ほどの男に対してセレクは冷ややかに言い放つ。

「問題の土地を領地としたのは貴方のほうが先でしきう。それならば測量はそちらでやつていただけるでしきうね、大体通行がほとんど不可能な森の正確な地図など、こちらでは、必要として降りま

せん、そちらが言い出したことです」

「こちらは王族で、相手は地方領主だ、それが王族相手に、土地の境界線問題をねじ込んで呼びつける。その段階で怪しい話だ。

しかし、問題提起された以上、議会には出なければならない。どちらほど、理不尽と思つても、それが法律だ。

とはいへ、そちらが測量を出せという主張は通りそうだ。なんと言つてもこちらが王族なのだし、森の中の境界線について、文句を言つてきたのは向こうだ。

だから、測量に行きたがる技術者をどうやって工面するかなんて瑣末なことをこちらが心配してやる必要性はまったくない。

彼は議長席を睨みつけた。

「むりん、期限を設けるべきでしような、最低でも半年、その期限内に、測量を終わらせれば、私は、あちらの言い分を認めましょ」  
はつきりと言い切った。もちろん、あの森を測量する命知らずを集めるのには、十年あつても足りないと思つてているから胸を張つて言いつた。

議長も渋々頷いた。

黄色い紙をくしゃくしゃにしたような顔だ。そう彼は思った。

「それでは本日の議題は終了する」

議長の鳴らす甲高い鐘の音にまぎれて彼はため息をついた。

「それでは、セレク大公、シグウッド領主、退席を許します  
紫の外套をはためかせて、セレク大公は立ち上がり、重厚な扉に向かつた。

扉付きの衛兵が恭しくその扉を押し開ける。

扉の前では、セレク大公付きの魔法使いが立つていた。

「お勤め、終わられましたでしょうか」

「終わったからここにいるんだろう、どうせあの辺りのくせジジイどもの差し金だろうがな」

苦々しく呟くとそのまま大またに用意された自室へと向かつ。

血筋と才能と実績に恵まれた男と近隣諸国で噂されているセレクが、さらに美貌にも恵まれているということはドール王国内部でしかささやかれない噂だ。

これまでのセレクの活躍の場がほとんど国内であったため、諸外国人間がセレクの顔を見ることが少なかつたためだ。

艶のある癖のない黒髪を背中にたらし。美女と見まごう面差し、華奢な身体つき。いわゆる性別不詳の美貌の持ち主だった。惜しむらくは透明な紫の瞳それがたつたの一つしかないことだろう。

紫の瞳は左目のみ、右目は斜めにかけた帯状の金属の輪で作られた眼帯の下になっている。

右目のある位置に目の形にくりぬかれ、色ガラスが嵌つたそれを、はずしたところを見たものはセレクを除いて誰もいない。

結果、ついたあだ名が隻眼大公。

幼いころから、当時は布製であったが、眼帯を常に見につけていたので、生来の欠損と思われていた。

幼少のころから彼に付き従つてきた魔法使いは、彼の気性はほぼ飲み込んでいたが、今は口を挟むときではないと沈黙を守つた。部屋に戻れば領地からセレクに付き従つてきた侍従が扉の脇に控えている。

「お茶」

端的に命じると、そのまま長椅子に行儀悪く寝つころがる。

「さて、嫌がらせはこれで終わりか、それとも本格的にこれから始まるのか、どっちだと思う?」

「もうご自分でお分かりなのでは?」

「お前の意見が聞きたいんだよ」

薄い唇をへの字にしていかにも拗ねたような顔をしているが、目はどこか冷たい色をしていた。

彼はしばしの沈黙の後、口を開いた。

「これで終わらせるような、生やさしい方など、貴方を追い落とそ

うとする方達の中にただの一人もいないでしょう」

セレクは長椅子に肘をついて身体を起こす。

「具体的な名前は挙がらないんだ」

「申し訳ありません、多すぎて今の段階では私には見当が付けられません」

その言い分にセレクも納得せざるを得ない。

「お前のそういう正直なところは好きだけどねアルファ」

アルファと呼ばれた魔法使いは、小さく頭を下げる。

彼もまた、魔法使いと呼ばれる人種特有の、特徴に乏しい顔立ちだった。髪も、瞳も灰色で、どこかくすんだ印象、ぼやけたというのが一番の特徴といった姿だ。

「魔法使いつてみんな同じ顔をしてる感じだよな、髪と瞳の色だけで見分けてる感じ」

どこか不穏な面白がる口調。悪童のような笑みを浮かべていた。「ご期待には添えなくて申し訳ありませんが、二人以上並べばそれなりの差異という物がござります」「

いささか不機嫌にそうたしなめる。

「お前、変わらないよな、そののっぺりした顔のせいか、俺が餓鬼のころからほとんど変わってないような気がする」

「実際変わっておりません、私どもは、人と同じ速度で年をとることが出来ませんので」

そう言われて、セレクは思わず間の抜けた表情をしてしまった。

「お前、歳をとらないのか?」

「知らないわけがないでしょう、私だって昔は赤ん坊でしたよ、成長速度が遅いだけです」

苦笑して彼は、セレクを見下ろす。

「実際、貴方のお婆様付きの魔女だった方は、本部で今もお美しい姿でいらっしゃいます」

「俺が産まれたときにもう死んでいた婆さんのことなんぞどうでも

いいがね」

再び長椅子に身体を沈める。

「殿下、お茶をお持ちしました」

先ほどの侍従がポットとカップの乗ったお盆を持って戻ってきた。「ご苦労、呼ぶまで下がつていろ」

転がつた体勢で熱いお茶を飲むのは危険なので、座り直して茶碗をつかむ。

実際王宮では、鍵付きの箱に水以外の飲食物をしまい、信用できる側近以外の人間には触らせないようにしている。

会食の時には毒消しが欠かせない。

そんな生活をしているため、領地を離れて呼び出されるだけで十分嫌がらせになるのだが。

「そろそろ、動きがあるかな」

「今調べさせております」

「なるだけ早くしてほしい」

「急いだほうがいいでしょう。そんな気がします」

アルファの言葉に頷くと、セレクは窓を見た。

薄い紗幕がかかつたそれにため息を突く

「ああ、今日はいい天気なのに」

いつ矢が打ち込まれてくるかと警戒して、常に窓には紗幕をかけ  
る習慣になっている

王都、そして王宮はセレクにとって安住の地ではなかつた。

いずれ玉座に着く確率が高いので、そうなれば住み慣れた領地を離れ、ここに住まなければならぬのだが、実際のところそれをセレクは歓迎していない。

どちらかといえば、領地を首都にしたいくらいだ。

隣国との国境線が近すぎる、国土の端にある自分の領地が首都に向いていないのは百も承知だが、どうしても王都には、そりが合わないものを感じている。

それは気候風土というよりも、首都界隈の人間関係によるものが大きいのだが。

しかし、玉座に就かなければそれはそれで別の誰かが玉座に着いたとき、その誰かがセレクをそつとしてくれる可能性はまずない。むしろその誰かがいろいろと厄介」とを背負い込ませてくれそうな気もしている。

だから結局自分で玉座についてしまえ、というのが側近達の言い分だった。

何しろ、自分にとつてろくな人材がないのは骨身にしみて分かっているのだ。

それが一番安全と言われば、否定することも出来ない。  
どの道背負うなら、大物狙いで行きましょう、もはや自暴自棄の段階に入っているかもしれない。

やさぐれでいると、ふいに、その口づるをこ側近の一人が部屋に入ってきた。

長い黒髪をひつつめて結い上げ真っ白なドレスを着込んだセレクの母親くらい年頃の女だ。

その女は入つてくる直前まではその端正な顔立ちに上品な笑みを浮かべて何やら届け物を捧げ持つていたが、扉を閉じた途端その形相は一変した。

「殿下、至急、領地に戻らねばなりません」

その表情はこわばり、ただならないものを感じさせた。

「領地は、隣国侵略にさらされています」

その言葉にセレクの眉がひそめられる。

「隣国ということは、カーヴァンクルか、しかしどういう大義名分が立つんだ」

王国ドールに接している国は三つ、そのうちセレクの領土に一番近い立地がカーヴァンクルだった。

茶碗を卓に戻し、目の前の椅子に座るよう、女に促す。

慌てたようなしぐさで、椅子に坐ると、アルファにも顔を向ける。

「例の場所に女官としてもぐりこませた部下の証言ですが。秘密裏に隣国に内通し、殿下を害する計画が立てられつつあるようです、そのため、領地の情報を秘密裏に隣国の漏洩し殿下の基盤を破壊するつもりでしょう」

女は一息にそつまくし立てた。

「まだあるだろう、それで俺が、慌てて領地に戻ろうとすればその道中に仕組まれた偶然の事故ではかくなる、それくらいの筋書きは書いているだろうな」

皮肉に唇をゆがめる。

「それはそれとして、殿下はカーヴァンクルといかなる接点もないでしょ。にもかかわらず、殿下に対し宣戦布告などしても先ほど殿下がおっしゃったとおり、大義名分が立ちません」

アルファがそう尋ねると、主を振り返る。

「何をでっち上げてくるつもりだろうな」

いろいろと状況をシミュレートしてみると一向に何も思いつかない。

「おそらく何も、すべての責任を司令官に背負わせるつもりでしょう」

「うわ、それで誰だその可哀想な責任者は

「アルカンジエル・グロー・バー将軍です」

唇に指を当ててセレクはしばらく考え込んだ。

「どつかで、いや頻繁に聞いた名のよくな気がする」

その言葉を聞いた瞬間、女のこめかみに稻妻のように青筋が走つた。そのまま怒涛のじとき、懇切丁寧な罵詈雑言が女の口からあふれた。

「確かに国内のこと、いろいろとお忙しく神経をすり減らしておられるのは私どもも存じておりますが、最近目立つた活躍をしている隣国的重要人物の名前をつぶ覚えといつのはいかがなものでしょうか」

いきなり始まった説教モードにセレクは冷や汗をたらす、彼女の  
お説教のほうが、意地悪な重臣のご老人達よりよっぽどセレクには  
堪える。

「カーヴァンクルのわが国に接していない反対方向。シンという小  
国との小競り合いで、双方ほどんど死傷者を出さず、穩便にまとめ  
た知患者だそうですよ、かといって軍人としても無能ではあらず、  
武勇と知略と人格すべてを兼ね備えた軍人の鑑とかの国の軍人達の  
熱烈な指示を受けているとか」

「へえ」

嫌そうにセレクは呟く。

「好きになれないタイプだ」

「貴方のタイプなんて知つたことじやありません」

ふざけた物言いに、女の柳眉が釣りあがる。

「カーヴァンクルは本気であなたを潰そうとしているんです、アル  
カンジエル将軍という大物を潰してまで」

「どつちかつて言つと、共倒れしてくれたら嬉しいなつて感じがし  
ないか?」

端的に呟いた言葉に、女は沈黙する。

「上層部が嫌うタイプの典型つて感じだろう。俺と違う意味でかの  
国の上層部もアル何とか將軍つて嫌いなんだと思うよ」

腕組みしてうんうんとしたり顔で頷いてみせる。

「何にせよ、良かつたよ、俺としても自分の身を守るために誰かを  
不幸にするといつのは不本意だ、しかし俺以外の奴がどつちみち不  
幸になるようにお膳立てした相手なら、何が起こるうと俺のせいじ  
やない」

華やかな美貌に不釣合いなどこか歪んだ笑みを浮かべたセレクを  
女は不安そうに見る。

しかし、それに続いた言葉はとてもなく不穏当だった。  
「勝とうが負けようが不幸になる相手なら、勝つたところぜんぜ  
ん後ろめたくないだろ?」

いかにも楽観的な発言に、側近達は目をむいた。

「殿下、それはあまりにも相手を侮った発言では、アルカンジエル將軍は容易ならざる相手。攻略は至難のわざと思われますが」

「それでも、勝たねばならないだろ？、俺が生き延びるために。そのためには踏みにじる人間のことで後ろめたく思わなくてすむつてだけで、少しは気が樂になる気がしないか？」

妙に澄んだ目でそう答えられて女ばかりでなく、アルファも思わず息を呑む。

「少し、長居をしそぎじゃないか、レイチエル女官長」

この王宮のすべての女官を統率する女官長兼自分の幼少のころから隠れた側近であるレイチエルを促し部屋から出す。

そして改めて、もう一人の側近、アルファに向かう。

「聞いてのとおりだ、準備はおつて指示する、あと、アンファンには何も言つな、あいつは芝居が出来ない。場合によつてはレイチエルに頼んで、この場に留めた方がいいだろ？、それと、詳しい日程はさすがにレイチエル本人が来ないだろ？から、たぶん子飼いのアレクシーあたりが来るだろ？な、その場合、お前が代わりに話を聞いとけ、以上だ」

アルファが頷いたのを確かめると、冷めたお茶を飲み干し、再び長椅子に転がつた。

「茶碗は片付けておいて、俺はしばらく寝る」

そのまま本当に目を閉じて眠つてしまつたのを確かめると、アルファは小さく息をついて隣の寝室から掛け布を持ってかけてやる。そして、卓上の茶器を片付け始めた。

アルファの元に一冊の書物を持つた少女がよこされたのは早くも夕方にならうかという時間だった。

その少女は顔馴染みのアレクシーではなかつた。どうやら何も知らないうらしくいささか緊張の面持ちで扉の前に立つていた。

灰色の下級女官のお仕着せを着込んだ少女はややはにかみながら忙しく目を動かして部屋の中をうかがおうとする。

噂の美貌と地位を兼ね備えたセレクを一日見ようとしているのか、それとも、誰からセレクの様子を探つて来いと命じられたのか、その様子からはどうちらとも取りかねた。

昼寝から覚めたセレクが、アルファの脇から顔を出して書物を受け取ると、その姿を見たとたん少女は頬を真つ赤にしてうつむいた。

「レイチャエルがよこした暇つぶしか」

そう呟くと少女にさつさと帰れと促し邪険に扉を閉める。

使いがアレクシーではなかつた以上、手紙をこつそり挟んでおくような迂闊なまねはするような人間ではないので、見えるか見えないかの書き込みを丹念に探し始めた。

その姿を見ながら、アルファは夕食の支度を始めた。

といつてもそれはアルファが手すから汲んできた水と、乾パンにからからに干した肉と同じくからからに干した果物だけだつたが。

セレクは基本的に食べられればなんでもいい人間だつた。幼少のときから常に毒殺の危険にさらされた拳句。おいしそうなご馳走を何度も目の前で捨てられた経験が、食べ物は見た目ではないという間違つた認識を育ててしまつた。

窓辺に置いた鳥籠の小鳥達に、碎けた乾パンのかけらを餌箱にこぼしてやる。

薄暗くなつた今の時間帯、小鳥の食欲はあまりないようすで、お義理につついてすぐに食べやめた。

「アルファ、明後日には発つぞ、それと、やつぱりアンファンはおいていく

「分かりました。それでアンファンをおいていくに当たつて、どういう理由を付けられますか？」

「それは発つ当日考える。まったく、嘘のつけない部下を持つのも苦労するよ」

「嘘のうまい部下を持つのも同じくらい苦労すると思われますが、セレクはそのまま思わず口をつぐむ。

「今日のところもつままれてください、貴方は少々お疲れのようだ」

無言でセレクはアルファの横をすり抜けて寝台のある場所に向かう。

その後姿を振り返って、アルファは小さくため息をついた。  
その気配をセレクは感じていたが、振り返ってアルファと皿をあわせようとはしなかった。

通常の寝台とは異なり、縦と横の幅がほぼ同じ、つまり、やたらとだだっ広い寝台に不機嫌そのものといった顔でセレクはひっくり返る。

「嘘のうまい部下か、その筆頭が何ぬかなんだか

そんなことを咳いて、罪のない毛布を蹴飛ばしてハツ当たりする。

「嘘つきめ」

そう咳いて目を閉じた。

## 第一章 誰にとつても不本意な旅立ち

セレクは、その日、アンファンという侍従に小鳥の世話を命じた。一抱えほどある鳥籠に、五羽の小鳥が時折はためいて止まり木を飛びあう姿が愛らしい。

鳥籠の掃除の途中、彼は不注意にもその五羽の小鳥すべてを外に逃がしてしまった。

今現在、冷たい目で自分を見下ろすセレクからの雷をアンファンは震えながら、座り込んで、待ち受けていた。

「厳罰に処するとは言わない、いくら俺が可愛がつていようが、小鳥は小鳥だ、それを部下より優先することはない。それくらいは分かるよな」

ものも言えずただ「ク」と首を前に振って答える。

「だが、やはり忌々しい、しばらく俺の前に姿を見せるな」

そう言い捨てられて、小さな顔から血の気が引く。

アンファンは小柄でただでさえ、同年齢の子供と並んでも、とても同い年には見え何といわれる童顔で、そんな彼が泣きそうな顔でうずくまっている姿は哀れを催すものだった。

しかし、セレクはそれを黙殺した。

「俺はこのまま領地に戻る、お前は再び俺が王都に来るまで、ここに勤務だ。離宮別宅あたりで働いていろ」

そのまますり泣く少年を無視して、足早に立ち去った。

セレクはそのまま王宮の厩舎に向かう。厩舎では、先に来ていたアルファが馬に、荷物を区つりつけながら主を待っていた。

来るときは馬車を使っていたが、今となつてはそのような時間的余裕などない。馬を駆つて少人数で領地に駆けつけなければならぬ。

い。

「あと少しで終わります」

馬の腹帯を調整しながらアルファがそう告げた。

「アンファンをおいていく手はずは整えた」

「あのやり方ですか」

声の調子を落としてそう告げられると、セレクは不機嫌そうに顔を尖らせた。

「仕方ないだろ？、あれくらいしか思いつかなかつたんだから」

小鳥を逃がしてしまった罰として、領地に連れ帰らず首都で謹慎。そういう体裁を整えたセレクは、アンファンならびに他の侍従達の身柄をレイチエルに頼んでおいた。

少年侍従達は足手まといにしかならないと判断したからだった。

小鳥はわざと逃がされた。そしてあらかじめにアンファンに言つて含めて、自分の失態のようにしろと命じておいた。

お前達をおいていく理由を詮索されたくないからだ、それだけを言つて。

「これからは俺とお前だけで行く。適当に、付いて来るのを撒くぞ」

そう言つて、物陰から彼らをつかがう視線を感じるあたりを横目で睨む。

「わかりました、あなたと渡し、一人だけの作戦ですか」

「そう、機密保持が第一だ」

軽くうつむいて考え込むじぐさのセレクを宥めるように、頭を撫でてやる。

「いい加減にしろ、もう俺は五歳の餓鬼じゃない」

少々苛ついている。自覚があるのか、セレクはそう言つて唇を噛み締めた。

「これからは俺の命令に服従しろ。領地に戻るまでだ。それまでは何が起きても俺が何をしても何も言つな、誓え」

唐突な命令に、アルファは一瞬ほうけた顔でしたが、神妙に答えた。

「誓います」

二人は、荷物を積んだ馬と、自分達の乗る馬、合計三頭の馬を連ねて、王宮を出発した。

王宮の出口付近には、等身大の銅像が建っていた。

皇祖ドール。この国のみならず、周辺諸国の歴史に残る人物。

最初に王国を建国した王。

そしてその周辺諸国にも子孫が婚姻や養子縁組、派遣という形で関係している。

セレクは直系子孫ということになつてゐるが、確實に三百年は昔の人物なので、どういう係累になつてゐるのかはいまだに訥然としない。

その銅像は、何気なく立ち止まつた。そんな姿勢で静止している。長い髪を背中にたらし、簡素なシャツとズボン、厚手のブーツと、今時の市井の貧しい青年すらもう少しまともな衣服を着てゐると言いたくなるぐらい粗末な格好をしている。

その姿こそが、かつて彼の築いた王国の姿をありありと現していた。

王自らが鋤や鍬を持ち田畠を耕し、危険な猛獸が畠に侵入すれば率先して戦つた。

住むところも、木材を適当に組み合わせた雨風がからりうじてしげるという掘つ立て小屋だつたろう。今でこそ偉大なる大王と呼ばれていたとしても。彼自身はさして権力も権限も持つていていたわけではなかつた。せいぜい小領主ぐらいの土地を支配するさやかな王に過ぎなかつた。

それは古地図でも確かめられることだ。

それでも、王国という形に人をまとめたことで、わずかでも余剩が生まれ、それが積み重なつて、今日の世界がある。

偉大なる大帝の、それなりに端正な顔をセレクは覗き込んだ。

「繁栄してなければそれで、繁栄すればそれで、どの道苦労の種を背負い込むことになるんだよな、え、『先祖様』

話しかけても当然、銅像は答えない。つぶさに眺めて、初めてセレクは銅像があるかなしかの幽かな笑みを浮かべてゐるのに気づいた。

もともとは木像だつたが劣化が激しいので、完全に朽ちてしまわ  
ないうちに、銅像に作り変えられたと聞いたことがある。

生まれる前から建つてあるその銅像に笑みを刻んだ作者の意図な  
ど分からぬ。分からぬなりに、妙に心に落ちるものがあつた。  
王宮を出てから振り返る。

それはずいぶんと巨大な建物だと思つた。そして、王宮は高台にあ  
つたので、眼窓に城下町が一望できた。

連なる家々と、その中央を貫く商業空間が見えた。

巨大な城壁で囲まれたその都の向こうへ、巨大な門の向こうは広大  
な田園地帯になっている。

さらにその向こうにも国が広がつている。

古地図に残る、最初のドールの王国から人々は貪欲に広がり、か  
つての姿はうすもれてしまつた。かつての古王国から本当に離れて  
しまつたのだとしみじみ思う。

いざれ、すべてを我が物に、そう考えて笑つてしまつ。  
自分がちっぽけであることぐらい、分かりすぎるほど分かつてい  
るのに。

先ほど、小隊長達が自分達の持ち受けへと去つていつてしまつた。  
基本的にこんなとき総大将にはさして仕事がない。

その代わり、副官は忙しく、さつきから姿を見ていない。

アルカンジエルは、普段の習慣に合わせて読書にふけつていた。  
本日のお気に入りは最近出版されたばかりの詩集だつた。  
月を愛する詩が特に気に入った。

「ずいぶん楽しそうですね」

目の下に隈を作つた副官がよつやく現れた。  
机の上の何冊かの本を忌々しげに睨む。

そのタイトルをざつと見て、実に高尚な美しい文学書であること  
を悟り、眉間のしわをいつそう深くする。

「優雅なご趣味ですね」

その短い言葉の内に数千本の針が潜んでいた。

「どうせなら軍務にかかわりのある本を読んでいてください」

「いまさら兵法書を読むような奴に將軍が務まるか」

「せめて仕事をしているふりくらい出来ないんですか」

部下の苦言をあつさつ無視して、アルカンジエールはサージェントを見た。

「疲れてないか」

「誰のせいだと思っているんですか」

手にしていた書類をきつく握り締めて葉の間から言葉を押し出すように問いただした。

「アイーダはどうした？」

「実際に作戦が始まるまで仕事はしたくないそうです」

サージェントは苦虫をまとめて噛み潰したような顔をしていた。

「まあ、確かに、実戦ぐらいしかできることはないがな、しかし、簡単な書類仕事を手伝うぐらいしてくれたって」

「そう思つなら、貴方がしてください」

サージェントの雷が落ちた。

「分かつたから落ち着け、その書類を渡せ」

ぐしゃぐしゃになつた書類を受け取ると、丁寧にしわを伸ばしてからサインを入れる。

「いよいよ出立だな」

そう言つて立ち上がる。

すでに旅装に着替えて、出発準備を待つてゐる状態だった。

ついでに、愛用の携帯書棚にも、雑読のかぎりの書物がすでに用意されていた。

それを嫌そく横目で見てサージェントはため息をつく。

「行軍中も読書にふけつて、仕事を押し付けるつもりですか」

「馬鹿を言つたな、それならもう少し大田の本を用意する」

その言葉が、どれほどサージェントの心に響いたのか、あるいは

どういう方向に響いたのかは定かではない。

彼の表情は変わらなかつた。

にもかかわらず、気配だけがどんどん剣呑になつていぐ。

「分かつた。とりあえず、その書類をよこせ、手伝づ、手伝うから」  
真剣に身の危険を感じて、慌てて、サージェントの手の中へふたたび握りつぶされつつある書類を救い出す。

机に向かつて、サインをすると。決済済みの箱にしまつ。

「それで、書類仕事は向こうでもあるのか」

「ないと思つてゐるのではないでしょうね。国境を抜けるまで、順次伝令兵が決済書類を持ち帰り、未決済書類を届ける手はずになつております」

アルカンジエルの顔から一気に血の気が引く。

「それではせつかくの読書の時間がなくなるではないか」

「しなくて結構です」

にべもなくそう切り捨てられて、アルカンジエルはしおしおとなりなだれる。

「分かつた、それでは、俺は念のため、装備品を調べてくる」

「言つておきますが相当な量ですよ、貴方が一人で調べても半日かかるかも三分の一くらいですかね」

どうせ徒労に終わるだろうといつサージェントの言葉を無視して、アルカンジエルは自室を後にした。

サージェント以外の部下達が忙しく、ばたばたと廊下を行き違いながら走り抜けていく。

「どんな思惑があつても、仕事は仕事か」

何人かに呼び止められて、適当な指示を出すと、そのまま資材部の倉庫に立つた。

倉庫は巨大で、目指す装備品の棚は棚一つがアルカンジエルのベッドほどもあり、その上数はちょっとしたお屋敷の敷地面積分いっぱいに詰め込めるほどあつた。

「半日で三分の一、どれだけ俺を勤勉だと思つてゐるんだ」

それらは武具や武器類といった戦争の必需品から、通常の旅に使う道具類。

例えばロープや、荷馬車の修理道具、そして修理に使う予備の木材。

作業用の油や、灯火の道具。野営用の天幕。アルカンジールのなじみのものから、何に使うか見当もつかないものまで、その種類は雑多で、その量は多かった。

そしてさらに大量にあるのは食料品だった。

壺に漬け込まれた塩蔵品の肉や野菜。挽いて使つまでになつている穀類の袋。口に入れてしばらく耐えれば何とか唾液でふやけて食べられるようになる小石のように焼き固められた乾パン。

ドライフルーツ。魚の燻製。ちょっとした街の一週間分の食料がそこに納められている。

もちろんそれをいちいち調べようという無謀な試みなど死んでもする気はなかつた。

今から自分達が行く場所で行われるのは小規模な遠征。

にもかかわらずこれだけの膨大な物資が動く。

もし本格的に隣国との戦争が始まれば、消費される物資はこの數十倍ではきくまい。

結局来ただけに終わりそうな気がした。これだけの物資の調査などしたとしてもどつち道見落としがあるだろう。

ならするだけ無駄だ。

自分が調べた範囲でなにやら致命的なものが見つかる可能性は限りなく低い。といふかそんなものにたどり着くまでに力尽きる。

そう無駄に疲れる……。

そこまで考えて、背後から甲高い踵の鳴る音がした。

「どうせ資材部で仕事もしないでサボっているだろ」と、サーチジョン様のお達しで

「違うぞ、サボろうなんて思つていない。ただ思つたより大量にあるんで、これを調べると思つただけで現実逃避してしまつただけで」

「それをサボつていいというんです」

「べどもど答えるその姿は將軍とは思えないほど威厳がない。

「無情な部下の言葉に、アルカンジエルはがっくりと肩を落とした。

「しかし本当に大量にあるな」

「少々離れた場所に遠征ですからね、しかも途中で調達することもままならない」

分かっていたことだが、さらに気が重くなる。遠征はあまり得意ではないのだ。

「地の利のないとこりつて嫌いだ」

「好きな人間のほうが珍しいですね」

どうして自分の部下は口を開けば情け容赦ないんだろうか。思わず遠い目をして実際にかなり遠い方向にある壁を見つめる。

「それならそれで、向こうの地図でも確認していくください。どうせ何の関係もない本を読んでいて、副官殿に怒られたんでしょう」

そのとおりだったの何も言えず押し黙る。

さらに情け容赦ない言葉をぶつけられないうちに、アルカンジエルは資材庫を後にした。

外に出ると大きく深呼吸した。

やはりあの中の空気は乾物のにおいが染み付いている。

自分は指揮官だ、あいつたものの管理はやはり部下の仕事だ。あまりに大量にあつた荷物に思わず酔つてしまつたようだ。

貨物馬車に積まれ、個々で見るかぎりではそつ多く感じない。

ましてや、書類の中に書かれた数字だと、まったくピンと来ない。それを思えばやはり、見ることは大切だと、いまさらな学習成果をこつそり心の中で誇つて見せたりした。

いよいよ出発だ。

もうすぐあの倉庫からあの大量の荷物が運び出され始める。

さつきの書類にそんなことに関する許可が書いてあつた気がした。

一つの荷物を一人、ないし三人がかりで、人海戦術で運搬する。

そういうえば、さりにあの大荷物を運び出す荷馬車のこともあったんだ。

この遠征にかかる国の費用、何らかの失策を犯せばそれだけの費用分の責任を負わされることは必死だ。

「直視したくない現実を直視してしまった」

部下が聞いたらその場で矢礎にしてしまいそうなことを呴いて軽く額を押さえる。

物資だけではない、損害の中には当然、部下と自分自身の命もかかっている。

恨みがましく背後にそびえる王宮を睨む。

「どうせ、命令だけすればいいと思つてやがんだ」

まるで思春期の少年のような口をきいてしまい思わず赤面してしまつ。

自分の年齢を思い出したのだ。

「それでも、行かずにはんだら、それに越したことはないんだがな」未練がましくそう呟いて、それから仕事に戻ることにした。

馬達のいる場所に向かったのだ。

動物好きで、動物には分け隔てなく愛情を注ぐ彼にとつて、唯一積極的になれる仕事だった。

厩舎の脇に巨大な枯れ草の山が出来ていた。すべて馬の餌だ。他にも雑穀や豆類が麻袋に収められて積んであった。

道すがらの草も食べさせることはあるが、それだけに頼ればその周辺の緑はあつという間に絶えてしまう。それに、馬を酷使する仕事ゆえに、馬の健康状態も重要だ。

だからわざわざかなり嵩張るそれを持つていくのだ。

無論、そんなことは最初から分かっている。その程度の常識をそらんじていなくてどうして将軍という重責が担えるだらう。

それでも、自分の仕事が増えていくそれを見て、うんざりとした目で、そのベージュ色の山を見つめてしまう。

馬達は餌を食っていた。アルカンジエールの見たところ、餌の食い

方からして健康状態に異常をきたした馬はいないようだつた。

それどころか、厩舎番の努力の結果その被毛はつやつやと輝き肉付きもよく。かなり上等な眺めだ。

普段なら、元気そうで何よりと、目を細めるところだが。馬達が雑穀や干草をほおばる咀嚼音が響く中陰鬱な表情で立ち尽くしていた。

行きたくないと思っている、しかし準備は着々と進んでいく。アイーダにサーチェントを手伝えと命じなかつたのもそのせいだ。アイーダはアルカンジエルの命令に基本的に絶対服従だ。だからアイーダを呼び出してそこで命じれば、アイーダはどんなに嫌でもサーチェントを手伝つて書類仕事でも何でもやらざるを得ないのだ。それをあえてやらせないのは単に準備を引き伸ばしているだけだ。どの道成功しても失敗しても、自分には破滅かそれに近い状況しか残つていらない。

その程度のことを理解するだけの政治的判断力は備わつている。切れすぎる刃のありふれた末路だ。

彼はゆっくりと自分の愛馬に向かつた。

仔馬のころから手ずから育てた愛馬は彼を見分けて飼い葉を食むのを一時中断し首を上げた。

荒い鼻息がアルカンジエルの前髪を揺らす。

「お前を驅るのも、これが最後になるかも知れんな」

そう言つて褐色の鬚を撫でる。色目は地味だが、体高は他の馬よりもかなり高い。大柄な馬同士を掛け合わせること三代。アルカンジエルの父親の代から作り上げた傑作だ。

馬の傍で、彼が現実逃避している間も準備は進んでいく。

兵士達が、さつきまで彼がいた倉庫から、食料を運び出している。そして先ほどまとめたアルカンジエルの荷物もサーチェントの指揮の元運び出されていた。

蟻の行列。天の高みの視界からならばそう見えるだろう。

そんなことを考えながら、棚の持ち方に文句を付けに行つた。



## 第三章 旅の始まりは些細なトラブル

馬車の中でクッシヨンの塊に納まるとい、早速読みかけの詩集を開いた男に、副官は諦めの視線を送った。せせこましい部屋ほどの馬車の中の空間が今の彼の個室だ。

おそらく国境線を越えるまで、何もする気はないこと判断し、自分の勝手にやらせてもらおうと決意する。

しかし、どこまでも勝手にやれるはずもなく平常どおりの運営に力をいれるのみとなる。

どの道この男が何かやろうとすれば一々ぶつかる羽田になるのでその手間が省けると言えばそうだかただ押し付けられている気もないではない。

だらしのない格好で書物を繰るその姿を見れば蹴飛ばしてやりたい衝動に駆られる。

それでも職務を果たしてしまつ自分はひどく貧乏性な気がした。

「アイーダはどうした」

「いつもどおり、別の馬車で移動です。付き添いのリュシーが馬を操っています」

言われてうんざりとしたため息をつく。

「いつもながら、あれでも女だから、男に付き添わすわけにもいかんし、俺と始終一緒というわけにもいかん。厄介だな、どうせなら、男の魔法使いを付けてくれればよかつたのに、組織の奴らも気の利かんことだ」

「それは私も同感ですが、あの連中が何を考えるかなび、考えるだけ無駄です」

それならアイーダの顔を見たときに文句を言えよかつたんだ。

その心の声は音に乗せず、噛み潰した。

どの道、魔女や魔法使いが付くような身分ではない。派遣されて

きた人材に、変更要請が通るものかも知らない。

「リュシーにも気の毒だ。ほんとあいつの侍女扱いだしな、今度待遇を考え直してやらんと」

その言葉には黙つて頷く。リュシーと呼ばれた女性仕官は、女性仕官の存在 자체が少なく、更にその少ない中でアイーダに対する耐性があるため魔女のアイーダの下についている。アイーダの性格を考えれば、快適な職場とは言いがたい。

だからといって私の職場も快適とは言いがたいがな。

再び声に出せない咳きを咳く。

じつとりとした目で、アルカンジエルを見つめる。

「なんか物凄く雄弁な眼差しを注がれている気がする

「別に、何でもありませんよ」

馬車の窓から外を見つめつつそう言つていた。

窓から見えるのは隣の馬車のみ。一応総大将の乗る馬車なので、周囲を護衛で固められている。

そのまま最初の休憩場所まで進むことになつていて。

確かに読書くらいしかやることはないかもしれないが。この調子で読んでいたら、あつという間に読む本がなくなる気がした。

その場合、最初の一冊に戻るのだろうか。

そこまで考えて自己嫌悪に陥る。何をくだらないことを考えてしまつたのだろうと。

リュシーにとつて、アイーダという魔女の付き添いは周りに言われているほどきつい仕事ではなかつた。

リュシーは若い女というはもう苦しい年齢に差しかかろうとしていたが、生来の童顔ゆえ、それを気づかせることは少なかつた。体格も、軍人としてはかなり小柄で細い。

髪は肩で切りそろえ、前髪は後ろに撫で付けて、ヘアバンドでまとめている。それが唯一の装身具だった。

身につけているものは男と同じ、気なりの荒い生地で出来たい類

と皮製の防具。

目の前の魔女と違い。その色彩さえくすんだ薄い茶のグラデーションである彼女は目立つという言葉から一切無縁で生きてきた。

それゆえ、軍隊という女性にとつて決して安全ではない場所でも何とか生きていけたのだと自分で思っている。

無論それなりの処世術も使つたが。目立たない容姿という。彼女の最大の武器は常に彼女を守ってくれた。

その彼女の前で、魔女は静かに敷き詰められた薄縁の上にただ座っていた。

たっぷりと布を使った長衣とベールがその薄縁の上に流れている。目を半眼にし、表情も指先もぴくりとも動かない。

馬車の振動に合わせて顔にかかる赤い髪が小さく揺れるのが唯一認められる動きだった。

最初はこの有様にずいぶん戸惑つたものだった。

何とか反応を引き出そうとしてもどうしていいかわからずただ途方にくれるだけだったときもあった。しかし最終的に慣れた。

人形でも置いてあるだけだと思つてそのままほうつておくことにした。

わざらわしい雑用も言いつけられることもほとんどないし、それに上官のアルカンジエルの前で口を聞くときはずいぶんときついことしか言わないのもわかつてきたので、彼女が口を利かないのはむしろ望むところという気持ちにもなつていた。

無論、アイーダは人形ではない。だが、ことやら自分を無視しようとしているのなら、こちらも相手を無視しようとして何が悪いといふ心境になつていた。

だから、今も、馬車の中で平然とリュシーは内職の編み物に精を出していた。

作りためた精緻なレース編は結構な小遣い稼ぎになるのだ。

他に刺繡の内職もあるが、さすがに戦地に道具一式もつてくるわけには行かない。

それに、馬車の中では揺れて手元が狂う。

身よりのないリュシーにとつてお金はいくらあつても悪いことではなかつた。

軍務に就く報酬がけして安いわけではないが、安定ということを考えれば小金は溜め込んでいたほうがいい。

忙しく編み棒操る女をアイーダは視線をずらすだけで眺めていた。細い、針と見まごう編み棒で、ごく細い亜麻糸を指先だけで透き通つた織物を織り上げていくようにも見えた。

リュシーは変わった女だ。女性仕官は他にもたくさんいる。男性士官の数が圧倒的に多いから少ないように見えるだけで、それなりの数がいるのだ。

だがそんな女達はことさらに、男性ぶりたがる。

女の仕事をあまりやりたがらないし、同性を馬鹿にしているようなそぶりさえ見せる。

仕事が仕事だから無理はないし自己防衛の意味合いも強いと思うが、自分達を女性扱いされることを忌避する傾向が強い。

裁縫や、編み物といった女性らしい仕事に、てらいなく取り組むのは、アイーダの知っている限り、リュシー一人だ。

リュシーが思つてゐるほど、アイーダはリュシーに無関心というわけではない。むしろアルカンジエルよりも大きな興味を持つてゐるかもしだれない。

リュシーはもくもくと指先を操つてゐる。

この揺れる馬車の中でもその指先は狂いなく編み目を捉え、不可思議な幾何学模様を浮かび上がらせていく。

実際、リュシーのこの不届きといふ行動を見てみぬふりをしているのは、その手業に感嘆し、観賞を楽しんでいるからかもしれない。

この技術があつても、それだけで食べていふことができないなんて。いつ見ても、アイーダは不思議に思う。

二人の女の微妙なかみ合いをした空氣は馬車の停止命令で打ち切ら

れた。

「休憩場所に着いたみたいですよ」

持ち込んだ袋に編みかけのレースを袋にしまいながら、微動だにしなかつたアイーダに声をかける。

窓の外では空の端がやや紅くたそがれが迫りつつある。

薄縁の上からアイーダはゆっくりと立ち上がる。リュシーはそのままを取つて、馬車から降りるのを手伝つてやつた。

馬車を降りると、そこは小さな村の入り口だつた。幹部クラスの人間は、その村で、簡単な食事と宿泊を取る手はずになつていた。アルカンジエルは腹心となる。正体長達に囲まれて威容を放つていた。

そこから少し離れた場所にアイーダは立つていった。その傍らに立つリュシーはその外見の特性ゆえ完全に周囲の風景に擬態してしまつので、アイーダは一人で立つているように見えた。

いかにも立派な軍人といういでたちのアルカンジエルと無視して、村人達はアイーダに跪いた。

魔女は王族や貴族とは別の意味で畏怖される存在だった。魔法使いや魔女は、世界が破壊されたとき、残された人類の導き手となつた。

これは正真正銘の事実であり、今も王族や貴族、高級軍人に後見という形で、魔法使いや魔女が付くことで現在進行形の現実でもある。それらが信仰になるのはさして時間はかからなかつた。

今でも末端の民達にとつては魔法使いや魔女は生き神様で、崇め奉る対象であり、絶対者もある。

そのため、魔法使いや魔女が仕える相手よりも、彼らを崇拜することは珍しいことでさえなかつた。

アルカンジエルは基本的にそういうことを気にするたちではないが、王侯たちの中には不快さを隠そとしないものも多い。

地面に頭をこすり付ける村人達を黙殺して、アイーダは静々と進む。その脇で居心地悪そうにリュシーが歩いている。

アルカンジェルはリュシーのことは高く買っている。  
でなければアイーダに付けたりはしない。

見かけは地味で、目立たず、それでいて、目端が利き、感情のゆれ幅が少ない。使い勝手のいい部下だと思つてゐる。

少々ちやつかりしすぎな点が気になるが。

他の女性仕官が一日で投げたアイーダのお守りをやり遂げたというだけで、他の士官達もこゝそり彼女を尊敬してゐるくらいだ。

跪いてゐる村人の後頭部を見つめるリュシーの目が少しゆれたのに気づいたのは、アルカンジェルだけだった。

問おうかとしばらく迷つたが、村長が彼らを迎えて、その時間はなくなつた。

村長の家で、食事を取る。そして、今日はこのままこの村で泊まりだ。

上級幹部や、その側近は寝台で休むことが出来るが、下級兵士は耐水寝袋に包まって野営か、天幕に入つて毛布に包まるかの一択があるのみだ。

リュシーは食事のおこぼれには預かれるが、眠るときは、アイーダの寝台の横で、寝袋を使うことになるだらうと分かつてゐた。

食事は、アルカンジェルと、サージェント、アイーダが、招待主である村長のテーブルで、小隊長とリュシーは別の小部屋でそれぞれ食事を取ることになつた。

献立は全員、野菜と塩漬け肉の具だくさんスープとパン、それだけだつた。

田舎の村長クラスで、それ以上のゴ馳走が出るわけではないと最初から分かつてゐたので誰も不平など口にせず、無言で食事を取る。温かいスープは、前線近くになれば、煮炊きの手間がかかるので、そう作れない。パンも力チカチに乾燥したものでなく焼きたてのわずかに水分を含んだものは出立してから食べていない。だからそれなりに全員ありがたくいただいた。

アルカンジエルは自分にあてがわれたベッドに向かうと、いろいろと調べてからさつさと横になつた。

他の幹部達も同様にそうする。

アイーダとリュシーも、別室で、すぐに休む体勢に入つた。あまりには躍進代に納まつた軍人達に、村長は手持ち無沙汰に戸惑う様子を見せたが、そんなことに頓着するものは誰もいなかつた。

アイーダが寝台に入ったのを確認して、窓から見える村の集会場に天幕を張つて、野営の準備をしている下士官達を見た。

さらに下の者たちは、雨でも降らない限り野天に寝袋のみ。夜間警備の者たちを除いて全員休む体制に入つているのを確認する。見るだけ見たら、リュシーも寝袋にもぐりこむ。

寝袋が使えるだけ今はまだましだ。交戦状態になつたら。地面に坐つて、膝に頭をのせる姿勢でしか眠れない。それでも仮眠を取れるだけましなのだ。

翌日、アルカンジエルの軍勢に、多数の客が増えていた。どこから情報を集めているか謎の従軍娼婦の一団と。軍隊にくつついて、安全に旅をしようとする一般人の塊だ。

遠征では、こうした民間人の闖入で、軍勢は大きく膨れ上がる。

娼婦達の情報網は、下手な国の諜報機関よりも精度がいいのではないかとアルカンジエルは思った。

三々五々と集まつた旅人達をうんざりとした目で見つめている副官に少し、表情を隠す努力をしろと諭す。

旅人達も好きでこちらに寄つてきたわけではないのだ。

彼らはただ、山賊や、人食いの変異生物に出くわすのが怖いから、遠征軍の傍を離れたくないだけなのだ。

軍隊の傍にいれば山賊などはまず寄つてこない。変異生物も、数が多いれば、食われる確率は下がる。

弱いものの処世の知恵だ。

そう諄々と諭す上官に。サージェントは冷たい目を向ける。

「だからといって、あの中に、我々にとつて好ましからざるものがない」と言い切れないでしよう

もちろん、その可能性はアルカンジエルとて理解している。

「イリスと、カタリナが、すでに任務についている。不審者を見逃す奴らじゃない」

女性士官の名前を挙げて、サージェントを宥めた。

サージェント自身も状況を理解しているのだ。

任務に就くのが女性士官なのは、もし、従軍娼婦達の中に自分達の不審者がいたとき、丸め込まれないようにという配慮だった。

「リュシーがアイーダに取られちまたのが惜しいな」

最も軍人らしからぬのんびりとした容姿のリュシーは、こういった任務にうつてつけだ。

問題は、リュシーがその任務についている間、アイーダに誰がついているかだが。

他の女性士官達はそれぞれ押し付けあって收拾がつかなくなるため、結局リュシーに戻る。

つまり、人材がいない、それに尽くる。

「しばらくアイーダに、リュシー抜きでいてもらうか、あいつもガキじゃないんだ。最低限、身の周りのことぐらい自分でできるだろう」  
つまり、半日、リュシーにあの従軍娼婦や、旅人の一団を監視してもらい、その後、アイーダのお守りに戻つてもらうということですか？」

サージェントが胡乱な眼差しをアルカンジエルに向ける。

「それは少々荷が重いでしょう。明らかに過剰勤務です」

その通りなので、何も言えなかつた。

「一日、アイーダのお守り、一日旅人や、従軍娼婦どもの監視。アイーダに我慢してもらつて言つるのは」

「サービスメントはしばし考え込んだ。

「それなら、いいかもしません、どの道、アイーダ殿もいい大人なんですし、お守りがなければ、いられないということもないでしょう。食事の手配だけしておけばさしたる支障があるとも思われません」

「決まりだな、それじゃ、早速リュシーにその旨命じておけ」

そう言つて、やれやれと、肩を回した。

アルカンジエルの命令、そう言われば、アイーダにもリュシーにも口を挟む権利はない。

リュシーは小部屋にしつらえられた馬車を降りて、騎馬で行軍することになった。

栗毛の馬にまたがり、旅行者の一団の脇を守つて進む。

旅行者といつても、その様子は様々だ。馬や馬車を持つているのはほんの一部で、ほとんどは徒步だ。

派手な衣装に身を包んだ旅芸人の小規模な一座が眼を引く。

ほとんどは、簡素な身なりで、背に背負える程度の荷物だけの、貧しげな男女だが。一部、やや裕福そうな、商人達の馬車も見える。

もしかしたら、自分達の一団に商売を持ちかけるつもりかもしれません。

その時は、自分の内職のレース編、でてくる分だけでいいから換金してもらえるだろうか。

その場合、どうやって取引を考えよつかと、取り留めなく考えていた。

できている分はアイーダの馬車の中だ。アイーダの馬車は旅団の中心に常に配置されている。

ここを離れて取つてくる暇はないでしょうねえ。

そんなことを声に出さずに呟くと。リュシーの後方を進んでいたカタリナが声をかけてきた。

「いい天気ね」

こんなところで、天気の話をする状況ではない。これは女性仕官だけの合言葉だ。

異常なしと。

「本当にいい天気ね」

そう答えて、不毛かつ不眞面目な思考を切り替える。

今現在、怪しげな目的の輩がいたとしてもあぶりだすことは不可能だろう。

おそらく今は様子を探るに留めるはずだ。おそらく、国境を抜け、軍勢の衝突予定地近くに来るまでは動かず、時を稼ぐだろう。砂塵よけのフードに包まつた老若男女を見下ろして、リュシーは背筋を伸ばす。

今、もう戦争は始まっているのだと。

臨戦態勢に自分の思考を持つていいくと。油断なく、周囲をうかがう。

できるだけ、顔を覚えておこう。

そのような視線にさらされていることに気づいた様子もなく。一般人の旅人達は、てくてくと、一定のペースを崩さず、軍勢についてている。

ついて行けなければ、終わりだと思つてゐるのか、一様にその表情は厳しい。

どんな理由があつて、このような旅をしなければならないのかは、人それぞれだろうが、誰もがどこか切羽詰つたような、焦りが感じられる。

おそらくほとんどの旅人が、やむにやまれぬ旅をしているのだろう。

そして、おそらく、ほんの数人かもしけないが、自分達に害意を持つて旅をしている人間がいる

誰もが、悲壮な顔をしているから、リュシーにはそれが見分けられなかつた。

アイーダは、一人、馬車の中に坐つて揺られている。

小屋くらいの広さが、妙にだだつ広く感じられた。

外を見ても、視界に入るのは、下級兵の頭と、その周りに集まる旅行者達の頭ぐらいだ。

リュシーの姿を探したが、騎馬の女性士官達の、どれがリュシーなのか、アイーダの位置からは、見分けることができなかつた。アルカンジエルのところに行こうかと思つたが、行つたところで迷惑そうな顔をされるのが分かつていた。

彼は、アイーダの所属する組織に対して、懷疑の念を抱いている。アイーダ自身にもだ。

どの道、アイーダ自身の真なる忠誠は、所属組織に捧げられているので、アルカンジエルの思惑など、知つたことではないが、それでもこれ見よがしに胡散臭い目で見られるのは不愉快だつた。

アルカンジエルはといえば、だらしなく、自分の割り当ての馬車で、クッショוןに埋もれている。

アイーダは、それを透視し、見るんじやなかつたと後悔した。自分の主になつたのが、アルカンジエルでなければ、どうなつていたか。アルカンジエルが、有能ではあるが、かなり癖のある人間であるのは会つて数日で理解した。

どの道、アイーダはあてがわれた主に対してさして忠誠を誓う気などさらさらなかつたが、アルカンジエルは予想を超えて、忠誠心を抱きにくい人間だつた。

アルカンジエルのように、書物の一つも持つてくれれば良かつたか。手持ち無沙汰が辛くなつてきたアイーダにとつて、それは、ちょっとした出来心だつた。

リュシーの忘れていつた布袋にそつと手を伸ばした。

## 第四章 巡りあい、探し合い

アルカンジエールは、馬車の窓から、外を見ていた。

司会には一面、人の頭ばかりが見えた。

「なあ、降りてもいいか」

脇に控えている。侍従に沿う提案してみる。

「いいわけないでしよう」

一瞬のためらいもなく却下され、思わず地位つてなんだろうと遠い目をしたくなつた。

「少しぐらい羽を伸ばしたいという希望も許されないのか」

「これは行軍です、伸ばしたかつたら終わつてから伸ばしてください」

「お前ら、俺とサー・ジョンとどいつちが偉いと思っているんだ」

つい桐鶴する口調になつたが、サー・ジョンに鍛えられた侍従はびくともせずに。

「貴方のほうが、地位は上だという事は、存じております、それに見合つた態度をとつてくだされば、私どもとしても、何もいうことはありません」

桐鶴を嫌味で返されて、なんだかますます職場で肩身が狭くなつていく気がした。

「それに、動いている馬車からどうやって降りるつもりですか、まさか貴方が馬車から降りる間、行軍を止めると?」

「そんなわけないだろ、せいぜい馬は並足だ、これくらいなら十分飛び降りられる」

「将軍として扱つてほしいなら、将軍らしい行動と言動を撮つてください」

少年侍従の雷が落ちた。

さつきまで転がつっていた巨大クッションに不貞寝の格好でひっくり返る。

「拗ねたって可愛くないことぐらじ」自分でもお分かりでしょう？あと少ししたら小休止ですので、その時は、しばらくで歩いてもかまいませんよ、ただし、制限時間つきですが」

てきぱきとした物言いが小気味いい。もう少ししたら有能な仕官になるかもしねり。

しかし、今のアルカンジエルにとつては、サージェントの回し者だった。

「サージェントと、交代だな」

サージェントは、今騎馬で、従軍娼婦達の傍を進んでいる。

従軍娼婦という職種ゆえにめったなものは近づけるのは危険と判断したからだ。

実際、刺客が潜んでいるとしたら一番ありそうな場所だ。

そして、彼女達の職種ゆえに、女性仕官だけに彼女らに近づく仕事をさせたら、それはそれで揉め事の種になるのだ。

何しろ商売がかかっている。だからそれなりに上級将校のサージェントがわざわざ見せ餌の役割を買って出たということだ。

今頃さぞかし黄色い悲鳴を上げさせているだろうと、無駄な努力をする彼女達に同情しながら、馬車の天井を眺める。

小休止したら、昼食の時間だ。こうなると食事だけが楽しみだな、と、うんざりした気分になつた。

少々広い野原で、食事のための火を熾す。

延焼を防ぐために、まず周辺の草を刈つてから、その辺に落ちている石を拾つて小規模な竈を作り、それで湯を沸かす。

その湯を飲みながら、乾パンをかじるのが一般兵士達の食事だ。もちろん自腹で、干し果物や干し肉を持ち込んでいるものも多いが、自腹なのでちびちびと少しずつ食べる。

上級士官となると、お湯がお茶に変わる。基本的に贅沢は敵な食事風景だ。

早速、アルカンジエルはずつと閉じ籠りっぱなしだった馬車を出

て、適当に野原を散策し始めた。

刈り取った草を、馬の前においておくもの、馬車に油を注したり、故障箇所の点検を行っている者、休憩時間とはいえ、仕事のある者は忙しい。

馬から下りて、布で馬の汗を拭いてやつている女性士官達に近づいた。

「アルカンジエル様」

振り返ったリュシーがすかさず敬礼をした。

他の女性士官達もワンテンポ遅れて敬礼する。

それに軽く返すと、アルカンジエルは、背後から殺氣にも似た気配に振り返った。

従軍娼婦達が、獲物を見る肉食獣の目でアルカンジエルを見つめていた。

背筋に冷たい汗が流れたが、表情には極力のせないよう、歯を食いしばって平静を保つ。

そして、ゆっくりと少しづつ少しづつその場を離れようとする、その時唐突に罵声を上げたものがいた。

「ふざけんじやないわよ」

その言葉と同時に、切り裂くような鋭い音がした。

電光石火の平手打ちだった。

アルカンジエルが、その方向を見ると、やや背の高い少女の姿が見えた。

そして、その少女を取り囲む三人の男達。

おそらくその中の一人が張り倒されたのだろう。

「おい、従軍娼婦だらう、買つてやるつて言つてんだ」

「元、だと言つたんだ、売る気はない、ひとつどうせや」

少女にしてやや低いどすの聞いた声だった。

「おい、ひとの好意を無にしようつてのか、どうせ金に困つてゐるくせに」

「人の金だ、あんたには関係ない」

会話の流れからすると、少女に男が三人がかりで絡んでいるようだ。

いかにも面倒くさそうにアルカンジェルはため息をついた。

「その辺にしておけ、それにだ、断られたんなら、さっさと諦めて、他を当たれ、従軍娼婦はあつちにもたくさんいる、商売換えした相手に絡むな」

そう言って、そちらに近づく。

あまり威厳のない顔立ちはともかくとして、とにかく団体はずば抜けて大きい。

少女に絡むのも三人がかりな男達が思いつきりのけぞつた。

「お前達は俺達の好意でこれについてくるのを許されているんだ、それを忘れて揉め事を起こすというのならとつと離れてもらひうだ」  
そういう終わる前に男達はそそくさとその場を離れた。

振り返った少女は、怪訝そうな顔で、アルカンジェルを見た。

長い黒髪を後ろでまとめ、生成りの織り目の粗い布を額から左耳を覆い隠すように結んでいた。

年頃はもうすぐ二十になるかといふが、そしてその顔立ちは際立つて美しかった。

大きな切れ長の黒い瞳、小作りな鼻と唇が綺麗な卵形の輪郭におさまっている。

他に女はいるのに、この少女に執拗に言い寄つたのもこの美貌ゆえだろう。

しかし、ほつそりとした身体つきはやや凹凸にぎこちなく痩せぎすと言つてもよく、その魅力は大いにそがれていた。しかし、それさえ気になれば、奮いつきたくなる美人。アルカンジェルはそう無表情に觀察した。

「大丈夫かな、お嬢さん」

少し凝視してしまつたことを「まかすよ」に咳払いしつつ、少女に声をかける。

少々戸惑い気味ながら、少女は頷いた。

「名前は？」

「アルマ」

そう言つて、足元においてあつた頭陀袋を持ち上げる。

「助けてください、ありがと」「やせこます」

おずおずと頭を下げる。

どこか、おびえたよつた態度に、アルカンジョルは少し違和感を覚えた。

殺氣までのいかにも荒々しい啖呵の切り方と、今、どこかおじけた様子はあまりに落差が激しくて。

かなりの腕力と思われる、あの張り手の持ち主とは思えない。

そこまで萎縮されるほど、自分の顔は怖いんだろうかと思わず、自分の顔を撫でてみる。

しかし、とても将軍とは思えないだの、副官が将軍かと思つただのと聞われる、いかにも凡庸そうな顔立ちに変化は見られない。

「あのな、そのようにかしまわると、いつからもう少々困るのだが」  
そう言つて少女に近づく。

アルマと名乗った少女はうつむいた顔を上げて、かすかに笑つた。  
「『めんなさい』でも、さつき聞こえたの、おじさん、将軍様でしょう？」

おじさんといつ呼称が、臓腑をえぐつたが、あえて、それには触れないようにする。

「まあ、将軍様とは言わんでもいいが、おじさんはやめてくれ、お前より小さい子供になら、言われても仕方がないといつ自覚はあるが、お前ぐらいの年の娘に言わると少し、堪える」

本気で嫌そつに顔をしかめる様子にアルマはくすぐすと笑つ。

「本当なら、お礼に、ただでもいいと言つていただけど、もう商売はやめたもので、それでは、お礼に払えるものがないんですねが」「いや、こらん氣を回さんでもいい。そんなつもりで助けたわけじ

やない。それにあいつらは、要注意人物として、俺の部下に由を付けられたはずだから、もう絡まれる心配はしないでいいぞ」

そう言って、背後の女性士官達を親指で注して見せた。

「そのための見張り役なんだ」

片手を額にかざして女性士官達を観察する。

女性士官達も、今アルカンジエールとアルマを何事かと、遠巻きに眺めていた。

「しかし、引退した従軍娼婦のわりにずいぶん若いな」

二十歳前と言つ、成りたてでもおかしくない年齢にいぶかしげな顔をする。

アルマは額に結んだ白い布を指先で弄ぶ。

「片田をやられたの、さすがに、戦場で、これは危険すぎるでしょう？」

思わず、布で覆われた左由を凝視してしまう。

「流れ矢にでも当たったか」

「そんなとこ、まあ、命が合つただけでめっけもの」  
寂しげな笑みを浮かべた少女に、いつたいどうしてそんな危険な職業を選んだものかと疑問に思う。

「あ、あたしぐらいの器量だと、街の娼館にいけばいいとか思ったでしょう。だめだめ、ああいうとこは元締めが、半分ぐらには稼ぎを持つていくんだ、いや、半分ですめば御の字、いつの間にかわけの分からぬ借金まで付けられて、死ぬまで飼い殺しになることも珍しくはないんだよ」

陰鬱なかけりを少女の顔に見出し、アルカンジエールはたじろいだ。  
「その点、従軍娼婦なら、すべて自前だし、戦場まで、元締めにならうつていう根性の坐つた男は、今のところこないし」

アルマはますますうなだれてしまつ。

「すまん、悪いことを聞いた」

慌てて少女を宥めると、少女は、小さくかぶりを振つた。

「これから郷里に帰るとこりなの、あんまり稼げないうちに商売替

えしなけりやならなくなつて、これからどうじようかと思つてゐるといふ

こ」

そう言つて顔を上げて笑う。

「大丈夫、かつからでも野良仕事ぐらにはあるし、まつたく稼げなかつたわけじやないし」

なんとなくうなだれてしまつたアルカンジエルを今度は少女が慰めようとする。

「いや、すまん、かえつて氣を使わせてしまつた」

ぽんぽんと黒々とした頭を叩く。

「それじゃあ、氣をつけて家に帰れよ」

そう言つて馬車に戻る。戻つた先には、乾パンとお茶と、干し果物の昼食が用意して会つた。

「すまん、遅くなつた」

「かまいません、様子は見ていたものに聞きました。しかし、そんなに美人だつたんですか？」

「確かに美人ではあつたが、それが理由ではないぞ」

憮然としてお茶に乾パンを放り込む。

「それはそれで、うまくいきそうですか」

「いつの間にそういう話に？あの短時間でひとつ尾ひれが付けばそうなるんだ」

思わずアルカンジエルは唸る。

「どのみち、顔を傷物になつたそつだし、その方面では諦めているんじやないか」

布で覆われたその内側にどんな無残な傷があるのか、うかがい知れない。

そして、それには触れてはならない。いくら朴念仁名アルカンジエルとしてもその程度の判断は付く

「まあ、なんとなくだが、お前の手に負えなさそうなお嬢さんに思えたがな」

アルマの、あの小気味いい平手打ちの音を思い出して苦笑する。あの三人に取り囮まれても、冷たい眼差しは揺るがなかった。いつたいどこの戦場を回ったものやらと、心配になるくらいだ。

「とりあえず、上官には報告しておきます」

「おい、何の話だ」

「サー・ジョン閣下に、アルカンジエル将軍閣下は、民間人グループの見目麗しい女性にちょっかいをかけたと」

淡々と続けられた言葉にアルカンジエルの顔色が変わる。

「ちょっと待て、俺は不埒な奴から氣の毒な娘さんをかばつただけだぞ、それと、美貌に関しては、終わつた後に気づいたんだ」

「将軍にあるまじき觀察力のなさですね」

「いろいろことを言つた侍従に軽く鉄拳制裁を加えて、しみじみと咳く。

「俺の部下達全部が、サー・ジョンのほうを偉いと思つてゐるんだら、俺はいつでも將軍職を譲つてやる」

朝、朝食をとつて、さあこれから進軍を始めようとしたその時、早馬の使者がアルカンジエルの元に辿りついた。

朝のお茶を啜つている状態でその知らせを聞いたアルカンジエルは、茶碗をもてあそびながら、憔悴した使者に相対した。

早馬の使者とは、文字通り、馬を駆つて伝令を勤める役人だ。

一定の距離ごとに替え馬を用意し、それを乗り継いで最速で指令を伝える。

とはいゝ、最低限の休息しか伝令を伝え終わるまでとることが許されない。

そのため、距離によつては相当の重労働を強いられる。

恭しく掲げられた書面を受け取ると、そのまま座り込んでしまつ。

「ご苦労だった」

彼の精勤と努力は評価する、しかし、書面の内容が、自分にとつ

て快いものではないとアルカンジエルは確信していた。

その場にいた部下達に命じて、使者を下がらせると、いかにもいやいやと言つ風に封筒を開いた。

使者を適当な休憩場所に案内して戻ってきたサーチェントも、アルカンジエルの手元を覗き込む。

「セレク大公が、行方不明ですか」

「ああ、どうやら自分の領地に戻る途中で足取りがぱつたりと途絶えたようだ」

セレク大公は、秘密裏な情報網を駆使して、カーヴァンクルの不穏な情勢を察知し、領地へと戻ろうとしたらしく。

しかし、ある特定の地点から、その足取りは完全に消えて、それらしい人間を見たという目撃情報すらない。

「まさか、消されちまつた訳じやあるまい」

「それも内容です、ドール上層部が血眼になつて探しているらしいのですが、行方がつかめないとか」

「となると、確信犯で足取りを隠した可能性が高いな」

「おそらくは、そうでしょう」

アルカンジエルはため息をついた。

「セレクは間に合うかな」

「間に合う自信はあるのでしょうかね」

セレクは自分達を出し抜いて、自らの領土に辿り付くつもりなのだろう。

「どういう道筋を通るつもりか」

「あるいは、変装をしているのかもしれませんね」

小さく眉根を寄せて考える。

「しかし、俺達はセレクの顔を知らんからな、変装以前にそのままのセレクが目の前を通りても気が付かないだろつ」

「分かつている情報は、資料に入れてあつたはずですが」  
サーチェントの視線が冷たくなる。

「しかし、相手がどういう顔をしているかなんて、戦いに関係ある

か？

「ないかもしませんが、何であれ、頭に入れておいて悪いことはないでしょ？」

そう言って、所だの隅にまとめられていた封筒を取り出す。

「確か、セレク大公を遠目に見たことのある者に似顔絵を書かせたものがあつたはずです」

そう言つて髪を繰り問題の似顔絵を取り出す。アルカンジエルはその絵を広げてしばらくそのままの姿勢で固まつた。

「からうじて、細面だと言うことは分かるな」

その似顔絵は、見事に顔の特徴と言つものが一切書き表されていない、可もなく不可もなくという顔が描き出されていた。

「この絵で、個人を特定しろって言われてもな」

「遠目に見た、うろ覚えを無理矢理絵にしただけですからね、そんなものでしょう」

サーチェントがいなす。

「これは見ても見なくとも変わらないだろ？」

「そんなことありません、最大の特徴は書き込まれてゐるではありませんか」

そう言つて、似顔絵の目を指差す。

セレクの右目が欠落していた。

「これは面倒くさいので書かなかつたのではなく本当に左目がないのか？」

「何で、仮にも公式書類に添付する似顔絵で。そんなことをするんですか？」

呆れたようにサーチェントは答えた。

「常に眼帯で左目を隠しているそうです。残る左目は珍しい紫色だと言つことなのでかなり目立つ特徴ですね」

「その特徴に目を奪われて。他の特徴に目がいかなかつたといつことか？」

「それもあるかもしません」

ふと、昨日会った少女のこと思い出した。

「どうしました」

「いや、最近隻眼に縁があるなと思つただけだ」

そう苦笑しつつこたえるとサーチェントが身を乗り出した。

「隻眼の人間がいたんですか？」

「落ち着け、いることはいたが、なかつたのは左目だ」

そういわれて思わず乗り出したサーチェントは慌てて威儀をつくろつた。

「脅かさないでください、隻眼は、まつたくないわけではないが、そういうものではないのですから」「？」

「言い忘れていたが、その右目は真っ黒だつたよ」

「もういいです、とにかく、それ以外の隻眼はいなかつたんですねか？」

「それこそ、イリスやカタリナやリュシードに聞けよ、そのためには監視させているんだが」

「報告に来たら、問いただします」

憮然とサーチェントは答える。

少し、からかいすぎたかと数秒反省したが、そのままアルカンジエルは、書類を片付け始めた。

リュシーは困惑していた。

昨日まではレース編みだったものが、ビラして今こんな糸の塊になつてゐるのだろうかと。

昨日編みかけのまま袋に詰めておいたそれが、今は完全にもつれて、団子になつてしまつている。

残りのすでに仕上げてあつたものは無事で、作りかけの一枚だけの被害だった。

「これをやつたのは言つまでもなく一人しかいない。

もともと勤務中に内職をしていたのはリュシーが悪い。」

上司として、制裁は当然の権利と義務だと分かっている。

しかし、それなら最初から口で言つてくれればいいのに。作りかけの労作を破壊するという陰険なことをしなくても。

思わず出てしまいそうな愚痴を必死で押し留める。

素知らぬ顔で、アイーダはリュシーのもつてきた干し果物と、パンケーキの食事を取つている。

アイーダは、乾パンが嫌いと放言し、しかし、旅団の生活でわざわざ新しいパンを焼くことが困難なため、わざわざリュシーが粉をこねて薄焼きのパンケーキを焼く習慣になつていて。

こんなにもまじめに職務に励む自分が趣味の内職をすることすら許さないのかと。ややさかうらみな思考に陥る。

食後のお茶を飲み干したのを確認すると、リュシーは食器を片付けて、もつれた糸玉になつてしまつたそれも取り上げる。

ここまでもつれてしまえば、もつたいないが廃棄処分にせざるを得ない。

実際のアイーダはかなり居心地の悪い思いをしていたのだ。  
たとえそれがまったく表情に表れていくとも。

見よう見まねで、おそらくやり方は覚えたと思っていたのだ。

しかし、順調に言つていたのは、わずか三日までだつた。そこから混乱が生じ、それをリカバリーしようと悪あがきのはてに、気が付いたらそれはレース編みではなく糸の塊になつていた。

レース編みからどこをどうやればあそこまでの塊にすることができるのか、いつそ自分に感動しそうになる。

魔女としては、同期の者たちからは屈指の腕前と言われていたが、自分は実のとてつもない不器用だったのだ。

今までそれを自覚するような事態に陥つたことがないだけに、それは深刻な落ち込みに見舞われ、謝ることもできなかつた。

帰つてきたら謝るべきか、しかし誤る時期は過ぎてしまったのは。

そう無表情に煩悶していたアイーダに気づくことなくリュシーは

食器を片付けて、そのまま馬車の壁の隅に坐る。

無言でそのまま坐り続ける。

いつもどおり、袋から道具を取り出すこともなく。

そのまま一人は居心地の悪い沈黙の中、一日を過ごすことになった。

サーチェントは念のためアルカンジエルのいつた隻眼の人物を探すことにした。

もしかしたらと言ふこともある。

アルカンジエルが右と左を間違えている可能性をサーチェントは否定する気はなかった。

有事の時でなければそのくらいのうつかりミスをやりかねない人間だと確信していたからだ。

しかし、昨日の事を覚えていた人間に詳しい話を聞いて、落胆交じりの安堵を覚えた。

その人物の性別が女性だと聞いたからだ。

最初に女性だと言わなかつたアルカンジエルが一番悪いが。

それでも好奇心から、その相手を探してみると、程なく背の高い少女を見つけた。

長い黒髪を首の後ろでくくつた顔に布を巻いて左目を隠した少女。その瞳が、間違いなく漆黒であるのも確かめた。

少女は居心地の悪そうにサーチェントを見た。

確かに際立つて美しい少女だった。

切れ長な涼しげな目が悩ましい。思わず絡んだ連中の気持ちもわからないではないが。やはり、揉め事は極力避けてほしいと思う。

「ええと、私別に何もしていませんよね」

引きつった笑顔で少女はそう応対する。

「ああ、別にこちらの都合だ。ものすごい美人にあつたと、うちの上司が言つていたので見物に」

## 「見物」

その言葉に少女はそのままうなだれてしまつ。

「すまん、もしかして気にしたのか」

「いえ、でももしかして問題があるのかつて目を付けられたのかもつて思つてしまつて、私、ただ家に帰りたいだけなのに」「うつすらと涙ぐんでさえ見せる少女に、わざとサーチェントは慌てたように笑いかけた。

「ごめん、怖がらせるつもりじゃなかつたんだ。ただ、うちの上司はあんまり浮いた噂がなくてね、それがちょっと可愛い女の子の話をしたものだから、少しだけ好奇心が湧いただけだよ」

「口一ノ口と笑つて、少女の警戒心を解こうとする。

少女は上目遣いに、不審を隠そうともしない目を向けてくる。

ずいぶんと警戒心の強い娘だと。心中で舌打ちをする。

むつりと黙り込んだ少女と、無言で張り付いた笑みを浮かべたまま相対し続ける。

胃が痛くなるような沈黙が続いた。

「サーチェント様。アルカンジエル様ならともかく、何貴方がサボつているんですか」

上官に対しても遠慮会釈ない言葉が、背後から叩きつけられた。不機嫌そのものと言つた顔のリュシーだ。

「お前こそ何をしているんだ」

「後片付けですけど」

いつになく口調がとげどげしい。アイーダと何かあつたか。リュシーの様子を見ると、できる限り係わり合いにならないほうがいいと判断する。

闖入してきたリュシーに、いまいち付いていけない様子の少女に一礼すると、慌てて持ち場に戻つた。

「何なんだかいつたい」

少女の口調はどこまでも苦々しかつた。

少女アルマは恥々しそうに、馬車を睨んだ。

馬車の中には軍団の幹部が乗っている。

あの時、おせっかいにもアルマに関わらなければ、こんな風に悪目立ちすることもなかつたのに。

さらには他の軍幹部もアルマに目をつけたような態度をとる。

あのセージョントと呼ばれた男、何かを探りにきたのだ。それは間違いがない。

もちろん一番悪いのは最初に絡んできた男達だ。

もし、もう一度こちらによつてきたら今度は張り倒すだけで済ませるものか。

足腰立たなくなるまで叩きのめしてやる。

アルマは拳を握り締めて誓つた。

かさつき埃にまみれた生成りの旅装束には、隠しどころがいくつか仕込んであり、その中に路銀や小ぶりな小道具などが仕込んである。

そして、紐をがつちりと縫いつけた麻の袋を背負い。動き出した旅団の傍らをアルマはゆづくつといついて行つた。

単調にただ進むだけの日々、それでもゆづくつと来る日は近づいていた。

最初のときにアルマに絡んだ男達は、他でもあちこちで難癖をつけて歩き、とうとう兵士達に取り押さえられて懲罰を受けた。

十人単位の兵士達に取り囲まれて、槍の持ち手で打ち据えられるのを、アルマは無感動な目で見ていた。

その周囲にいる旅人達は一様におびえた目でその光景を見ていた。騒ぎを起こしたらこうなると言つ見せしめとアルマは判断した。

従軍娼婦を除けば、旅人達の中で、女は極端に少ない。

仲でもアルマはその容姿で悪目立ちする。

だからああいう輩が懲罰を受けるのはアルマにとっては都合が良か

つた。

だが、血を流して呻く男達を無感動な目で見下ろす少女の姿に周囲は困惑と恐怖の視線を送っているのには気付かなかつた。

それらを綺麗に無視して小休止中。アルマは、干し果物と水の軽食を取つていた。

「ああ、ついにやられたか」

不意に聞こえてきた声にアルマは思わず喉を詰まらせそうになつた。

いつの間にかアルカンジールの巨体がすぐ真後ろにあつた。

「脅かさないでよ」

慌てて口の中の物を飲み込んでからそう苦情を申し立てる。この男は、巨体にもかかわらず奇妙なくらい存在感がない。まさか真後ろに立たれるまでまったく気が付かなかつたとは。冷たい汗がアルマの背中を伝つた。

「ああ悪い、声をかけられればよかつた」

のんきな口調でそう謝られれば、それ以上言ひ募ることもできない。

正面から見れば、ずいぶんと存在感のある男なのだが、視界から少しでも外れると、どこにいるのか分からなくなる。どこかあやふやな気配。

掴みどころのないといつ形容詞の例題として使えそうだと思つた。

そんな少女の胡乱な視線をものともせず。男は目の前の光景を見ていた。

そこには先ほど懲罰を食らつた男達がしゃがみこんでいた。散々小突き回されて傷ついた額に薄汚れた布を巻き、その血は早くもどす黒い色に変色を始めている。

その顔も長旅で薄汚れているのか打撲の跡かなんとも汚らしい色に染まり、力なくへたり込んでいる様は惨めの一言に尽きた。

「そちらの指示ではないの」

「いや、現場の判断だろう」

「やれやれとため息をつく。

「よつぽじのことがない限りむやみなまねはするなどっておいたんだが」

「みんなとうとうかって顔してたから、よつぽじのことって判断したんじゃない」

アルマは氣のない顔で受け答えしてやる。

「それはそうと、司令官てそんなに暇なの」

「暇だよ」

あつさり答えられて毒氣を抜かれる。

「副官が有能でね、俺が寝っていても勝手にことを進めておいてくれる。おかげで俺は暇でしようがない」

「副官ね」

この男と入れ違いに自分を探りに来た、こけた頬のどこか油断ならない光を放つ目をした男のことだろう。

あの笑顔は不気味だった。

思わずアルマは両手でわが身を抱きしめた。

懐柔しようと笑っているのだろうが、あいにくそれに向いた顔立ちと言うか、目が怖いので、笑っていたとしても洞闇しているような気配を感じる。

それにアルマの顔を見に来たのは自分でも言つてはいるように、アルマが美人だからと言ういかにも見え見えの建前ではなく。念のため不審人物に探りを入れにきたのだろう。

「そういえば、美人だ美人だつて言つて歩いてるんだって」

「何のことだ？」

怪訝そうにアルカンジェルが問い合わせた。

その顔を見てやっぱり嘘かと確信する。適当な口実で自分の事を探りにきたのだ。

掴みどころのないアルカンジェル。いかにも怜悧な印象のサービ

エント。どういうコンビなのか理解に苦しむ。

アルマは自分達の進行方向をぼんやりと眺めた。

「もうすぐ、国境を越えるな、気の毒だが、その間、我々の傍を離れられなくなるな」

アルカンジエルが呟く。

正式な国境の道を軍隊が通るわけにはいかない。

当然裏道を行くことになる。そして、その間、付いてきた旅人達は兵士達の監視下に置かれる。

ドール王国側の国境警備隊に、密告されては困るからだ。

国境警備隊から十分に離れるまで、監視下に置かれる。

それぐらいは想定の範囲内だったので、いまさらな気がした。

「ま、それぐらいはわかっているけどね、一応従軍娼婦だった女にわざわざそんな当たり前のこと言わなくとも」

苦笑めいた咳きにアルカンジエルは決まり悪げに後頭部を搔く。

「しかし、何で従軍娼婦なんだ」

「街の娼婦は、搾取されるって言ったでしょ」

「従軍娼婦は命がけだぞ」

搾取するものすら命には代えられないと近づかない、そんな場所にどうしてわざわざ来るのが、アルカンジエルはずつと疑問に思っていた。

「街の娼婦は、髪を切られ、逃げられないように監視されているけど、従軍娼婦なら、やりたいときにやつて、やめたいときにやめられる。それに、従軍娼婦は、経歴に傷が付かないからね」

事実、街の娼婦だった女は、一生その過去が付いて回る。従軍娼婦は、その過去で差別されることが、街の娼婦より少ない。

「やめたいときにやめられるか」

アルカンジエルはため息をついた。

「確かに、それは魅力的だな」

「なんか、あつたの」

「いや、俺もそうできればよかつたと思うだけだ」

あらぬ方向を見て、うつろに呟くその様子にアルマは困惑する。

「俺もこんな戦争、やりたくないんだよな」

「上からの命令だから?」

アルマの素朴な問いに、アルカンジエルはがぶりを振る。

「公金横領しやがったアホの従兄弟が汚した一族の名誉をあがなうためだ」

その言葉には隠しきれない怨念がこもっていた。

「一族の名誉?ええと、従兄弟さんの助命を頼むため?」

アルカンジエルは唇を吊り上げるだけの笑みを浮かべた。

「奴の命なんぞいらん。奴の命で一族の名誉が購えるのなら、俺は喜んで奴の首を刎ねる」

目が笑っていない。おそらく本氣で、従兄弟の抹殺を考えたのだろう。

「しかし、何もしていない一族の長老が、監督不行き届きで、懲罰を受けそくなつてな、俺が何もしなかつたら確実にそななるだろう」

アルカンジエルの顔から、仮初の笑みが消える。

「うちの一族はあるご老人で持っているようなものだ。いや、大恩あるあのご老人を見殺しになどできる筈もない」

そこまで言つてアルマの頭を撫でる。

「悪い。お前には関係のない話だ。辛氣臭い話を聞かせて悪かった」かなり困惑した顔で、アルマは上目遣いにアルカンジエルを見る。「爺さんを助けるために、来たの」

「爺さんを助けることで、何人かの身内も助かるんだ」

アルカンジエルはそう言つて再び行く手を見つめた。

「これは戦争だよ、助かる誰かの変わりに、誰も死はないなんてありえない」

ぽんぽんとアルマの頭を軽く叩きながら、アルカンジエルはそう

だなど笑つて答えた。

適当な草原で、枯れ草を敷いた上に坐つて眠る。

幸い、凍死するほど寒い季節ではない。

仲間と連れ立っている旅人達は寄り添い、互いの体温で段を取りながら眠る。

彼は、目を細め、様子をうかがう。

指揮官クラスの起居している馬車を。そして巡回している下級兵士達。

彼は時を待つていた。動くべき時を。目深にかぶったフードつきのマントを引き下げる、目を閉じた。

時は今ではない。その日まで、怪しまれることは許されない。かの皆さん近づいたとき。それが彼の行動を起こす時。

それまでは、誰にも気づかれてはならない。気づかせてはならない。

冷たい月の光が、彼と、彼がまぎれている旅人達を照らす。

この軍団に同行してからの習慣。眠る前に、馬車の位置を確認する作業を終えると、彼は眠りに付いた。

アルカンジエルは自分の馬車の窓から外の様子を伺っていた。

「お前は、あの中ですに侵入者がいると思うか？」

「考えるまでもないでしょう。セレク大公が、われわれの聞いた噂の半分でも有能で有望な人物であれば、すでに手を打つていると考えるべきです」

副官の言葉にアルカンジエルはさらに闇に目を凝らす。

「炙り出す方法はあるかな

「難しいかと」

今は動くべき時ではない。もし、妨害工作のため潜り込んだ者が最低限の頭を持つていれば、そう判断するだろつ。

そしてすでに、旅人が集まり始めて十日を数える。最低限以下の

頭の持ち主ならとつと行動を起こしているはずだ。

「なんか騒ぎを起こしてくれんもんかな」

「期待するだけ無駄でしょう。それに騒ぎを起したとしても、それで捕まつた奴らが囮になつて、本命が残るという事態もありえます」

「ああ、捕まつた捕まつたと安心させて背後からドカンとつてわけだ」

顔を覆つて虚しく笑う。

「怪しそうな連中は兵士達が見張つているのですが、本物の侵入者が早々怪しそうな態度をとるとも思えませんしね」  
細かいことに気づきやすいのは女性仕官だ。しかし、連日旅人達に張り付いていられるわけもなく。

その上とうとう女性仕官に絡んだ命知らずまで出た。

彼らが軍人だとわかつていなかつた。それに、本当に怪しい人間は彼女達の網にもかかつていなかつた。完全に手詰まりになつてしまつた。

「後手後手になるが、動いたら間髪いれずに叩くくらいしか取れる手はないな」

「それしかないでしようが、間に合うかどうかが問題ですね」  
辛氣臭く。代の男一人が向かい合つてため息を付く。

「そういえば、セレク大公はどうなつたんだ」

「いまだ行方不明のままですよ」

「まだ見つからないか」

「普通早々見つかりません」

見つかつたとしても、アルカンジエルのところまで連絡が来るのはさらに後になる。

「外部連絡が伝令だけと言うのは本当に不便ですね」

「そうだな、おそらくこのまま国境を越えたら、本国との連絡は完全に途絶えるだろうな」

アルカンジエルもそう言って夜の闇に目を凝らす。

「だが、早々こちらの居所がわかつてもそれはそれで困るな  
それでもかすかな情報をかぎつけて、現在張り付いている旅人達  
を見下ろしながら呟く。

「いつたいどうこうルートで流れてるんだろうな」

「一度調べてみますか」

「今度があればな」

アルカンジエルは苦く笑う。

アルカンジエルが次に進軍する日はおそらく来ない。

この作戦はアルカンジエルの命運を立つために行われているからだ。

「誰も犠牲にしないなんてできないよな、俺達にできるのは、犠牲になるのが、親しい誰かでないよう悪足掻きすることだけだ」

「あるいは自分自身でないように」

サーチェントの言葉に少々呆れ帰る。

「お前が、俺に行くようにいつたんだと思つたがな、もう決まったんだからと」

「何を言つてるんです、本決まりになる前に一足掻きぐらこしたらどうだと呆れるぐらいあつさりと諦めたのはそちらでしょう。もし、その一足掻きがあれば、なんとしてもこの顛末を覆そうと私も努力したんですよ」

恨みがましくサーチェントはアルカンジエルを詰つた。

そういうわけてもだ。あの状況をどうやってひっくり返せばいいのかそれはアルカンジエルの思考のほかだった。

どのみち、彼は軍人、出撃命令には逆らえないと脳裏に染み付いているのかもしれない。

「もうじき、国境を越えるんだな」

「地図上では約三日後を予定しています」

サーチェントが、今までの通行ルートを確認しつつ答えた。

地図に書き込まれた通行ルート。

それにはこれまで進んだ道のりが日付とともに書き込まれていた。

「大体、一日の進む速度を計算すると、ですが

書面を覗き込んでそう付け足した。

「俺達が通行不可能な道は用意してないわ。いつしたって例の皆に攻め込んでほしいはずだ」

考えるのも馬鹿馬鹿しいが、そもそもの発端が、わざわざ自國に隣国の軍隊を引き込んでまでして、自國の王族に攻撃を加えたいと言つ。身勝手極まりない考えなしなのだ。

「もつとも、さして確かめもせず、通れるはずと不確かな情報を渡した可能性もあるがな」

十分にありえると頷いた。

「斥候を先導で出しますか」

その提案に、部下の招待長達の顔ぶれを思い浮かべる。

「念のためやつておくか、一応小部隊一つだ、イズラエルの部隊だな、明日当たり一番で出立をせん。こちらの進行速度は少々緩やかになるよつこ」

「わかりました」

まともな指示であれば、サーチントも忠実に実行する。  
馬車の外で待機していた侍従に、イズラエルの元まで伝令を命じた。

「それはそうと、リュシーとアイーダはどうしたんだ」

最近妙に双方の雰囲気が緊迫している。特にリュシーが。もともと仲睦まじく語り合つと言つ関係ではないが。互いが互いを空氣のように無視しあつところ、どこか不毛な関係がこのところ変化してきている。

お互い同士、さすがと意識しあつてゐるのだ。

「もし、リュシーがアイーダの相手をやめたいと言つ出したら、後任のなり手がいなくなるな」

アルカンジエルがうんざりとした顔で呟く。

「まつておけばいいでしょう。リュシーも何も言つてこないんで

すし、どの道あの二人は仲が良かつたわけでもないし、他よりリュ  
シーがましだつただけでしょう。また元に戻りますよ」  
サーチェントは面倒くさそうにまくし立てた。この問題に立ち入  
りたくないことは間違いない。

「今は、静観しておくか、触らぬ神に祟りなしだ」

アルカンジエルも、知らなかつたふりをすることに決めた。アイ  
ーダの性格では、うまくやれる人材はアルカンジエルの配下にはい  
ない。

「とにかく、今は無事ドール王国内に入ることだけ考えよう」

## 第五章 本国にいる眞面目な人たち

レイチエルは配下の女官の報告を受けていた。

経理書類をまとめながら、時折その女官に視線を送る。

栗色の髪のどこかあどけない面差しの少女は、涙を浮かべながら、去るご身分の高い方の理不尽な行いを訴え続ける。

「そう、そんなに大臣方のご機嫌が？ それで、お茶を投げつけられたのね」

茶色い染みの浮かんだ服を見下ろして女官は頷く。

「もう少し詳しく状況を話してくれる」

そう水を向けると、少女は最初、扉の前で何事か言い争っている様子が聞こえたと答えた。言い争っていた内容は。

「セレク大公殿下の行方がわからぬって」

おずおずとした言葉にレイチエルは眉をひそめた。

「セレク大公閣下は、もう城を出てしまわれたでしょう、今は自らの領地に向けて進んでいらっしゃるはずよ」

「そうなんですか、でも城内から急に消えたみたいな言い方をしてらして。その後、お茶をお持ちしましたって声をかけて部屋に入つたら、五月蠅いって、お茶のお盆をひっくり返されて」

そのままぼろぼろと涙をこぼす女官に、手巾を手渡す。

「そう、大変だったわね」

手巾に顔をうずめてしゃくりあげる少女を横目に経理書類を進めしていく。

レイチエルに愚痴ったとしても、何が変わるわけでもない。しかし、そうしたことを黙つて聞いてくれるだけでも、こうした女官たちにとっては救いになる。

そうしたことからも、レイチエルは、この城内で、最も部下に慕われる高級女官だった。

特定の高貴な方に使える高級女官ではなく。いわゆる下々の。掃除婦や庭師、料理人、下級女官などを統括する女官長。

彼女は城内のすべての使用人を掌握していた。

他の高級女官は身分の低い使用人たちの窓口役をしているレイチエルに対して、一線を引いている節があるが、レイチエルは気にしたこともなかつた。

自らをやんごとないと自称している輩は使用人を人間とは思っていない。

だからこそ、うかつにそうした者達の前で口を滑らせる。

そして使用人たちも、聞いていないふりをしているが、聞いていないわけではない。

そして考える頭がないわけでもないのだ。

ごく稀にだが、彼ら彼女らの愚痴に必要な情報が混ざっていることがある。

あるいは、思つてもいなかつた情報が。

このあどけない新人女官も、真実の意味ではレイチエルの部下ではない。ただ、噂話をレイチエルに届けに来ただけだ。

「私には、大臣方にそのような振る舞いを止める権限はないのだけれど、それでも、割れた茶器分くらいは苦情を申し立てておきましょう」

柔らかく微笑んで、女官に話をやめさせた。

「いえ、そんな、お話を聞いてくださつただけでもありがたいのに、そんなことをなさらいたら女官長のお立場が」

「そのくらいの苦情は認められますよ、あの茶器は結構高級でしたからね」

ニコニコと笑みを張り付かせた顔でレイチエルは囁く。

「でも、の方達の外聞も悪いでしょから、今話したことは他では話さないようにね、ここで話したことも誰にも言わないで」

小さく指を立て唇に当てる。そのニコアンスは通じたのか女官も素直に頷く。

「はい、わかりました」

入ってきたときは別人のようすに笑みをはいて答える女官にレイ・エルも微笑み返した。

女官が扉を閉じるのを確認するとレイ・エルの表情は一変する。さつきまで睨んでいた経理書類を脇に追いやり、指先で木製のペン軸をもてあそびながら考え込んだ。

セレク大公が行方を晦まし、王国内の大臣がその行方をつかめないでいる。

おそらく意図的に身を隠したのだろうと、レイ・エルは判断したが、問題は今どこにいるかだ。

「おそらくあの子達も知らないでしょうね」

自分が預かっているアンファンを含むセレクの侍従たちの顔を思い出しながらレイ・エルは呟く。

しかし問題はこれからだ。

セレクがあの侍従たちを置いていったのは別に隠してはいない。おそらく大臣達はその侍従を尋問してセレクの居所をはかせようとするだろ？

ことによつては尋問ではすまない。拷問になるかもしれない。

「早いところあの子達を移動させないと」

一番いいのはセレクの領地に送り返すことだ。

今から送り返せば、丁度事が終わつた後に辿り着く可能性が高い。しかし、最大の問題が、セレクが足手まといとおいていつただけに、若年ばかりなのだ。

これでは危なくて旅に出せない。

「こちらから、適当な人選をして送らせるべきかしら」

そう入つてもその人材も今いない。

かといってあの侍従たちの危機に手をこまねいていては、セレクから預かつた責任が果たせない。

レイ・エルは頭痛をこらえた。

「私は動けないしね」

レイチエルがセレク大公派だと言つことは今のところ、自分が眞の部下と認めた顔ぶれか、同士にしか知られていない。

自分の部下に裏工作をさせようとも、それがばれる危険は犯せない。

坐つてゐるだけで城内の情報がいくらでも入るこの地位はかなり魅力的だ。

「せめて、もう少し育つてくれたら」

ため息をつきながら、それでもセレクの信頼にこたえたい。そう考えたレイチエルは知恵を絞つた。

「女官長、例の子供達の周辺に動きが」

そう報告してきたのは自分の片腕とも思つ相手だった。

先ほどの年若い女官と違ひ目的を同じくする同士。

「それで、どうしたの」

栗色の髪を短く刈り、粗末な生成りの衣装に身を包んだ逞しい体躯の男だった。

年齢は四十を越したほどか、レイチエルがこの城に上がつて以来の知己だった。

「どうもあの子供達は見張られているようだ」

その言葉に眉をひそめる。やはりうかつに逃がすことも難しそうだ、

そんなレイチエルの懸念を察したのが男は軽く腕を組みレイチエルを諭した。

「落ち着け、どの道どんな理由で、あの子供達を拘束する？」

そう言つてレイチエルを安心させるように笑いかけた。

「セレク大公は、何の罪科もない」

「つまり、大義名分がないということ?」

レイチエルの問いに頷く。

「そうだ、まさか、セレク大公を旅先で暗殺するために行方をどつしても知りたいのですなどと、普通は言えない」

「だからと言って、合法的ではなく、秘密裏に拉致する可能性は否

定できないわ」

「それは、俺の仲間が田を離さず見張つていればいい。それに万が一阻止できなかつたとしても、あの子達は何も知らないんだろう?」

レイチャエルは頷く。

「ならば問題はない。最終的にセレク大公にまで届かねばいいんだ」その酷薄な言葉にレイチャエルは息を呑んだ。

「そんな顔をするな。こぞと言つときの話だ。勿論こちらで監視しうかつに連れ出されないための手は打つ、しかし、それ以上の手を打つことはできない」

その言葉を脳内で反芻し、それが間違いなく事実だと理解する。

「私たちにできるのは動かないでいることだけね」

何度も見返した経理書類をひらひらと手の中で弄ぶ。

「とりあえず、セレク大公のご機嫌を損ねた懲罰と言つことで、俺の仲間があの坊主どもをこき使つてはいるよ。逃げないように監視つきという名目で」

「できれば、行き過ぎないことを祈るわ」

別の意味でひどい目にあつている侍従たちに本の一瞬同情が芽生えたが、それは置いておくことにする。

今できるのは目の前の部下を信じることだけだ。

「下がつていいわ、連絡は何かあつてからでいい」

その言葉に男は静かに頷いた。

セレク大公消息不明。この噂は瞬く間に王宮内に広がった。  
ここでも一人、その噂に煩悶するものがいた。

いらいらと自室の広い空間をあてどなく歩き回る。

彼は王族に属する出自だつた。セレクをえいなくなれば、王族としての格が少しでもあがる。その一心で、反セレク勢力の神輿になることを決意した。

反セレク勢力の中核はほぼこの国の旧臣達で占められている。

もし即位してしまえば、改革派となりかねないセレクの存在は、

彼等にとつて脅威に他ならない。

彼はそれに対抗するための傀儡だった。

最初の国王と言われるドール。その末裔の重みはこの国では特に重い。かの血筋に対抗するには同じ血筋の神輿がいる。そのためだけに担ぎ上げられた存在だつた。

何故彼が担ぎ出されたのか。それは唯一つの理由。愚かだつたら。

愚かゆえに何もできず、正真正銘の傀儡になるだろうと期待された。

その事実に、彼以外のすべてが気付いているにもかかわらず、彼自身は、彼の支持者の心を疑いもしない。

無心に、彼のために玉座を用意してくれているのだと固く信じて疑わない。

それが逆に、セレク大公に支持者を増やす要因ともなつていて。彼の支持者の狙いは、あまりにも露骨過ぎた。

同じように担ぎ出された神輿もいるが、彼は際立つて愚かだつた。そしてそれゆえ彼の支持者は数多く層も厚かつた。

他の者たちは気付いている。自分達は、無能ゆえに選ばれると。そしてそのことにいささかながら屈辱を感じながら、それでも時期国王候補と言う名に甘んじている。

そして、何の屈辱も感じていない彼を軽蔑することが密やかな慰め。

そしてセレクを憎悪することがかすかな気晴らし。

おそらく、彼は王宮で一番幸せな男だと嘲笑われていた。

だから、自分の支持者達が、セレクを秘密裏に処分する手はずを整えていると言う話もただ嬉々として、それが直ちに執行されると疑いもせず信じた。

そしてセレクの行方不明。

それが、自分の支持者達が作戦を執行した結果ではなく。その作戦をかいくぐってセレクが彼らを出し抜いたと氣付いたとき、彼は

堪え性もなく癪癩を爆発させた。

何もかも自分に都合よくいくと信じてやまない彼は、己の置かれた状況もわきまえずわめき散らし、周りにいた支持者達がとめるのも聞かず、偶々居合わせた不幸な女官に暴力を振るつた。

さらにそれでも飽きたらず身の回りのものを破壊し始めた。

もはや処置なしと支持者達は荒れ狂う彼をおいて逃げ去つてしまつた。

窓際に置いた花瓶。テーブルの上の茶器、壁に飾られた絵。その物音に驚いた使用人達が駆けつけてきたが、それらにも碎いたかけらを投げつけて追い払つた。

彼はいつだつて自分の都合のいいようにしか物事は進まないと信じきつていた。

何かと仕掛けたとき、失敗する可能性を一度も考えたことはなかつた。

セレク大公の最も有望な対抗者といわれる男は、ただむやみに室内の家具を破壊するしかなすすべもなく。

ただ怒り狂うだけだった。

これから何をすればいいのか、そんなことは周りの支持者達が考えればいいこと、彼にとつて快い報告がなされない。それだけが重要だった。

使用者たちはそこかしこで囁きあう。

先ほどから木や磁器の碎ける音が響く部屋のほうを見つめながら。囁きあう。

疑惑の視線はその先端を狭め、一人に集中する。

今この時、かくもあからさまな行動をとるのがどういう意味を持つのか、それすらも気付かないセレク大公の対抗者に。

ただ幼児のように、駄々をこねて暴れれば誰かが彼のために何でもかなえてくれると信じたままだ。

彼は気付かない、どのような視線にさらされているか。

いつだって自分がどうしたいか、それだけしか考えたことがないから。

彼の、極めて視野の狭い。思慮の浅さを際立てる行動に、少しづつ、彼の無能さゆえに集まってきた支持者達ですら、彼の無能さは自分達の手に負えないのではないかとその手を引こうとしているのにも気が付かない。

ただ子供のように癪癩を起こして、暴れまわるだけだ。

ジャンニ公、その名が王宮から少しずつ、薄れていくのも時間の問題だった。

その顛末も、すでにレイチェルの耳に入り、その情報網に伝達されるのを待つばかりだ。

これから再び、王宮の勢力図が塗り変わる兆しがあった。

カーヴァンクルの首都では、牢の中で、一人の男が、親族達の罵倒を浴びていた。

そして彼は困惑する。

彼は、確かに、公金と言われる金を着服した。しかしそれはさやかな額で、だから彼の博打の負け分であつという間に摩つてしまつた。

そんな小額を同行したくらいで、一族郎党が処罰を受けるなんてことが普通ではあるはずがない。

にもかかわらず、一族の長老は連帶責任を問われ、一族の出世頭の将軍が、死地に追い込まれた。

彼の常識では、彼が着服した金額は、本当に些細なもので、そんなはした金で、彼本人以外に類が及ぶはずがなかつたと言うのに。「自分が何をしたのかわかっているのか

憎憎しげに詰る言葉に、彼は無言で、うつむいたままだ。

そんな大それたことになるなんて思つていなかつたと、最初のころは何度も言った。

その言い訳に、「公金横領で大それたことにならないはずないだ  
ら」<sup>うら</sup>と言つあまりにもつともな発言が帰つてくるだけだった。

何を言つても正論で叩き返される。自分に非があることはわかり  
きつてゐるので、彼はいつも無言で顔をうなだれさせたまま何も言  
わなくなつた。

不意に、暴言が途切れた。そこに立つていたのは、一族の長老。  
髪も眉も睫毛も髭も真白に染まり皺んだ、目鼻の区別の付けにくくそ  
の顔を、彼はぼんやりと見ていた。

「盗んだ金は、いかほどだ」

ここにつれてこられた初めて普通に話しかけられ、ぼんやりと顔  
を上げる。

「いかほどだ」

重ねて問い合わせられおずおずと、おおよそと思われる金額を呟く。  
老人は顎鬚をもてあそびながら、その金額を反芻した。

「少ないの」

呟きは小さかつたが、誰もが黙りこんでいたため妙に大きく響い  
た。

「わしの聞いた話では、その十倍ではきかん額だつたが」  
その言葉に、牢の中で愕然と老人を見上げる。

「俺は知らない、そんなの、俺の権限で動かせるはずない。今いつ  
た額だつてぎりぎりのところだつたんだ」

「わしもそう思つ」

老人は再びその顔を覗き込んだ。

「アルカンジエルが出立して、ようやくお前の監視が緩んだ」

そこまで言つて、再び、男に問いただす。

「牢の中で、どのような扱いを受けた?何を聞かれた?」

「そんな、俺はただ、帳簿の改ざんを指摘されて、それから、金を  
何に使つたか、返却は可能かとか、そんな普通のことを聞かれただ  
けで」

「確かに普通じゃな、こつして面会ができるのも、その程度の罪で

あればそれが普通だ」

「なあ、外で何が起こつたんだ」

「もういい、お前には関係ない」

それだけ言い捨てると老人は再び、獄舎を出ようとする。慌てて周囲の人間もそれに付き従おうとしたが、老人は手を振つて制した。しかし、そのうちの一人の青年だけは、無言でその後を追う。

「どうやら、一族すべてが上にはめられたようだな」

傍らに寄つてきた青年に、老人はそう囁く。

「おかしいと思つたんじゃ、あれだけの金額、それをあつと『間に使い果たしたとなれば、役所より先にわしらが気付くわ』

「実際は、十分の一もない金額ですか」

「おそらく最初に、わしらがされた説明は間違いだつたと言つことになるじゃろう。そして、奴はしかるべき刑に処される。奴に関してはこれで終わつた」

獄舎は広大な空間の真ん中に建つている。その先に転々とまばらに樹木が植えられていた。

脱走者が出了たとき、隠れにくいやうにといふ措置だらう。

明るい日差しをさえぎる物もなく、老人の息は少々上がり氣味だ。

「上の狙いは、アルカンジエル一人だったのだろうな、そのために、奴は利用された。どこの一族にも、探せばあのような穀つぶしが一人ぐらいいるものじや」

吐き捨てるように呟く。とにかく、先方の木陰までもう少し歩かねばならない。

「アルカンジエルを罷にはめるために、すべては仕組まれたと言つのですか」

「アルカンジエルは少々目立ちすぎた」

その口調には苦渋の色が濃い。

ようやく枝を大きく張り出した樹木の真下に来て、幹に手を付いてため息をつく。

「無論、最大の狙いは、隣国のセレク大公であることは間違いがない。しかしそのために本国の優秀な軍人を相打ちさせようとは、亡国を行ひじゃ」

息を整えながら、樹木に寄りかかって座り込む。

その老人に、自分の上着を脱いで、扇いでやりながら、青年は考え考え、今現在の王宮のありようを呴く。

「最後の良識派と言われる、あのご老人がなくなつてからですね、このような無体が横行するようになったのは、その後老人の若いころを髪髷させると評判のアルカンジエルが、そんなに目障りだつたのでしょうか？」

「わしの見たところ、そんなに似ておらんがな、とはいえ、もう少し生きていてほしかつたのは本当じや、あるいはちゃんとした後継者を育てていただきたかつた。

苦悶のうめきに傍らの青年は眉をひそめる。

「アルカンジエルは、生きて帰つてくるでしょうか？」

「わからん、かの国の誘いが、罷でないという保証すらない」

「かの国の行いも、だいぶ亡国の行いな気がしますが」

木の幹に寄りかかつていた老人は再び身を起こす。

「生きて帰つてくるかどうかは賭けじや、だが、我々にはせねばならんことがある」

老人は、重々しく答えた。

「こちらで、アルカンジエルの立場を少しでも守ること」

「アルカンジエルの立場ですか」

「もはやアルカンジエルは戦場に旅立つた。ここができることは何

一つない」

その言葉に青年は頷く。

「生きて帰つてくると信じるしかない。そして、生きて帰つてきたときのための布陣を今から打つておく、それしかできることはない」

それはとても難しそうだ。そう青年は思ったが口には出さなかつ

た。

一族の中でも、誰が信用できて誰が信用できないか、そんなところからはじめねばならないかも知れない。

木陰での小休止を終えると、ゆっくりと歩みを進める老人の後を、青年は再び付いて歩く。

とりあえず、この老人に、自分は信用できると判断してもらえたのが嬉しいような重圧のような、そんな困惑交じりの感情をもつてあましながら。

それでもまっすぐに一人は前を見据えていた。

## 第六章 破壊された伝説

行軍は奥まつた森の中を進みだす。

この場所は、セレク大綱の領地に入るための死角になるといふ。いかにも鬱蒼とした奥の見えない森の中、行軍は限界まで引き伸ばされた。

「大丈夫か、こんなとこ通つて」

先頭を馬で進むアルカンジエルは、背筋に冷たいものを感じた。その横を進むサージェントは、呆れたように答える。

「ちゃんと書類には書いてありましたよ、ここは危険生物が生息している可能性があるため、ほとんど人の出入りがなく。そのため盲点になつていてる」

アルカンジエルは前方を睨んだ。そして重々しく呟く。

「死にたくないな」

「そうですね」

「俺はどうしても生きて帰りたい。そして、こんなアホな提案に乗つた上層部の大馬鹿を心を込めてぶん殴つてやりたい」

ぎりぎりと食いしばつた歯の隙間から宣言する。

「ぶん殴ろうが、縊り殺そうがお好きなよう」。とにかくこの森を抜けて、生き延びるのが先決ですが」

サージェントは前方を目を細めて見つめる。

「先発隊を出しておきましたし、その報告を待つてできる限りゆっくり進むしかありませんね」

「先発隊が遭難しなけりやな」

昼なお暗い森の奥という言葉がしゃれにならないくらいの見通しの悪い道を彼らはゆっくりと進む。

「先発隊の奴、食われてないだろ」

「もしそうなら残骸くらいは残っているはずですし、食われて、相手を満腹にさせれば、更なる犠牲は出ないでしょ」

情け容赦ない言葉に、アルカンジエルは思わずのけぞった。

「冗談、だよな」

「私は冗談が嫌いです」

真顔で答えられて、アルカンジエルは自分の運の悪さの一環はこのいつのせいなんぢやないだろつかと真剣に考えた。

アルマは、前を歩く人間が踏み固めた道をゆっくりと歩いていた。道幅は、馬車一台が通るのがやつと。その道にも大きく張り出した枝が視界をふさぐ。

時折、馬車にぶつかって、枝が折れる音がした。

行軍は時々止まつた。馬車が入れないほど樹が密集しているときは、その樹木を伐採するためだ。

長年人の通らないこの森は、樹木の樹齢も相当なもので、伐採に相当の時間がかかることも多かつた。その巨木を伐採し、それを脇にのける、その作業に兵士達も疲労困憊している。

おそらく先頭あたりならば、この時ならぬ集団に、逃げ去つていく小動物の足音が聞こえるかもしない。

密集した樹木の張り出した枝に日差しはさえぎられ、やや肌寒い。薄暗い視界は、アルマにとつて不利だ。目を覆う布を軽く引いて整えなおす。

時折鳥のざわめき声が聞こえる。そしてそのたびに周囲の人間は軽く悲鳴を上げる。

「魔の森だ」

咳きは次第に広がる。

ドール王国内に悪名高い魔の森。その奥地に踏み入るものは絶えて久しい。

「魔の森を通りと知つていれば」

「ああ来るんじやなかつた」

後悔の呻きがアルマの周囲に巻き起こる。

旅人だけではない、無言で進む監視役の兵士達、彼らの顔も引き

つっている。

ドール王国の魔の森、ここは近隣住民なら誰もが知っている恐怖地帯だ。

森の木の伐採や、果物類。茸類の収穫。はては狩人まで、ある一定の場所を越えてその内側に入ることはしない。

入つて生きて帰った者はいないとされている。

アルマ自身も入ったことは何度があるが、案内人は、決して、目印にした岩の場所より奥に入ろうとしなかつたし、それをアルマにも許さなかつた。

そろそろ安全とされる場所を越えようとしている。

アルマも表立つて怯えた様子は見せなかつたが、手のひらにじつとりと汗をかいていた。

荷物に刃物を隠し持つてゐる。それをすぐ抜けるようにすべきだらうか。

そんなことを考えながら、前方を見据える。

肌があわ立つのは寒いからか、それとも自分は恐怖しているのか。そんなことを考えながら一の腕をさする。

それでも淀みなく、その足は前に進む。

ここで逃げ帰つても後は野垂れ死ぬだけだ。それに、周りの兵士も、逃がすよりは斬るほうを選ぶだろう。

進むしかない。泣き言を言いながらも、誰も足を止めない。ゆつくりと、死地を進む。全身を張り詰めて、ほんのわずかな刺激で破裂するそんな緊張感あふれる空氣はいつまでも続いた。

馬車の中で、リュシーは恐る恐る窓から外を覗いていた。

外は暗い、そして、馬車の中は、明かりをつけることを禁じられていたのでもつと薄暗かつた。

つい昨日まで知らなかつた。魔物が棲むという森の中を進んでいた。

昨日初めて、どういう場所を通うことになつてゐるか聞かされた

のだ。

できれば知りたくなかつたと心から思つ。

子供の頃から何度も聞かされた。大昔、魔物の襲撃がよく起つた頃の話。

リュシーの祖母は、リュシーがあまりにおびえるので面白がつて、その凄惨極まりない話を夜寝る前にしてくれた。

おかげで、おねしょが収まるのが大幅に遅れた。

しかし、おやすみなさいと寝支度をしている孫娘に、腹を食い破られて内臓を食われただの、手足がばらばらに散乱して、血の海にどこのものともわからない肉片が散らばつていただの。骨をボキボキに折つて食べやすくしてから食べられただの。悪夢を見るのは確実な話をそれはそれは楽しそうにしてくれた祖母を今でも心から恨んでいた。

聞いたところによると、母親も自分の祖母、リュシーにとつては曾祖母にまつたく同じことをされたと語つていた。

まさか、順送りと言うわけでもあるまいに。そうリュシーはぼやくしかし、すでに故人となつている母方の親族に恨み言を言つても、届くわけもなく。姿勢を低くして窓を覗き、かすかな物音を聞いて身を伏せる、そんなことを繰り返していた。

その奇行に呆れたのか、アイーダがため息をついた。

「リュシー、変異体が今もここに生きていると言つのは、確認されていらない噂に過ぎませんよ」

人形のように坐っていたアイーダがそう囁く。

微かな物音にも敏感になつていていたリュシーはその場で飛び上がつた。

「お、脅かさないでください」

「私はそんな大きな音を立てましたか？」

怪訝そうに問い合わせられて、リュシーも言葉に詰まる。

「心配することはないと言つたのです、私は、その生き物に遭遇する可能性は極めて低いと思います」

そういわれてリュシーはまじまじとアイーダを見る。

それからあの糸玉事件の後に久しづびりにまともな会話が成立したこと気に付く。

「それに万が一出た場合は、それこそ私の仕事でしょう、ですからそんなにびくびくする必要はないと思いませんか」

しばらく考えて、やつと思いついた、そういうえばこの人魔女だった。

「ほんと手を打つて納得するじぐさに、どうやら本<氣>で自分が魔女だと言つことを忘れられていたことに気付き、アイーダの頬がわずかに引きつった。

「それに、近づけばわかりますから、今のところ、この隊の近辺にそれらしい生き物はいませんよ」

この日、初めてリュシーはアイーダを尊敬した。

今まで手のかかる我儘な上司だと思っていてどうも申し訳ありません。でも我儘も実力があつてはじめていえることですよね。と、心の中で謝罪する。

そんな心中をアイーダは知らず、ビックリしたむきな視線を向けるリュシーに小さく安堵する。

どうやら、元に戻れそつだと。ぎすぎすした空<氣>の漂う今までの状況は、アイーダも居心地の悪いものを感じていたのだ。

少々ずれた相互関係の補修を終えた一人に唐突に声をかけてきたものがいた。

馬車の御者席に坐っていた士官だ。

「アイーダ殿、そういうことはもつと早く言つてくださいませんか」

御者席に坐つて聞き耳を立てていた彼はそう苦情を申し立てた。

「それなら、最初にアイーダ殿はこの森の魔物が出てきたらすぐわかると、言つておいてくださいよ」

「それなら、今言えばいいんぢやない、魔物が出ても魔女様が退治してくださるとか、魔物が近づいてくれば、魔女様はすぐにわかるとか、今からでも遅くないんぢやない」

リュシーの提案にすぐに乗ってきた。

「そうするわ、今からでも言つたほうが良さそうだしな」

そう言つて馬車の傍を歩く歩兵に話しかけ始めた。

その歩兵から伝言で情報が伝えられていく。

「願わくば、妙な伝言ゲームにならないことを祈るしかないわね」

「魔物は私が何とかすると言つことだけ伝わればいいのでは？」

「それですめばいいんですけど」

リュシーは思案顔で御者席を見つめた。

その懸念は当たつていた。

御者をしていた士官から伝えられた兵士は、次々と周りの仲間に伝え、その仲間も同様にし、そのまま尾鱗胸鱗が生え出し、どんどん話が大げさになつていった。

そしてアイーダに関する人物評も大きく歪んだ形になつていた。

イリスのところにその噂が飛び込んできたとき、思わずイリスは笑つてしまつた。

誰が慈悲深いって、誰が慈愛に満ちただって、と胸のうちに罵る。苛々と肩までの髪をいじりながら詫まわしい思い出を反芻する。かつて、アイーダ付きの仕官として三ヶ月勤めた。

今思い出しても不愉快で忌まわしい日々だった。

アイーダ付きの士官の最長記録はその三ヶ月だった。リュシーを除けば。

影でリュシーは奇跡の人と噂されている。

もし噂どおり、アイーダが慈悲深ければ今もイリスがアイーダ付きの士官を務めていただろう。何でそんなにたらめが添付されてしまつたのだろう。

そこまで考えてすぐに思いつく。

希望的観測や願望をそのまま事実と思い込もうとしただけだ。

内心馬鹿馬鹿しく思いながら、傍にいた同僚にこう囁いた。

「アイーダ様が慈悲深くなんて余計なことは言わないで、事実と思

われることだけ伝えてね

「魔物を駆除するまでならともかく、何でそんなわかりきったことを言わなきやならないのよ」

あつさりと流されて、そのまま他の兵士達に伝える。

それでも、また尾鱗が付くのは時間の問題なんだろうなと思いながら、それを伝達するため走り出した兵士を見送っていた。

そしてその噂は少しづつ、旅人達の間にも広がっていく。  
しきりにその話を聞き返す隣を歩いて行く男を横目でアルマは見ながら耳をそばだてる。

この対に魔女がいるから、魔物は出てもすぐに退治される。

その情報を吟味する。

つまりこの森はすでに不可侵の森ではなくなったと言ひうこと。  
おそらく、この旅団が、セレク大公の砦を奇襲することに成功すれば、誰もがその事実を知ることになる。

今現在の安全は確保できた。らしい。

今馬車の奥にいる魔女が、周囲の旅人達が言つほどお優しいかはともかく。魔女か魔法使いがいれば、大体の脅威は除けるから。  
そして、その噂がどんどん広がっていくのをアルマは黙つてみていた。

いつの間にこうなったんだろう。

先頭を進んでいたアルカンジェルとサーデントは休憩を取るために自分達の使っていた馬車に戻るうと引き返してきた。

何故か、周囲の人間の顔がさつきとは別人のように明るいのが気になつた。

明るいと言つても、満面の笑みを浮かべているわけではない。ただ、先ほどまでの重苦しい、重力が歪んだような陰鬱さが消えているだけだ。

そして何事か囁きあつてゐる。その単語を拾つて言葉を組み上げた時、それを幻聴と断じた。

「どうやら耳がおかしくなつたらしい、それともおかしくなつたのは頭か」

「何の戯言です」

「だつて、誰が慈悲深い魔女だつて？」

「ここに魔女はアイーダしかいない、今の今までアイーダにその種の形容詞が掲げられたことは一度もなかつた。」

「それは私も聞こえましたが」

「お前にまで幻聴が聞こえるようになつたのか」

「二人同時に聞いたなら、幻覚でも幻聴でもないでしよう。どんなに信じがたくても」

サー・ジョンントの言葉にアルカンジエルはその顔を覆つた。

「信じがたいにもほどがあるわ」

アルカンジエルは馬から下りると、手近の兵士にその馬を預けた。その上でリュシーを呼び出すように命じた。

程なくリュシーはやつてきた。そして事の顛末を聞くとふにゃとどこかほうけたような笑みを浮かべた。

「あーこの噂ですか、噂に尾鱗が付くつてよく聞きますけど、この短時間でよくまあここまで付き捲つたなと思つてたんですよ」

あははーとお気楽に笑う。

「途中でイリスが註釈入れたはずなんですけどねー」

もともとはアイーダが、この森に棲む魔物ぐらいなら自分ひとりで楽勝だと豪語しただけだった。それが、アイーダのことによく知らないものたちの願望で慈悲深いだのお優しいだのアイーダを知る人間にとつてありえない形容詞がつきまくつただけだった。

「あーなんだそんなことか」

先ほどの疑問に一応の解決を見てアルカンジエルも安堵する。

「そういうことは森にはいる前に言つておいてほしかつたですね」

サー・ジョンントのこめかみが引きつる。

「事前に聞いたんですか」

リュシーの問いに一人は沈黙する。

事前に情報を集めなかつたのは確かに一人の手落ちだ。この種のことは魔女であるアイーダが詳しいといふことぐらいすぐ思いついたはずだった。

「後でアイーダに俺のところに来るようになと言え、リュシーはもう戻つていい」

リュシーは無言で一礼すると身を翻した。

「参つたな、魔女か、魔法使いがいれば、この森の脅威は脅威じやないか」

「魔女や魔法使いが付いた高貴な人物は、そこそこいますしね」「アルカンジエルとて高位貴族出身の一将軍に過ぎない。それでも成人と同時にアイーダが来たのだ。

王族ともなれば幼児の時期にお守り役として付けられる。そうなればそれなりの数魔法使いと言つ人種はいるのだ。

「それにしても、この森は、魔法使いさえいれば抜けられるとして、どうしてかの組織はその事実を隠蔽し続けてきたんだ」

「文字通り、聞かれなかつたからではないですか」

サージェントの言葉にアルカンジエルは眉をひそめる。

「こちらから知りたいと言わなければ、あちらもいつまでも教えてくれないでしょうね」

サージェントは、リュシーの去つていく背中を見送りながら呟く。かの組織は何のために存在しているのだろう。

改めて疑問に思う。

最初の王といわれるドールの時代ならばまだわかる。無力で無知な人間達には導き手が必要だつたはずだ。

しかし今は、それなりに復興し、それぞれの国で一応の文化的生活というものが確保され、広大な農地や、都市の商業施設など、かつて崩壊した文明にははるかに劣るもの、そうしたもののが出現し、もはや、魔法使いに頼らねばならない事態と言つものは年を経るごとに減つてきている。

もはや人間に魔法使いは不要と言い出すものたちすらいるのが現

状だ。

アルカンジエールのような貴族や、王族に付き従うためだけにいると考えているものも少なからずいる。

いずれ、どこかの国と、かの組織とがぶつかるのではないかとアルカンジエールは懸念していた。

アルカンジエールの望みはそれが自國ではなく、自分がその矢面に立つ羽目になりたくないと言つことだけだったが。

何しろ、かつて世界を破壊しつくした恐るべき武器を今もかの組織は所持し続けているというもつぱらの噂なのだ。おそらく使わないと思うが、世の中には万が一と言つ言葉もある。

係わり合いにならないのが一番いい。

問題はそれがアルカンジエールの自由意志ではどうにもならないことだ。

「とりあえず、俺は寝床に戻る。何かあつたら起こせ」

そう言つて自分の使つている馬車目指して進む人間の間を逆送していく。

そしてようやく己の寝床に潜り込むと、そのまま無理矢理眠ろうと目を閉じた。

注して疲労していない身体では、そつそつ眠りは訪れず、いらいらと闇の中で何度も寝返りを繰り返す。

馬の進む音と、小石に乗り上げてゆれる馬車の音は、普段は安らかな眠りを約束してくれるのだが、今日に限つてはその限りでないようだつた。

これから馬車が止まり、もうすぐ小休止の時間がやつてくる。

夜の闇の中で、この森で過ごすことになる。

馬車の中に陣取つてゐる自分はまだいい、しかし、寝袋や、マントをかぶつて寝る兵士や旅人達は、果たして眠れるのだろうか。毛布を被りながら、そんなことを考えた。

結局三日間森の中を進み続けた。

懸念していた怪生物らしきものを田撃するものは誰もおらず。先行していた小部隊からも犠牲者は出なかつた。

そして、唐突に、三つ並んだ岩を見つけた。

「これは、これ以上進むなの田印としておされたものだ」

アルマがその岩を撫でながら呟く。

その田印岩は、森のあちらこちらに置かれていて、ここより先に進むなど、この周辺の住民はすべてそう躊躇っていた。その岩を田の当たりにすると、とうとうこの森を抜けてしまつただとどこか不可思議な高揚感と相反する恐怖を感じた。

そして、その岩の形そして彫りこまれた最寄の地名などを読み解いて、今現在の場所を割り出そつと記憶を探る。

おそらく、この地を納める領主セレクの居城のほぼ南西に出るらしいこと見当をつけた。

この場所からその城までの距離は、騎馬の速度で約三日かかる。徒歩ならば約七日、王族とはいえ若輩の領地にしてはやや広いようだ。

いつ、旅人達の監視が解かれるだらうと、アルマは考えた。

そのタイミングが難しい。下手に早く解き放つてしまえば、密告に走る輩が出るだらうし、遅すぎれば足手まといを抱えたまま出撃してしまうこともなりかねない。

目の前には人や馬が通いなれた道が見える。

今の季節だと樹木の密集具合もだいぶ減つてきているのは、定期的に薪として伐採されているからだらう。

岩の向こうと手前ではこれが同じ森かと信じられないくらい様子が違つ。

この森は生活の場だ。

つかつに入り込んだ近隣の農民が兵士達に捕まらなければいいのだが。

思いついてしまつた可能性に、アルマは眉をしかめた。

そうなつてしまつたとしても自分にはどうしようもない。  
この時期は、それほど薪がいるわけでもないし、樹木になる果実  
の実る時期でもない。おやりくそんなものはいないだつと自分を  
納得させた。

## 第七章 セレク大公領の眞面目な戦い

セレクの砦では、難しい顔をした青年が、砦の最上階から見える森を睨んでいた。

「ジュリアス、森を睨んでも何も解決しませんよ」

部屋の真ん中にすえられたテーブルにお茶の用意をしながらそつ忠告するのは、同じく端正な青年だった。

主のセレク唯一の趣味がお茶道樂なので、その配下もことあるごとにお茶を淹れる。

本日は花茶を奮発してみた。

「お前な、よくこんな時にそんな呑氣なもん飲もうと思えるな」

ジュリアスと呼ばれた青年は口をゆがめてかわいらしい花の紋様付きのカップを睨む。

お茶を入れている青年より縦横に一回り大きい。端正ではあるが全体的にいかつい印象だ。

長い黒髪は背中で束ね、着ているものも質実剛健な、しつかりとした布地で縫われたかつちりとした黒い衣装だ。

対するもう一人の青年は、薄茶の柔らかい襞を取った衣装に、精緻な堀模様に、彩色された帯を見につけた洒落ものだ。

ゆるく波打つ髪は、肩にかかるあたりで切りそろえられており、いかにも富廷の貴公子と言つた容姿の青年だ。

「ジエルマン、お茶まではいい、だがいくらなんでも焼き菓子まで用意することはないだろう」

ジュリアスの苦情をものとせず、いそいそと先ほど侍女に命じて持つてこさせた花瓶をテーブルの真ん中にセットする。

「お茶は楽しむものだよジュリアス」

優雅に、カップを持ち上げると無骨な武人の友人に差し出した。「お前の高雅な趣味はここでは通用しない、ここは砦だ。それも国境沿いの砦だぞ、いつこゝが戦場になつたとしても誰も驚かない。

そんなところで貴族の遊戯にふけれと言うのか

「少し違いますね、いつ戦場になるかではなく、もつすぐ戦場になるんでしょ」

ジルマンはそう言って焼き菓子をつまむ。

「どの道戦場になるというのなら、今ひと時だけでも優雅に過ごすこと、これも肝要なのではないですか」

「つまり付き合えと」

ジュリアスはやむを得ずテーブルに着いた。

そしてものの数秒でカップいっぱいのお茶を飲み干した。

「火傷しませんでしたか？」

思わずジルマンは聞いた、淹れたてのお茶はかなり熱い。

「これしきのことと、軍人が務まるとも」

「いや、それに軍人は関係ないかと」

カップを持つたまま苦笑する。

「私としては、これから真面目な話をするつもりだったのですが」「それならばわざとといえ、俺は菓子を食いながら真面目な話をするのは嫌いだ」

忌々しげに、小さな可愛らしい焼き型で焼かれた菓子を睨みつける。

なんで野郎一人のお茶会で、花形に焼かれた焼き菓子なんかを食べなきゃいけないと怨念を込めて。

「潤いって大事ですよ」

ジルマンの咳きを無視して、窓辺の鳥籠を睨む。

鳥籠には白い小鳥がクルッポーと鳴いている

「今回の功労者をそんな田で見てはいけないでしょ」

その白い小鳥は、皆の鳥舎で飼われている。この鳥の性質は、どこで放されても必ずこの皆の鳥舎に戻ってくるということだ。

セレクは王宮や、ほかの領地に行くときは必ず、この鳥を同行させ、何事か会ったときは足首に短い手紙をつけて放す。

その習慣が今回も役に立つたと言つことだ。

「たとえそうでも悪しき伝言を持つてきたものは疎まれるものだ」  
険悪な視線にもものとせず、碎いた豆や乾燥した穀物などの餌を小鳥はついばんでいる。

アルファがかつて、この鳥はピジヨンと呼ばれていたと語つたことがある。

セレクとその部下達はそれを受けて、この鳥をピジヨンと呼んでいた。

鳥が運べる程度の紙片なので、短文か、あるいは、一つの単語を固有の印で示す書式表記となる。この場合は後者だった。  
秘密裏に姿を変えて、アルファとともに帰つてくる。ここまではいい。問題はその方法だ。

「本気でやる気かな」

「冗談のようなことを大真面目にやりますからね、の方は」

二人は顔を見合わせる。

できれば冗談だと思いたいが、冗談を言つてゐる場合ではないこともよくわかつていた。

「危険すぎる」

「もはや止めるタイミングは逸しました。すでに行動に移しているはずです」

その言葉にジュリアスは頭を抱える。  
氣まぐれで素つ頬狂。有能ではあるが、その有能さはどこかねじれている。

「ねじれていなけりやこんなこと思いつくか」

鬱々とジコリアスは呻く。

「どちらかと言つと、私は楽しみなんですがね」

セレクの予断を許さない性格を心から愛していいるジェルマンは満面の笑みを浮かべて焼き菓子をつまむ。

それでもだ、セレクの作戦がうまくいけばこちらがどれほど有利に展開できるか、それを考へると、わくわくと高揚する己の胸を感じる。

ジユリアスのように、国のために、民のためになどと硬い信条など持つてない。ジェルマンを動かすのは、面白いか面白くないか、それだけだ。

ジェルマンは、国内外、貧富、身分の高低に抜かりなくそれらすべてに情報網を張つている。

それもまた、面白い情報を探すため。国内有数の貴族の家系に生まれ、豊富な財源を存分に使い作り上げた情報網だ。

それに、セレクがたまたま飼いならしたピジョンが役に立つた。この小鳥は、極めて長距離の移動が可能で、国外からの情報するものの数日で運んでくる。

小型で、大量の情報を運べないのが残念なくらいだ。

その上、食べるも美味しい。小ぶりだが肉が締まって味が濃く、蒸し焼きにするこたえられないとの旨では評判だ。

このような評判を広めた裏には、情報伝達の秘密を隠すと言つ意味もあつた。

表面上は、愛玩用と、食用に繁殖させていると言つてゐる。いずれ、セレクが玉座に就いた時には、王国の情報伝達システムに組み込む予定だが、今は、いざと云つときの切り札として隠している。

セレクは王宮にいるときに事の次第を書き記した手紙をつけて、鳥を放した。

そして、懷に隠し持つていた残りの一羽を単独行動をとつているときに放したのだ。

一羽だけと言うのはずいぶんな冒険だ。小さな小鳥なので、外敵に狙われやすいのだ。

普段は最低でも一つの情報につき二羽は使う。

「本当に一か八かだな」

その運のいい小鳥の入った鳥籠を見つめて、ジェルマンはセレクの美貌のかんばせ顔を思い出していた。

その美貌とは裏腹な、ふてぶてしい物腰。ひねくれたものの考え方

方。何もかもが以外で、楽しい。

美貌だけに惹かれたわけではない。あの美貌にすべてを台無しにするあの性格が付いていたから魅かれたのだとジェルマンは思う。翻つてジュリアスは。祖父の代にセレクの祖父カールの寵臣と呼ばれていた。

幼さないセレクに忠誓を誓つて十数年、今も変わらぬ精勤ぶりだ。彼を動かしているのは純然たる儀務感だつた。

代々の続く臣下の家系の誇りというものだ。

セレクの少々どこか外れた性格を困惑の表情で見つめながらも、それでも忠誠を誓い続ける。それがお家の誇り。

忠誠心自体は疑つていなが、セレクは少々煙たがつていた。

「それで、どうする」

「何であれ、ご命令に従つや」

茶碗をテーブルにおいてジェルマンは言つべきことを言つことにした。

「セレク大公の少々規格外の頭脳を、実は疎んじておられることがござり、わかつておりますよ、ですが、あなたの望む、規格内の王子様では、国外の情勢は捌けない。それくらいわかつておられますよね」

「確かに、樂を覚えたらきりがない、あれくらい扱いにくいくらいが仕事だろう」

ジュリアスは苦笑する。

時々突拍子もないことをしでかして周囲の度肝を抜いてくれるが、それでも己の立場を理解していないわけでもないのだ。

セレクが自らの義務を果たし続ける限り、ジュリアスはセレクに従い続ける覚悟は決めている。

「まあいい、それから考えねばならんのは、アルカンジェル將軍の動向だ。どれほどこの辺の地理を伝えられたか、それも重要なつてくる」

その言葉にジェルマンは横の机から地図を持ち出してくる。

「あの森を使うとは盲点でしたね」

「もはやあの森は不可侵の森ではなくなりたと嘆つてだ」

その言葉に、ジヒルマンも眉をひそめた。

一定の深さまで入ることを忌避される森は、ある意味防護壁の役割をしていた。

それを通過されたときにはその防護壁が破壊されたことを意味している。

国境と国内の別の領主地との境界線別のこの領地の守りが消滅したと言つこと。

「これから厄介になりましようね」

ジヒルマンがしみじみと呟く

「もう一度、隣の領地との境界線問題を話し合つ必要性があるかも知れんな」

ジユリアスの口調もやや沈みがちだ。

「どうやら、太古の怪物は当に死滅してしまつたようですね」

かつて、森から這い出してきた怪物に、ちよつとした村が全滅したと言う記録もあるが、それも一番新しいもので、五十年は経っている。死滅していただとしてもおかしくはない。

本来ならば慶賀する事態であるが、その分、警戒せねばならない区域が増え、人手を割かねばならないことになると一概に喜んでばかり入られない。

もともとその境界線をどうするかで王宮に呼び出されたセレクだつたが、この事態に、もう一度この話をむしかえさなくてはならなくなるだらう。

「勘弁してくれ」

それに伴う。もりもろの雑用に田の前が暗くなる。

「そうできたらいいですね」

ジヒルマンが薄暗く笑う。

「どんなに面倒くさい雑用を山と積まれても、寝るまもなく書類を書く羽目になつたとしても、ここで生き残れないことを考えたらど

うでもいい」

妙にしみじみとした聲音に、ジュリアスも頷いた。

「そうだな、生き延びて、酷い目にあつか、たとえそうなつたとしても、死ぬよりはましだ」

二人は顔を見合させて少し笑った。

砦では急ピッチで迎撃体制が固められた。

数人の兵士に、樵や猟師の格好をさせて、進軍の様子を探らせる手はずも整えられつつあった。

基本的に、この領地で生まれ育つたものが多いので、その人選には困らなかつた。

セレクの治世は安定しており、領民も群に対して従順だつた。

両軍の衝突場所になる可能性の高い場所をピックアップし、その周辺の住民の避難誘導も行われた。

まず足手まといの住民を追っ払え。セレクの日頃からの言い分だが、戦場になるかもしれない場所にそのままどまりたいと思う人間もさほどいないので、避難自体はスマーズに進んだ。

そして、砦に籠城戦に備えて保存食料が運び込まれる。

馬や武器庫の点検。

軍備のすべての権限はほとんどジュリアスに委任されていたのでスマーズにそれらの準備は進められた。

ジエルマンは鳥舎近くの小部屋に籠つて、定期的に戻ってきた鳥の足輪を確認していた。

大量の鳥を飼うその場所は異臭がこもつていたが、ジュリアスは気に留めた風もない。

実際気にしていなかつた。

長距離から、最速で情報を発信してくれるピジョンを彼は愛していた。

最低でも異臭のことを忘れさせてもらえるほど。

紙片に書かれた暗号を、暗号集と照らし合わせながら清書していく。

発信された場所ごとに足輪の色を変えてあるので、その清書とテーブルに広げられた大陸地図を照らし合わせる。

時折、指で特定の場所をなぞりながらテーブルに肘を突いて考え込む。

清書した情報と、今までの情報を照らし合わせる作業を始める。様々な国家間の思惑、おそらくカーヴァンクル一国で済む問題ではないかもしねえ。

そして、自分も暗号集片手に発信用の手紙をしたため始めた。「この手紙を発信するときは今じやない、セレクが戻ってきたときだ」

そう言つて、書き上げた手紙を撫でる。

「この手紙を無事発信できる、そう信じていいいですね、大公殿下」窓の向こうおそらく課の大公殿下のいるであろう方向に向かってジエルマンはそう語りかけた。

皆の周囲から漣のよう、元々緊迫した空気が広がっていく。皆近くの住民は、食料持参で、皆に匿つてもらつための話し合いもなされた。

そして食料持参、勤労奉仕で話が付いた。

遠く離れた場所に逃げようとするものはいなかつた。生活の基盤から離れた場所で生きていくことに不安を感じてこないとこどもあつただろう。

しかし、それ以外にもセレクとその臣下達への信頼もまた厚かつた。

だから逃げるにしても必要最低限、必ず戻つてこられると言じて。もちろん、皆の中のことなど知らないため、当のセレクが、今現在皆の中にいないと言つことば、知られていなかつた。

皆の運用は、半分以上ジュリアスに丸投げしていたことも大きか

つたかもしれないが。

彼らはただ無心に、セレク大公とその臣下達を信じていた。

善政をしく領主であれば、盲目的に信頼する、それしか彼らにで  
きることはないから。

そして、皆の上層部にいる全員が、それを裏切ったときの反動の  
恐ろしさを自身に染みるほど理解していた。

## 第八章 つかの間の交流

アルカンジエルは軍に先んじて単騎でセレクの領地を見た。第一印象はかなり真つ当な統治がされていると言つことだ。地図上では領地の端に当たるはずなのに、荒れた様子もない。有能といわれるだけのことはあるか。

アルカンジエルはそうして、相手の力量を測る。

おそらく、アルカンジエルは恨まれる。有能な統治者を奪われた領民は大概それをしたものを恨むものだ。

もしセレクが、領民を搾取し、苦しめる領主ならばアルカンジエルの心労も少しさは和らぐだろうが、世の中はそういうまくいかない。その上、愛される主を攻めるとなれば、この地の一般市民はすべて的と考えて間違いないだろう。

水の補給が難しいのは痛いな。

頭の痛い問題はいつまでもなくならない。

森の中で、湧き水を見つけ、樽に溜められるだけ溜めていたが不安だ。

いくらなんでも井戸に毒を投げ込んでおくという手は使わないだろ。後で自分の首を絞めるだけだ。

見るのは見たとアルカンジエルは後方の陣に戻った。戻ればサージェントは苦い顔で出迎えてきた。

「将軍自ら偵察とは感心しませんな」

「こんな時だけ将軍扱いするなよ」

アルカンジエルは苦笑いでごまかすと、自分の観察結果を呟いた。

「かなり整備された、あるいは洗練されたと言つていい村だつたな。領地の外れの村でそこまできちんと整備してあるとなると」

「有能という噂は嘘ではない、しかし、統治者としての能力と戦場で戦う能力とは、相容れないことも少なくない。そのことも念頭にいれおられますか」

「俺は常に最悪の可能性を念頭においておく主義だ。その方が、後々やりやすい」

胸を張つて悲痛なことを言い出す上官をサーチェントはいつものことと諦めを含んだ声音で同意する、

「それで、そろそろ動いた奴はいたか？」

「そうですね、後少しで動き出すと思われるのですが、今のところ報告はありません」

サーチェントの言葉にそうかと落胆を隠さない顔で答える。

「民間人の解放はいつぐらいを予定すべきかな」

「今は、考え中です、もつとも一二三日の予定ですが」

その一二三日中に動き出すものがいるとアルカンジェルは確信していた。

「これからも監視を怠るな」

「わかりました、それと、リュシーはどうしますか」

「アイーダも、最近リュシーがいないのに慣れてきたんじゃないかな？ そのくらいの日になら、半分勤務で十分だろう」

「そう命じておきます」

サーチェントはあつさりとこたえた。どの道この問題についてアイーダと話し合つつもりはなかつた。

サーチェントはそのまま馬車に戻る。その途中で、アルマに行き会つた。

アルマは、華奢な身体に疲労の色を隠せない様子で、数人の旅人達と身を寄せ合つてうずくまつていた。

「大丈夫か」

思わずそう声をかけた。

アルマは視線だけを動かしてアルカンジェルのほうをうかがう。

「もうそろそろお前達に解散してもうう算段がつきそうだ。お前の目的地がここに近いといいんだがな」

なんとなく顔を覚えた少女に、親切でそう教えてやると無言で頷く。

口を利く気力もないのかと、無理な森越えを思い出し、少女が哀れになつた。

「大丈夫か」

そう訊ねれば掠れた声で、呻いた。

しばらく咳き込んだ後、ようやく出るよくなつた声で、アルマはアルカンジエルにぶつきらぼうに訊ね返した。

「それで、何の用」

その声は、その態度と同じくらいひび割れていた。

「いや、用つてほどじやないが、顔を見たんで挨拶ただけだ」

そう答えると、アルマは眉をしかめた。

「そういえば、お前達はどうやってこの軍の場所を知るんだ」

ふと思いついたことを聞いてみる。その質問にアルマはきょとんと目を瞬かせた。

「まさか知らないとは思つてなかつた」

心底驚いたと呟く顔。それにもしろ驚いた。

「いつたいどういう話になつていいんだ」

「大陸商工組織だよ、大量の物資が動くにはその組織を通さないわけにはいかないでしょ、でその情報もあそこは売るの」

つまり物資の仕入先かとアルカンジエルは心の奥で納得した。

「言われてみれば単純なからくりだな」

もつと早く思いつくべきだったことだ。と表面に出さずに反省しつつアルマの続きを促す。

アルマは水筒の水を一口含むと、ようやくまともに出るようになつた声で続けた。

「大口の取引があつたとするでしょ、その量と品物の種類と質を見極めて、それに各国の緊張状態を照らし合わせ、精度は九割五部ぐらいだつて豪語しているんだつて、まあ、命令を出せばいいお偉い方には、どうしてだらうつて疑問かもしれないけど、大量の物資が動くのをその目で見る下々にはかなりわかりやすい指標よね」

空中に指で自分の思考をまとめるために図形を記す。そしてビニ

か講義のような口調でアルカンジエルに語りかける。

その声を、アルカンジエルも神妙な面持ちで聞いている。

「確かにあれだけの食料が買い占められれば多少は物価も上がるだろうな。確かに一般庶民にはわかりやすい話だ。自分の食い物も自分で買いに行かない俺にわかるわけがなかつたつてことか」

自嘲するアルカンジエルにアルマも真顔で答えた。

「それを恥ずかしい事だつて気付くお偉い人つて珍しいよ

「微妙な警め方だな」

今度アルカンジエルに浮かんだのは苦笑だった。

「貴重な意見を利かせてくれて有難う。それじゃ氣をつけていけよ」

そう言つてアルカンジエルはアルマから離れた。

その大きな後姿を眺めながら、アルマは小さく溜息をついた。

「なんか調子狂う男だな」

アルカンジエルの噂はいろいろ聞いていた。しかし、本人を見ると本当にあの噂の人間なのだろうか。清廉潔白ご冗談をと言いたくなる。

どうしてあんな奴に対してあんな噂が立つんだと。その噂を流した人間に真剣に問い合わせたい衝動に駆られる。

「何やつてんだか、まつたく」

額にかかる前髪をかき上げ、遠ざかる背中を見つめる。

「あほらし」

そう言つて不意に視線を逸らした。

アルカンジエルは、アルマと離れた後、自分の寝床に戻った。思ったより読書は進まなかつた。棚の中の本はまだ半分も読まれていない。

実際、読書でもして現実逃避しようとした自分の試みはいつも実を結ばなかつた。

その一端をさつきまで傍にいた風変わりな少女にあるのも事実だ

が。

結局、そこまで無責任に慣れなかつただけだともいえる。たとえ、嫌々でもサーチェントがやれと言えば、それを拒むことができない。それは別に副官が怖いとかそういう問題ではなく自分の中に刻まれた仕官としての義務感のようなもの。いつの間にか植えつけられた志のようなもののせいだ。

だから、大好きな詩集よりも先ほどのアルマからの情報を精査するほうに思考が動く。

「商工組織か」

大陸の物資のほとんどを掌握していると噂されるその巨大組織のことは、あまり、興味を持つことはなかつた。

あれば便利ぐらいしか考えたことがなかつたのだ。

しかし、これからは違つ。真剣にその組織に対して接点を持つていかなければ。

そこまで考えて不意に気がつく。

これからほぼ死出の旅と言つても過言ではない進軍を今自分はしていると言つて事実に。

これからもへつたくれもない。そんなことに関わりあう暇もなく自分はもうすぐ死んでしまうかもしないときに、何将来のことを考えているのか。

いや、生きて帰れても、自分に将来などあつそうもないのに。

「どうしたんですか？」

難しい顔で考え込んでいると、サーチェントが、怪訝そうに尋ねた。

「商工組織のことだ」

サーチェントは一瞬話の内容がつかめず、戸惑つた顔で、アルカンジールを見つめる。

「商工組織の商うものは物資だけではないよつだ」

そう言って商工組織のもう一つの商売、情報屋の話をする。

「確かに、どこから何を注文される。それは何か、そういうしたこと

を突き詰めて調べれば、各国の情勢は極めて精緻に知る」ことができ  
そうですね」

言わされた情報を精査し、サーチェントもアルカンジエルの言った  
いことを理解する。

「まあ、我々は軍事畠で、物資は文官方にまかせっきりでしたしね  
手にした書類をもてあそびながら、サーチェントは溜息をつく。」

「上のほうはわかっているのかな」

「どうでしょう。それに下々のことに対する疎いと言つたらあの方達は我  
々以上ですよ」

そのとおりなので、アルカンジエルも苦笑するしかない。

大陸商工組織、それは国の成立とほぼ同時に、黎明の時を迎えた  
組織だ。

最初は、村同士の作物や手芸品の物々交換から始まつたらしい。  
それが次第に大掛かりになり、商う物資の種類も増え、いつしか  
運送や、経理に専念する者たちも現れ始め、各国にまたがる商業組  
織として、確立された。

その組織は、長老と呼ばれる代表者と、各国に駐在する運営員。  
そして大陸中の商人達で構成されている。

流通の権利を完全に独占しているのだ。

ほとんどの商人と名のつくものや、商店はその組織の構成員であ  
り、その組織の後ろ盾なくば、新たに商人となることも許されない  
と言つ。

カーヴァンクル、ドールと言つたその国の国民であつても、国境  
を越えた忠誠を商工組織に捧げていると言つ。

「国境なき組織か」

「件の組織もそうですがね」

その一つともが、各国の経済や上層部に食い込んで、もはや分離  
是不可能になつてゐる。

国は今、自國の流通を自らの手に握つていないので。

商工組織の存在があまりにも馴染みすぎてその事実に気付いてい

るものは少ない。

部もあるだらうな」

「かといって一からそれを作り直すのも困難でしょうね、自國それのみならば何とか組織と切り離すことができたとしても、他国との交易がままならない」

サージェントも深刻な顔で考え込む。

「考えたつてどうしようもないがな、それに俺達の考へることじゃないだろ。俺達は軍人だ。そのことを考へるのは、外務大臣があるいは産業大臣あたりだろ」

それをいつては身も蓋もありませんね」  
サー・ジョントはやれやれと言つた風に、苦笑した。

そろそろ開放されそうだとアルマの周囲は明るい雰囲気になつていた。

アルマはその中で一人鬱々とした空氣を漂わせていた。  
原因は少しずつアルマとの距離を狭めてくる見覚えのある顔の連  
中だ。

素行不良でカーヴィアンクルの兵士達に袋叩きにあつた馬鹿ども。それが偶然を装つてか、アルマの周囲に現れた。

明らかに距離を詰めてくる様子にアルマも警戒をせざるを得ない。自分を見る目に明らかな陥がある。

じつやらアルマの精で兵士達に目を付けられたと逆恨みをしてい  
るみたいだ。

それなしでも、いずれ制裁を食らつただろうに戸。アルマは漏れ聞いた馬鹿どもの諸行を思い出す。

軍の物資運搬用の馬車から物を盗もうとしたり、女性仕官に痴漢行為を働くこうとしたり。あるいは、ほかの旅人相手に恐喝未遂をや

あれで肅清までいかなかつたのは運がいいと思ひ。

アルマがこの場所にいなかつたとしても遅かれ早かれ田を付けられていたことは間違いない。

にもかかわらず恨みがましい田でアルマにそれもまつすぐ来ず、じわじわと距離を詰めるような真似をするのか。

ああ馬鹿は嫌いだ。

アルマは陰鬱に胸中で呟く。

来るならとつとと剝ればいいのに。

油断なく田を光らせてアルマは臨戦態勢をとつた。来るとしたら行進が止まる休憩時間かな、そう田測を立てながらアルマは歩き続けた。

農村のある、丘陵地帯を避けてその脇にある森伝いに進んでいるのだが、その休憩場所は、珍しくひらけた空き地だった。ずっと鬱蒼とした枝越しにしか見えなかつた空が、大きく見える。この時期は天候がさほど崩れない。このお天気はしばらく続くな。そんなことを考えながらアルマは空を見上げる。

そして陰険な視線をアルマに注ぐ相手が近づいてきたのを横田で確かめ。軽く肩を回して腕慣らしをする。

「いらっしゃい、いつこひに声をかけてこないからどうつかと思つたよ」

にっこりと満面の笑みで迎えてやる。

それが相手の神経を逆なですることぐらい承知の上で。

「お前が仕組んだんだろう」

恨みがましい顔で詰られる。それには本氣で心当たりがなかつたのでいつたい何のことかと、アルマは訊ね返した。

「しらばつくれるな、お前が軍の上層部の奴と親しげに離していたのを見たんだ」

確かに話していた、お前達とまつたく関係のない話を。

そう答たとしても相手は信じようとしないだろ？

アルマは無駄なことは止めたこととした。

「よくもやつてくれたな」

「その面でたぶらかしたのか」

口々に身勝手なことを口走りながら、アルマに迫つてくる。

周囲の旅人達がどよめいた。

アルマは冷静に間合いを計る。足元の小石を蹴飛ばして、正面の男の顔を狙う。

その小石は交わされたが体勢が崩れた。その隙を逃さず腹に膝蹴りを入れた。

「まずは一人」

急所を手加減なしで叩き込んだ。激痛に悶絶し、しばらく起き上がれないであろうことを確かめると、アルマはもう一人に向き直つた。

小娘となめていたのだろう。意外に手際よく戦闘不能に追い込んだアルマに、焦りの色が浮かぶ。

二人同時にかかってきた。

隻眼のアルマならば死角を攻めれば何とかなると踏んだのだろう。甘いとしか言いようがない。

背後に目があるように後ろから来たものを捌き、アルマはその腕を取つた。

そして左方向から来た相手に反動を利用して叩きつけた。

一人は脳震盪。もう一人も大の男の体重をもろに食らつたのだ、しばらく立てそうにない。

「それで、まだやるつもり」

アルマは嫣然と微笑んだ。

ざわめいていた周囲もただ沈黙が支配している。

その時、ようやく騒ぎを聞きつけたカーヴァンクルの兵士達が駆けつけてきた。

そして、その傍に、アルカンジェルが立つていた。

「どうやら、助けてやる必要はなかつたようだな」  
憮然として呟く。

「どうも、あの袋叩きを、私があなたに頼んでやらせたつて思った

みたいよ」

アルマも冷たい目で地面にへたり込んだ男達をねめつけた。

「相當素行が悪かつたと聞いていたが」

「私もそう聞いていたよ」

アルマは呆れたように答えた。

「それで、この騒ぎか、お前ら、この連中をふん縛つてその辺に転がして置け」

アルカンジエルの指示に、数人の兵士達が従い、手際よく男達を拘束していく。

「まつたく、監督不行き届きで悪かつた。それじゃアルマ、またな引き摺られていく男を見送りながらアルカンジエルは、そそくさと立ち去つた。

「いつたいなんだつたんだ」

アルマは怪訝そうに咳いた。

アルカンジエルは自らの寝床兼仕事場になつてゐる馬車の中で、サージェントに咳いた。

「あんな、凄く怪しい奴がいたんだ」

「その人相風体は？」

すかさず聞いたサージェントに、苦々しくアルカンジエルはその名前を答えた。

「アルマだ」

言われた名前に、サージェントも目を瞠る。

「すいませんが最初から話していただけますか」

「さつきな、いろいろと悪さをしていた馬鹿どもと、アルマが大立ち回りをしていたんだ。で、俺はアルマのついた嘘に気がついたわけだ」

渋い顔でアルカンジエルは淡々と話す。

「アルマが隻眼になつたのはつい最近のはずだ。隻眼になつたから、従軍娼婦を辞めたと言つていた。だがの大立ち回りで見せた動き

は、最近隻眼になつた奴にできるもんじやない」

腐つても軍人だ。そして、その動きが我流の喧嘩殺法ではなく、

正規に武術を学んだものだと言つことにもすぐに気が付いた。

「隻眼つて言うのも嘘じやないか、見えてないとは思えない動きだつた」

その眩きにサーチェントも表情を固くする。

「すぐに捕られますか？」

「いや、他に仲間がいるかもしけん、影から見張らせひ、不穏な動きをしたらその時は捕らえる」

「わかりました、それと、布で片田を隠しているんなら、見えていないんじや」

「いや、田の粗い布は案外透ける。田ヶつぎりにおけば、そして視界を妨げない」

眠いとき、手巾を顔において寝ようとしたが、光をもうに通すのでまつたく役に立たなかつた過去を思い出し、アルカンジエルはそう説明した。

「それでは」

サーチェントが部下に命令を伝えようと出て行く背中に忠告を投げる。

「俺の見たところ、腕は相当立ちそうだ。女と言えど油断するなど伝えろ」

「こんな場所まで潜り込んでくる輩です、腕に自信がないはずがありませんね」

サーチェントも神妙に答える。

その背中を見送りながら、アルカンジエルは沈痛な溜息をついた。

「嫌な商売だ」

気に入りつつあつた少女が敵であつた事実に、少々落ち込んだ。

「それでも、どうしてあいつ隻眼なんて目立つ変装をしたんだろ？」「

素朴な疑問に答えるものはいなかつた。

アルマは、別の種類の視線が自分を追つているのにすぐに気付いた。

首は動かさず横目を使って、その視線を探る。

「腐つても軍人か」

アルマはほの暗い笑みを浮かべた。

いずれにせよ、もうそろそろ居は終わりにするつもりだった。後はタイミング待つ。

衣服の隠しに仕込んだ武器をこつそりと取り出し、手の中に隠す。今は周りに人がいる。その人ごみから抜けたときが勝負。

アルマは背中に感じる気配に、意識を集中させた。

相手はかなり若い。そして未熟だ。こつそり見張るということができずに自分に気配を悟らせるほどだ。

「なめられたもんだぜ」

唇に音をのせずそう呟いた。

## 第九章 大転換

兵士達が、重々しく伝えた。

「解散」

その言葉に一同がざわめいた。

ある者は安心したように。ある者はおどおどと。それでも少しづつ距離を縮めその場から離れていく。

アルマは、とりあえず人の波に一時的に乗ることにした。  
そうして背後の気配を探る。

変わらず、一定の距離をアルマに対してもつている。

「とつと処理しちまおつ」

幸い森の近く。身を隠す場所には事欠かない。

その上これから日が暮れていこうとする時間帯だ。視界は悪くなる一方だろう。

不意に人並みから離れて、森の中に滑り込むアルマに、焦ったように戦士が追いかけてくる。

適当な木の陰でそれを待ち伏せしていたアルマは掌に握りこんだ武器、針のように細く、短い袖の中に隠しておける短剣を握りなおす。

気配を消し、蜘蛛のように獲物を待ち伏せる。

イリスは、目標を見失つて焦っていた。相手は自分より年若い少女に見えた。

それが単身、敵軍の懷に潜り込んできた。その意外な豪胆さに瞠目した。

藪を書き分け前に進もうとする。そのとき腕がつかまれた。

それが目標としていた少女だと気付き、取り押さえようとしたとき、肩を切りつけられた。

刃は浅皮膚を抉った。悪あがきかと。その腕をつかみ返そうとした

たとき、呼吸ができなくなつた。

喉を押さえ、地面に膝を着く。そして、自分を見下ろす少女の冷ややかな眼差し。

痙攣する喉。田の前が真っ暗になつていぐ。暗くなつていぐ視界を見ながら、切りつけられたのは毒刃だつたのではと思いつく。それが最後の思考だつた。

倒れて、動かなくなつた女性士官をしばらくアルマは見下ろしていたが、足早にその場を立ち去つた。

リュシーはその時同僚のクラリスに声をかけられ、イリスの姿が見えないと言われた。

「いつたいどうして」

「実は、アルカンジエル様の命令で、敵の間者と思われる女を尾行しろと命じられていたの、さつきまではいたんだけれど」

不安そうに俯くクラリスに、リュシーはその女人相風体を聞いた。

長い黒髪、細身、隻眼で顔に布を巻いている。言われてみるとかなり目立つ風体だ。

「本当にそれが、聞者なの」

リュシーは不思議そうに訊く。

「私も、妙だとは思うわよ、そんなわかりやすい格好をした間者でも密偵でもありえないとは思うけど。もしかしたら、もう一人か二人、侵入者がいるのかも。そして、自分は劣りになるためにわざと目立つ特徴をさらしているとか」

ありそうに思えた。

「だとすると、狙いは何かしらね」

そう自問自答してみるが、考えるまでもないと思い直した。

この場合、狙われるとしたら、アルカンジエルの首か、さもなければ、軍需物資だらう。

さて、自分はどちらに向かうべきか。

アルカンジェルのところへは行つても無駄だ。それにいくらあれども、その可能性に気付いていないとは考えにくい。

万全の準備を整えて、待ち構えているだろう。

だとすれば自分の行くべき場所は荷駄のほうだ。

そう判断したリュシーは、身を翻す。

「クラリスは、イリスが見えなくなつたつて、アルカンジェル様かサーチェント様に報告に行つたほうがいいわ、私も探すから」

そう言つてリュシーは走り出す。

物資運搬用の馬車は、はつきり言つて多い、その膨大な馬車のいるかどうかもわからない侵入者をリュシーは探さねばならない。御者を勤める兵士や、警備の兵士達に早口でその情報を伝える。そして、リュシーは周囲を見回した。

「知らない顔はいないのよね」

その言葉に、全員が頷く。

大所帯だ。その全員が全員を知つてゐるとは限らない。せいぜい自分の属する部隊の全員くらいだろう。

それがわかつてゐるから、リュシーもそのことには何度も念を押す。

そして、リュシーは、荷駄にもたれて、暗くなつていく空を見上げた。

クラリスによつて、イリスの行方不明が告げられてすぐ、イリスが遺体で発見されたとの情報が入つた。

運びこまれた遺体をアルカンジェルとサーチェントが確認する。肩口に浅く着られた跡以外目立つた外傷はなく喉を搔き垂つたような跡がある。

しかしのどに絞殺の形跡はない。

「毒を塗つた刃物ですね」

遺体の状況をざつと見てサーチェントが呟く。

「おそらく、そう大振りじゃないだろう。服の下に隠し持てるぐら

いのもんだろうな」

アルカンジエルの顔はとにかく苦い。もつと早くアルマが怪しいと氣付いていれば出さずにはんだ犠牲だ。

「もういい、遺族に渡す遺品だけとつて埋める  
アルカンジエルの言葉に、傍らにいた兵士が硬い表情で頷く。  
埋めてもらえるだけいい。状況次第では、遺体を放置し、腐るに任せあるいは禽獸の餌になるに任せることも珍しくない。  
貨物をくるむに使われた目の粗い生地がそのままイリスの屍衣となる。

厳重にくるまれた遺体が運ばれていくのを見送りながら。アルカンジエルは深い溜息をついた。

「アルマはまだ見つからぬか？」

「そのような報告は受けておりません」

サー・ジョントは表情を崩さない。

「まだたった一人ですよ」

その言葉に、アルカンジエルははじかれたように顔を上げる。サー・ジョントは無表情に続ける。

「どの道、何人生き残れるかと言う戦況です、一人死んだぐらいで落ち込んでいる暇などありませんよ」

言われて、アルカンジエルは虚ろに笑う。

「そうだな、死ぬとなつたら、数百人は軽く死ぬな、これは戦争だから」

初陣を済ませたばかりの若造ではない。イリスの死はすぐに脇において置けることだ。

「アルマ一人だと思つたか」

「思いませんね」

思案深げに答える。

「俺もそう思う」「うう

そのまま薄暗く暮れゆく空を見上げる。

闇が深くなる。アルマは手持ちの武器に再び毒薬を塗りこんだ。大振りの武器は持ち込むのが危険と判断した。いざと言つときは敵のものを奪えればいい。

手持ちの袋に入っていたのはほとんどが食料だったので、捨てても問題はなかつた。

武器以外は何一つ持たない身軽な身体で、木の上から様子を伺う。どうやら自分を探しているようだ。

いつもなら数名の歩哨を置いて、休憩に入るはずの兵士達は、今も忙しく動き回つてゐる。

いつまでもここにいられない。胸のうちで呟くとアルマは隣の木に乗り移つた。

枝のしなる音は、周囲の兵士達の喧騒でかき消される。

「馬鹿だ、こいつら」

呆れたようにアルマは呟くそして枝から振り子のように身を躍らせ、その場に居合わせた不幸な誰かの喉をえぐつた。死骸の倒れる音に、振り返つた兵士の目には、アルマはいきなり空中から現れたとしか見えない。

驚愕を顔に張り付かせた相手を、アルマは無造作に葬り去つた。瞬きするほどの間に、死骸が二つ。幸いにも少々離れた場所に居合わせた兵士が絶叫を放つた。

その相手に、アルマはにつこつと微笑みかける。

「敵だ、敵が現れた」

そう絶叫し続ける男はまだ若い。叫んでいる間に剣を抜けばいいのに。

そう思つたときにはアルマは細い投擲用針を投げていた。大きく開いた口にその針は吸い込まれていった。

ほんの数分間の殺戮を終えるとアルマは再び身を翻した。悲鳴を聞きつけたほかの兵士達が、その背を追つが、身軽に木に乗り移り、すると猿のように、高く登つて、別の木に飛び移る。

その動きに翻弄されて右往左往し始めた。

暗くなり始めた周辺、たいまつを持ってアルマを探し始める。そのたいまつめがけてアルマは小石のようなものを投げた。

それは盛大な音を立てて破裂し、周囲に火の粉を撒き散らした。悲鳴を上げて、服に燃え移った火を転げまわって消そうとするもの、破裂した際に生じた光に、目をやられその場でうずくまるものの、様々な狂態が巻き起こる。

その轟音を聞きつけて、アルカンジエールはこめかみに冷や汗をかきつつその方向を睨む。

「やっぱり、奴は陽動を担当したようだが、いつたい何をやらかしているんだ」

再び聞こえてきた轟音と光に。アルカンジエールは呆れ返った。「騒ぎを起こすにしてもやりすぎですね、或いは、元々ここがあれの領地ですから、この騒ぎで、連絡を取るうとしているのかも」

「つまり迎えに来てくれってことか？」

「課もしれませんし、迎撃準備を終わらせないと言つ合図かもしれません」

万全の備えで自分達を迎え撃つ準備をしていくと言つことか。

「しかし、セレクは不在なんだろう」

「部下が優秀なんでしょう」

その言葉に、微かに嫌味を感じた。それでも多くを問うことにはしなかつたが。

「まあいい、俺は行くぞ」

「どこに？」

「決まっているだろ？ アルマのこところだ」

サー・ジエントは爆発しそうになる。どこかの世界に、たつた一人の侵入者相手にのここ出て行く将軍がいるのだ。

「貴方が行つてなんになるというのです、この場合、貴方のなさらねばならないことはこの場で、アルマが引っ立てられてくるのを待

つことだけです

サー・ジョンントの正論にアルカンジールは將軍としていつてはならないことを言つてしまつた。

「それは、確實にアルマが引っ立てられてくる」とを前提としているだろ?」「

ひくつとサー・ジョンントのこめかみが引きつった。

「それは、貴方の部下が失敗すると言つことですか、わかつておいででしょうが、それは将として決して言つてはならないことですよ」

以前から將軍としての自覚が足りないと思つていたが、ここまで

とは思わなかつた。サー・ジョンントのこめかみに青筋が浮かぶ。

「そつは言つていながな、しかし、アルマも逃げ切る勝算なしにここまで派手な行動はとらないんじやないか」

そつ言つて、そのまま爆音の聞こえるあたりを目指して歩いていく。

「勝手にしろ」

もはや部下としての体裁をかなぐり捨てたサー・ジョンントの罵声を背中に受けながら。

アルマは、敵の刃を潜り抜けながら、森の中を走つた。

少々着ているものがぼろけたが、さしたる負傷もせず、藪や、木

陰を渡りながら、敵を迎撃する。

軽く弾んだ息を整えていると、間の抜けた声をかけられた。

「おーいアルマいるか?」

まるで、そこにいる友人に話しかけるようなのんびりとした呼びかけに、アルマは、足をもつれそうになる。

それでも投擲用の針を両手に構えると、間合いを計る。

どうしてもこの手の武器は弓矢よりも、射程距離が短い。

のこのこ来てくれるならばありがたいかもしけない。さつと始末してしまお?。

アルマは予想外の展開ながら、その中で最善と思われる行動をと

ることにした。

射程範囲まで近づいてきたその時両手が一閃した。

抜き打ちに針をすべて叩き落す。

「お前の腕がよくて助かった。きつちり人体急所にきたからな」  
針が落ちる甲高い音にまぎれて舌打ちが聞こえた。

「この量を一度に投げるとは、情け容赦なさすぎな気もするが」  
月明かりを反射して輝く針に視線を落としたが、その時、アルマ  
は後ろに飛びのいて、さつき始末した兵士の剣を拾っていた。

「お前、もしかしたらと思ったが、やっぱり男か」

剣を構えた姿のままアルマは笑う。

「どうして氣が付いた」

「なんとなくだな、しかし、役者になつても成功するぞ。男が女に  
化けるときは、過剰に女らしさを演出する傾向にあるしな。あんな  
にそつけない態度で、男だと疑われんとは」

アルカンジエルは本気で感心していた。

「誉めても何も出ねえよ」

アルマは苦笑した。

「で、わざわざ殺された部下の仇討ちにでも来たのか」

「何が気になつたのか、それを知りたかった」

「なんだそりや」

二人はそのまま抜き身の剣を構えた。

リュシーは荷駄の傍で待機を続けていた。

「あ、しまつた、アイーダ様に遅くなるつて言わなかつた」  
最初は騒ぎを聞きつけて、様子を見てくるだけのつもりだったの  
だが、予想外に、その時間が長引いて、その上今この場所を離れら  
れそうにない。

「誰か、伝言を頼めませんか」

そう言って周囲を見回す。

「気にすることはないんじやないか」

「なんかに捉まつて戻れないってあちらも流石に察するだろ?」「

そう口々に言われ、それもそつかと納得する。

もう子供じやないんだし、晩御飯くらい一人で食べられるだろ?う

し。

そう思い直してリュシーは再び周囲に目を凝らす。  
だいぶ、あたりは暗くなつてきていた。いつもならば休む支度をしている時間だ。

アイーダつきなので、リュシーは基本的に夜勤が付かない。

「久しぶりの夜勤だと、なんか調子狂っちゃうね」

その言葉に周囲から失笑が漏れた。基本的にアイーダが気難しくて扱いが難しいのは誰でも知っている事実なので、そうした優遇もさほど妬みの原因にはならない。

それでも周囲の空気に意識を凝らしていると、聞こえるか、聞こえないかの小さな足音を聞いた。

仲間じゃない。基本的に、足音を殺す必要などないからだ。  
それならば誰だ。

その自問自答は一瞬だった。

敵と判断し、自らの剣を引き抜いた。

女性仕官とはいえ、鍛錬自体は、男子と同様に、それ以上に厳しくとりおこなつている。そういうの相手に遅れをとるつもりはなかつた。

リュシーが剣を引き抜いたのを見て、周囲の男達も我先に武器を取り出す。

「いたぞ」

押し殺した声、すっぽりと頭巾を被つたひよる長い身体を見つける。体格から男と判断したが、それ以外はまったく見当が付かない。頭巾の陰になつてその表情は読み取れない。一人が斬りかかつて行つた。

するりと切つ先を潜り抜け、切りかかつた男は踏鞴を踏む。

他のものが弓を持ち出した。しかし、すり抜けるように当たらな

い。

ゆらりと、妙にゆつたりとした動きだが、瞬間的にかなりすばやく動く。

攻撃をすり抜けるだけで、向こうからは何の攻撃もない。ただ、確実に、荷駄に近づいてくるだけ。

「何なのよ

荷駄に背中をつける状態でリュシーが相手を迎撃とうとした。頭巾の端からおそらく色素の薄い髪が覗いているのがようやく見れた。

その手には何も持っていない。まったくの素手で剣を持っている士官に突っ込んでくるのだ。

リュシーの視界が赤いもので塞がれた。

一瞬ほうけたリュシーは、背中が妙に熱いことに気付いた。振り向けば、荷駄が燃えている。

このままでは背中をやけどすると横に飛びのいた。その時、さつき見えた赤いものが、アイーダの髪の毛だったと言つことに気付いた。

アイーダは、さつきと寸分変わらない場所に蹲つていた。そして天を仰いで物凄い悲鳴を上げていた。

若い女の悲鳴と言つより、猛獸の叫び声。何事と放心状態でその光景を見つめる。

だが、その足元を見たとき、リュシーは凍りついた。ほとんど炭になつた右腕が落ちていた。

よく見れば、アイーダの袖も焼け焦げている。

そのままアイーダは地面に崩れ落ちた。慌てて駆け寄りつましたが、目に見えない力で弾き飛ばされる。

「下がりなさい」

アイーダの掠れた声が聞こえた。

「まだそれを言う気力がありますか」

低い男の声、それがさつままでリュシーと相対していた頭巾の男の声だと、ようやく気付く。

「逃げなさい、リュシー」

明確に下されたリュシーへの命令。しかしそれを聞くわけには行かない。

「足手まといだと言つていいんですね」

アイーダの声に感情が混じるのをはじめて聞いたかもしれない。そんなことを考えながら、リュシーはアイーダの前に立とうとした。

「無駄です」

男のどこか虚ろな声。

別の荷駄も火を吹いた。

燃えている荷駄の数を冷静に確認すると、男は身を翻し、その場を立ち去った。

後を追おうとする兵士達をアイーダが止めた。

「無駄です、高位魔法使い相手、死に行くようなものです」

そのままアイーダは悔しそうに燃えていく荷駄を見つめる。

「あの、傷は大丈夫なんですか」

リュシーは恐る恐る。蹲るアイーダの身体を覗き込んだ。やはりない。右腕は綺麗に焼失している。

「痛くないですか」

「痛いに決まっているでしょう。とりあえず、彼に殺意はなかつた。命拾いしましたね」

わずか数分で目に見えるほど憔悴したアイーダに、とりあえず医者のところに連れて行くことを提案する。

「そうしてくれると助かります。私はこれから氣絶しますので、運んでください」

そのまま左に身体がかしいだ。ひとつに肩をつかんで支えると、意識を失っているのを確認する。

「その、燃え残っている布を貸して」

アイーダには申し訳ないが、意識を失つて文句を言える状態でないのはありがたい。

アイーダを布でくるんで、荷物のよつにして、背中に背負つ。

「アイーダ様の負傷は、アルカンジエル様かサージェント様以外にはけして話さないで、理由はわかるわね」

そう言って、リュシーは身軽にその場を走り去つた。

リュシーは医療班のいる場所に辿りついて、その閑散とした雰囲気に奇妙の念を覚えた。

なんでも侵入者は、負傷させると言つ穩健な手はとらず、行き会つたものはすべて殺害されており、仕事がないのだそうだ。華奢な少女に見えた侵入者の意外な凶暴さに、リュシーも驚いた。しかし、布を解いて、右腕を失い気絶したアイーダを披露したときには驚くどきの騒ぎではなかつた。

「いつたい誰が」

石を呑んだような沈黙の後、ようやく擱り出すよつに尋ねた言葉にリュシーは先ほどの一件を事細かに説明した。

「高位魔法使いの侵入者」

その言葉ははつきり言つて棒読みだつた。

信じたくないのだろう。薬瓶を持つ手ががたがたと震えている。

「そんなことより、仕事してください。どうせ破壊するもんはすでに破壊してゐるんですから、もうここから離れているんじゃないですか」

とにかく足元の危うい医者に忠告してやる。とにかく人に気付かれないと、一刻も早くアイーダの治療を終わらせてもらわなければいけないのだ。

アイーダ倒れる。この情報が見方をどれほど動搖させるか。そんなことは少しでも頭のある人間なら誰にでも気がつく。

ただでさえ今敵地の真ん中に近づこうとしているときに、そんな騒ぎが起こつたらどうなるか、考えただけでも頭が痛い。

リュシーに、看護人の一人が天幕の隅の箱に坐っているように指示してきた。

どの道、治療は手伝えないので、素直に、その指示に従う。

「イリスは、残念だつたわね」

その言葉にはじかれたように振り返った。

「だめだつたつて、発見された時にはもう硬直が始まつてた」

先ほど、イリスがいないと騒ぎがあつた。そのときにはイリスはもうこの世の人ではなかつたのか。胸の奥に鉛を詰め込まれた気がした。

「仕方ない。これからもつと増えるんだ」

自分に言い聞かすようにリュシーは呟いた。

アルカンジエルとアルマの一騎打ちは、アルカンジエル優勢ではあるがアルマも粘つていた。

むしろ、アルマの体格で、アルカンジエル相手に粘れることにアルカンジエルは驚いた。

アルカンジエルが頭を狙つて振り落とした剣を頭上で受け止め、そのまま受け流す。その際にアルマの頭に結ばれていた布を切り落とした。

布を失つたアルマの顔に傷跡一つない。

視力を阻むものがなくなつたためかアルマの動きがよくなつた。

その時、アルカンジエルの背後で、火柱が上がつた。

ずいぶんとは慣れた場所に上がつたはずなのに、この近くまで火の粉が飛んでくる。

その火柱は、一つまた一つと増えていく。

「作戦成功」

バターを舐めた猫のような表情で、アルマが微笑む。

唐突に、真昼のように明るくなつたその場所で、アルカンジエルはアルマの顔をはつきりと見た。

綺麗な、化粧なしでも女で通じる容姿、そして、切れ長な目の瞳

は左右で色が違つた。

左目は黒。右目は紫。どちらも美しいが、異相だつた。

不意に、思い出す。紫の目を持つ隻眼大公の名を。

「まさか、お前がセレク」

アルマの笑みが深くなる。

「俺の素顔を知るものは少ない。敵ながら、その一人になれたことを光榮に思え」

セレク大公は、重々しく宣言した。

「ならば、逃がすわけにはいかん」

そう言つてつかみかかるうとしたその時、何かに弾き飛ばされた。

「任務完了いたしました。殿下」

ひよろ長い男が、そこに立つていた。

尻餅をついたアルカンジエルの脇に、矢が数本突き刺さつた。

「お迎えに参りました、殿下」

騎馬の、アルカンジエルと同程度の体格の男がそこにいた。

更にその背後に、戦闘員と思しき男達もそろつている。

「それでは、アルカンジエル殿、我らはお暇させていただく。」  
き  
げんよう

あいた馬に飛び乗つたセレクをつれて、騎馬で駆け去つていく。

「深追いは無駄か」

ここは彼らの領地だ。どんな抜け道を知つてもおかしくない。或いはあらかじめ罠をはつておくことも簡単にできただろう。

「なんてこつた」

サージョントは苦く呟いた。

## 第十章 合理性と意地の問題

騎馬で夜の闇を疾走しながら、ジュリアスのお説教が始まった。  
「もう手遅れでしたから、協力はしましたが、こんなことは一度と  
ごめんです」

セレクは無言で、それを聞いている。

「敵軍にまぎれて旅をするなんて何を考えているんです、大体アル  
ファがいる以上そういう危険にさらされることもないでしょう」  
周囲の兵士達はまた始まつた。苦笑している。

「常識的な行動をとつてください」

そう続けるジュリアスに、実は女装してたんだとは言いづらい。  
女装と言つても、服の胸元に少々布をつめただけだが。  
旅装は男女をして変わらない。動きやすく肌が極力露出しない衣  
装だ。

それに華美な布を使ったものを着る者も、ほとんどいないため、  
その程度の偽装で済んだ。

だからこれは実は女装だと言つても、信じないだろう。信じなく  
てもいいが。

「常識をひっくり返したところ」、新たな道が開けることもある  
「私は旧式な人間なので、しっかりと先人達の開いた道を進んで行  
きとうござります」

断固とした、失踪する馬の上でこぶしを握り締めて断言する。

「うん、お前の主張はわかつた、わかつたからそれを止めろ、危な  
い」

「わかつただけでしよう」

「もちろんだ、お前の主張があるのと同じくらい、俺に元だって主張  
はある」

堂々と胸を張つて断言する。

「つまり反省なさるおつもりはないということですね

ジュリアスのこめかみに青筋が浮かぶ。

「自国の王族を害するために、隣国に情報を流す、これは常識の範囲内に収まるか？」

セレクに言い返されて、ジュリアスは言葉に詰まる。

「相手が、常識を守らないなら、いかが守っていたらやられる。俺の言いたいのはそういうことだ」

いかにもまじめを装つた顔でそういつセレクを、ジュリアスはあつさりと切り伏せる。

「物事には限度があります」

「だつて合理的だつう。安全かつ確實に、敵の進路を把握し、なおかつ、出て行く際に破壊工作で、戦力を減らす」

畳み掛けるその言葉を一言で切つて捨てる。

「欲張りすぎです、素直に出て行つてもよかつたでしょ？」

「長引くと、農作業に支障が出るじゃないか」

確かに今は収穫期、年に一度の書き入れ時だ。その時期に戦争が長引くのはよくない。それはわかる。しかしだ、総大将があつさり出だしで死んで、それで戦争が終わるのもこちらが困るのだ。

「殿下、貴方は貴方についてきている者を何だと思つておられますか」

「面倒くさいけど、面倒を見てやらにゃならんもん」

ジュリアスの額が青筋で埋め尽くされた。

「殿下、砦に戻つたらじつくりと語り合いましょうね

「はー」

ものすげ氣のない返事をして、セレクは馬を進めた。

アルカンジェルは天幕の中で、うずくまるアイーダを見下ろしていた。

「目見ればわかる。アイーダの腕がない。

「それで、戦線離脱するのか？」

問い合わせのかたちではあるが、彼の中では確認だった。

腕を焼き落とされるよつたな重傷を負えれば、普通戦地から返される。

「いえ、支障はありません。痛覚は遮断しました」

「いや、遮断しましたって言つてもな、腕切断はダメージが大きす

ぎる」

「腕ぐらいならほ、本部で再生が可能です。ですので、支障はありません」

言われた意味が脳に浸透するまでにしばらくかかった。

アルカンジエルにとつて、切断された腕が再び生えてくるのは奇跡の範疇に入る。それをこともなげに可能だと言い切つたのだ。

「もういい、お前らのことを見識で判断した俺が馬鹿だった」

軽くこめかみをもみながら、アルカンジエルが呻く。

「そうですね、それでは、次の議題に映りましょうか」

サーチェントが、新たに記された書類を近くのテーブルに叩きつけた。

「食料を積んだ荷駄がほぼ半分やられました」

書類には、この一連の騒ぎでたたき出された損害が記されていた。

「実際、この量だと、帰るぎりぎりと言つといひでしょう」

「つまり、戦闘にかかる口数分の食料は根こそぎやられただってことか」

難しい顔でアルカンジエルもその書類を睨む。

無論、書類には、焼き尽くされた食料だけでなく、セレクに殺害された部下達の名前も記されている。

「さて、どうする、俺達はこのまま素直に帰るべきか

天幕の隅にたたずむ部隊長達に問いかける。

「ここまで来て、一戦もせずに帰ることなどできません」

部隊長達は口々にそう答えた。それを見やりながら、アルカンジエルはサーチェントに問いかけた。

「食料を切り詰めるだけ切り詰めて、帰還にかかるぎりぎりを残した場合、猶予は一日間と言つところです」

アルカンジエールはその言葉を吟味する。

「あの根性の曲がり腐った、顔と心の反比例した糞餓鬼の砦を、わざか一日で落とせると思うか？」

セレクのことを思い出すと、妙ないらつきを覚え、辛うじて極まりない形容詞を並べ立てる。それをサージェントも咎めようとはせず、続ける。

「難しい。ほぼ不可能でしょう。セレクの思考回路が、常人とは異なることを除いても、ここには彼らの土地。地の利は大きすぎる」

反則の塊のような、大公殿下のことは、アルカンジエールから聞いたが、それでもサージェントにはアルマの蓮つ葉な少女にしか見えなかつたイメージから逃れられない。

あれが実は男。少々背筋が凍つた。

「あれが本当にセレク大公だつたのですか」

やはりすぐには信じられない。

「もしやセレクかといったとき否定はしなかつたぞ」  
のんきな言葉に、サージェントは切れそうになつた。

「それは何の確証にもなりません」

「しかしだな、左右で瞳の色が違つたんだ。そして片方がセレクと同じ紫、セレクは左目を隠している。それは、左目が紫でないから、だからとつたに思つたんだよ、こいつがセレクかつて」

「確かにつじつまは合いますが、何だつてそんな危険なまねを」

サージェントもそれには理解に苦しむようだ。

そこでアイーダが口を挟んだ。自分の腕を焼き落とし、荷駄を焼き落つたのは間違いなく、セレクに派遣された魔法使いだと。

その言葉を聞いてアルカンジエールは鷹揚に咳く。

「おそらく、一人でも多く敵を減らしたかつたんだろう、不幸になる人間は自分の周りの人間でないほうがいい。それなら、自分の部下より、俺の部下に死んでほしいそういうことだろう」

アルカンジエールの言い分にサージェントが鼻を鳴らす。

「しかし、アルマか、芸のない偽名を」

サー・ジョンの言葉に誰もが不思議そうに問い返した。

「芸がないってどういうことだ」

「ドール王国、先々代の王妃の名ですよ、セレク大公には祖母に当たる女性です」

その説明に何人かが納得した。

「ああ、将軍姫。戦地でずっと一緒にいた男が、終戦後ドレス姿で現れるまで、女だって気付かなかつたとか、そういう逸話がありましたよね」

「性別不肖顔がよく産まれる家系なんですね」

アルカンジエルはパンと両手を叩いた。

「雑談はおしまいだ。さて、これから一日間だけの皆攻めをすることに賛成するものは挙手をするように」

その言葉に、部隊長達は、全員が手を上げた。

「一戦もせずに退くことはできません」

「軍人としての意地があります」

「後々、何を言われるかわかりません」

アルカンジエルはそうした彼らの言葉を複雑そうに聞いていた。

「ならば、これより明朝。進軍する」

重々しく呟いた。

久々に、自分のベッドの中でセレクは爽やかに目覚めた。

と言つても僅か数時間しか眠つていない。だが、柔らかいベッドは深い眠りを彼に提供してくれた。

そして、長らく粗食に耐えていた彼を報いてくれるたっぷりの朝食。

半熟目玉焼き、新鮮な果物各種更に野菜スープと、鳥の丸焼き、それに籠いっぱいのパンが付いてくる。

その香ばしい匂いにベッドを飛び出し、傍らのテーブルに付く。食事は温かいというだけで今の彼には「馳走だった」。

無言で黙々と咀嚼する彼を、無言で見下ろす、お仕着せを着た女

中達。

この階で、セレクの面倒、すべてを見る業務についている。

「殿下、そろそろ食事は終わられますか?」

口いっぱいにパンをほおばっていたセレクは無言で頷く。そして、ジョッキに並々と注がれていた絞りたてミルクで口の中のものを喉に流し込む。

女中達が、さすがに食べ切れなかつたパンの籠と、食べつくされた料理の乗つていた皿を運び出す。

別の女中が、水を張つた盥を運び込んできたので、テーブルはそのまま洗面台になつた。

顔の水気をふき取ると、いつものように金属の眼帯を身に着けた。実はこの眼帯に穿かれた眼の形に開いた穴に、嵌めこまれた硝子は素通しになつていて。

そのため視界は確保されているのだ。

「さすがに夜は、ピジョンは使えないからな、もう今頃に放しているくらいいか」

窓に向ひ、夜が明けつつある空を見つめる。

寝巻きに上着だけ羽織つた行儀の悪い格好で、セレクは会議室へと向かつ。

セレクを迎えて、そのまま徹夜で夜を明かしてしまつたジュリアスとジヨルマンが待つていた。

「おはようございます殿下」

徹夜明けでも、涼しげなジヨルマンに軽く手を上げて挨拶すると、普段どおりの所定の場所に坐る。

「おはよう、一人とも、見張りが今頃ピジョンを放つたとすれば、後三十分くらいしたら戻つてくるだろうな」

そう言つて、セレクはジヨルマンがまとめておいた書類を拾つた。

「敵は進軍してきますか」

「進軍してこないほうが俺としてはありがたいんだがな」

書類をもてあそびつつ。そう呟く。

「お前なら、遠征に言った先で、備品に、巨大な支障が生じて、それで進軍が不可能になつたとして、その場合に戦いもせずに軍を引ける？」

筆記用具でこめかみをぐりぐりと押さえながらセレクは尋ねる。その問いに、ジュリアスは考え考え言葉を紡ぐ。

「ただ一度も戦わないと言つことはありえません、それでは進軍してきた甲斐がない」

「負けると確実にわかついてもか？」

今度は筆記用具で、ジュリアスの額をつついた。

「軍人とはそういうのです」

「そうか、だがな、俺がお前に遠征を命じたときには、やついうときには速やかに帰還しろ。無駄な死人は出すな」

セレクはこのときは真面目な表情をしていた。

「で、あのおっさんは融通が利かなさそうだな」

セレクはアルカンジエルの顔を思い出しつつ言った。

その時、アルファアが入ってきた。

「あ、アルファアおはよう、昨日はご苦労様」

食料を積んだ荷駄を半分だけ焼き落としたアルファアは、無言で一礼した。

「何故半分だけと念を押されたのですか、殿下」

「全部焼いちやつたら、俺達の食料目指して死に物狂いで攻めてくるに決まつてんだろ、だから、半分残しておけば、それで何とか帰還しようとしてくれるだろ?」

「できれば一戦もせずに帰還してもらいたかったと言つことですか、ですが殿下、誰もが殿下のように賢いわけではありません。中でも軍人は私の知る限り最も愚鈍と思われます」

立て板に水でまくし立てたジェルマンの首をジュリアスが無言で絞めた。

「危ないから止める、二人とも」

「いつもながらのいがみ合いを制止し、セレクは苦く笑う。

「ここで帰るのが、一番損害の少ない方法だが、どうやら將軍様の維持のほうが、部下の命よりも軽いらしい」

「將軍だけではないでしょう、殿下、あの陽動は少々利過ぎたようですね」

「なんか俺が悪いみたいな言い方じゃないか?」

アルファを睨んだ後、書類を今度は真剣に読み始めた。

「殿下、報告が入るまでに三十分かかるのでしょう。お召し替えをなさってください」

セレクの寝巻きを引っ張りながら、眞面目なジュリアスが言い放つた。

「朝っぱらから礼装なんて着たくない」

「部下に土氣に関わるんです、いいから着替えなさい」

ジュリアスの雷が落ちた。

結局物凄く嫌そうに侍女達に手伝われて、礼装に着替えてきた。礼装は、たっぷりとした長い上着を羽織らされていた。この手のたっぷりとした上着は、セレクのように細身の人間には似合わない。むしろ威風堂々とした体格の人間のほうが似合う。

その上分厚い生地で作つてあるため、おそらく重い。そして、今現在の気候からすればおそらく暑い。

「脳みそが煮えて、俺の思考が鈍つたらどうする?」

ぶちぶち文句を言いながら、会議室の最奥の椅子に坐る。

それでも今、夜が明けきり、もはや燭台は片付けてもいいくらいの時間だ。

この皆の責任者達が続々と集まってきた。

大体の頭数がそろつたのを確認すると、セレクはすっくと立ち上がり、会議の開催を宣言した。

木の陰で、カーヴァンクル軍の様子を探っていた数人の男達は馬

車を反転させずに砦に向けて出発しようとするのを見ていた。

懐の袋に入れた小鳥を取り出す。

あらかじめ、進軍するならば、赤、撤退するならば青の足輪をつけると取り決めてあつた。

赤い足輪をつけた小鳥が砦に向けて飛び去っていくのを見て、男達は。ひそかにその後を着け始めた。

そして、そんな様子を知ることもなく、馬車の中の住人は太平楽に、読書に勤しんでいた。

「だから、せめて作戦に関係ある書物を読んでください」と言つたはずですよね」

サーチェントのいやみを完全無視して、アルカンジエルは最近お気に入りの詩集を読みふけつていた。

「しかしな、俺が心置きなく読書にふけれるのもこれが最後かもしれないんだぞ」

「だからなんです、同情してほしいと、言つておきますが、私もこれが最後かもしれないんですよ」

そういうわれては返す言葉もない。元々進軍イコール命の危険だから、そのとおりであるだけに。

アルカンジエルは決まり悪げに頭を搔いた。

リュシーとアイーダはいつもとおりのポジションに収まっていた。アイーダが馬車の中心の薄縁に坐り、リュシーが壁にもたれて坐つていた。

これからセレクの砦へと進軍する。

アイーダは焦げてしまつた衣装を着替え、袖の中が空っぽなことを除けばいつもとほとんど変わらなく思える。

「腕は、元に戻るから平氣なんですか」

思わずリュシーは聞いてみた。今まで四肢を切断した仲間がいなかつたわけではない。だがその誰もが、切断の翌日平静に坐つていなかつた。

「平気なわけではありますんが、今取り乱してもビリにもなるものではありませんし」

アイーダの言葉に、リュシーは畳み掛けるように問い直した。

「もう一つ聞いていいですか、魔女や魔法使いは、派遣ですよね、なら根っこは同じ組織の構成員と言つことになる。平気なんですか、自分の仲間に腕をためにされて」

「平気じやありません」

アイーダもはつきりと答える。

「どうして、自分の仲間と殺しあえるんですか」

「互いに組織に忠誠を誓っているからよ」

言われた言葉がリュシーには消化できないようだった。

「貴女の、目的は何です？ 魔法使いの組織が本気になれば、すべての王国を支配することなんて簡単でしょ？」

「そうしてほしいの」

「そうなつていれば、イリスは死なずにすみました」

沈痛な面持ちでそういうわれればアイーダも言葉に詰まる。

「それはできないの、来たるべき時のために」

「来たるべき時？」

「それは天の彼方から、彼らが再び現れるとき」

リュシーはその言葉を反芻した。そして唐突に思い当たる。

「まさか、天に逃げた人たち、そんな天で人が生きていけるはずがない」

空の上でいつどりやつて生き延びるのか、ずっと悩んできたくらいだ。

しかし、アイーダは、月に当時すでに街があつたと言われてそのまま床にのめりこみそうになつた。

他にも、天に浮かぶ巨大な城もあつたと言われて、いつたいどんな城などと。頭をかきむしってのたうつた。

「かつて、天のほうが生存率が高いと判断するくらい大地は危険でした。ここで私達が生きている以上彼らも生きている可能性は少な

くないと思います」

そういうのだろうかと、リュシーはしばらく悩んだが、アイダは続ける。

「そして、再び、かつての戦争が始まるかもしません、その時、私達の統治で安閑としている人類ではだめなのです」

一息に言い切られてリュシーは茫然と、黙り込む。しばらくの空白を置いて、リュシーは再び口を開いた。

「可能性の話だよね、生きているって限らないし、戦争を再開するつて更に低い気がするんだけど」

「それでも、その可能性がわずかでもある以上、努力すべきでしょう」

リュシーは俯いた。

「つまり、天の彼方から、誰かが来るまで貴方達の戦争は終わらない、もし、天の彼方ですべてが死に絶えていたら、永遠に終わらない、そういうことでしょう」

「そうです」

リュシーは俯いたまま、呟く。

「本当に、馬鹿みたい」

馬車の中で、アルカンジエルは窓から周囲の景色を見ていた。たつた一日間、しかし、その一日間、勝とうと負けようと戦い抜かねばならない。カーヴァンクルの意地のために。

敵地に進軍して、一戦もせずに交代するなど、カーヴァンクルの意義にそむく。

軍隊が舐められると言ひこと、それは侵略の呼び水となるといふことだ。

おそらくセレクとしてはあつさりと帰つてほしかったのだろうが。半分だけ焼かれた食料は、そのことを示唆している。

「無駄に賢いよな、アルマ」

つい、本名ではなく、彼の名乗っていた偽名のほうで呼んでしま

う。

アルマとしてしばらく付き合っていた記憶はもし生き延びること  
ができたとしたら当分忘れまい。

青年だと思っていた、しかしあれはまだ少年だ。

人事であれば、あんな子供に何をしていると憤るだろう。

あれは、子供であつて子供ではない。

権力を持った子供。その意義を知っている子供。

可哀相な子供。そこまで考えて、アルカンジェルは自分の思考を  
押し留める。

セレクを哀れんでいる場合ではない。ましてや、その子供に殺さ  
れる可能性がある今の時に。

必要な物資を焼かれた状況で設備の充実した砦を攻める、それが  
どれだけ困難か。

そして行く手を阻むアルマが、どれほど無駄に有能か、昨夜の顛  
末で思い知っている。

徐々に見えてきた皆の威容を丹を凝らして見つめる。

## 第十一章 うそをりしながら開戦する

セレクは本田一度田の着替えをしていた。

結局着替えるんだから、さつきのままでよかつたんじゃないか、そんなことを考えながら、儀式用の衣装を着替え、黒いシャツとズボン。その上に、黒く染められ、金箔で唐草を刷り込まれた皮鎧を身に着ける。

金箔の飾りがないだけで、基本的にセレクの部下の軍人達はセレク同様黒ずくめの軍服を着用している。

「仮にも鎧なのに、さつき着てた奴より軽いってどうしたことだよ」

そう言って先ほど脱ぎ捨てた衣類を振り返る。

みつちりと織られた布地に、金糸が織り込まれている。その丈が長い。セレクのくるぶしまである。

会議のためだけに着替え、それが終われば戦闘のために着替える。ああ労力の無駄だ。

王族ゆえに儀式めいたことが多いが、それがセレクには「ことじ」と無駄に思える。

会議で話すことなんか、なに着てたって変わらないだろう。

そのセレクの態度に、侍女達はいつせいにブーイングだ。

なまじセレクが美貌であるだけに、着ている物に無頓着な態度が許せないらしい。

だが、正装よりも黒ずくめのよろい姿のまづがセレクには似つかわしい。

黙つて立つていれば、眼福なその姿で、実に嫌そうな顔をしてぼやいてみせる。

「ああ鬱陶しい」

セレクは溜息をついた。

「仕度は終わりましたか」

そう言つてジユリアスが扉の前で声をかける。

「軍勢は、遠眼鏡で確認できる位置に付いたよつです」

その言葉に、セレクは慌てて扉を押し開け、階の上階に全力疾走で駆け上がる。

「意外に早いな」

走りながら息も乱さずセレクが言つた。

「相当急いだようですね」

「夜襲をかける余裕もないか」

その余裕とは当然ながら食料のことだ。やはり、焼いておいてよかつたとセレクは自分を讃めた。

「防火用水の確保は終わつてるよな」

「終わつております、と言づか、ござると言づときのためにいつも恒久的に確保しています」

ジユリアスの宣言をセレクは聞き流し、階の最上階に立つた。

そこで、遠眼鏡を片手に物見をしていた部下が、慌てて敬礼をする。そして自分がつかっていた遠眼鏡をセレクに譲つた。

物見用に四方に設置された遠眼鏡を目的の方向にずらす。

セレクの目に、確かに、見覚えのある軍勢の行進が見えた。

馬車は適当な場所に置いてあるらしく、騎馬と徒步のみで構成されている。

「今、あの距離なら、ここに着くのは毎じろだな」

徒步でここまで来る時間を計算し、割り出した時間を言つてみる。ジユリアスは無言で頷く。どうやらジユリアスの計算とそう離れてはいなかつたらしい。

ひとりわ目立つ騎馬を見つけ、おおつと歓声を上げる。

「アルカンジエルのおっさんだ」

見えないことを承知でセレクは、大柄な体躯を栗毛の馬にあづけた将軍に手を振つた。

「何あほなことをしているんですか」

ジュリアスの拳が、脳天に叩きつけられた。

「おふざけをしている場合ですか」

じくじく痛む頭を抱えて悶絶しているセレクにお説教の時間がやつてきた。

ジョルマンは今日も小鳥と戯れていた。

どんなに遠い場所に連れて行かれても、この皆の鳥小屋を自らの棲家と定めた小鳥達は、律儀にまっすぐついに帰つてくる。

これはカーヴァンクルからの情報。どうやら、この一件を仕組んだ連中が、反撃を食らつて居るらしい。

あちらが揉めるとは喜ばしいことだと、ジョルマンは柔らかな笑みを浮かべる。

このままカーヴァンクルが安定を欠けば、それだけこの地が安全になる。

せいぜい内輪もめで国力を落とせばいいのだ、よその国まで、問題を持ち込みますに。

ジョルマンは、すでにこの顛末の一端が、隣国の貴族同士の勢力争いのとばっちりもかねていてことに気付いていた。

それに火に油を注ぐように、王国内の老害どもが、セレクつぶしにこつそりと一枚噛んだのがすべての発端。

アルカンジェルの一族と、別の一族との小競り合いが根っこにあるのだ。

どうやら彼の将軍の一族は、景氣よく反撃をはじめたらしく。残念なのは、この事実をアルカンジェルに伝えて、さつさとこの領地から立ち去つてもらえないと言つことだ。

何しろ、この情報をもたらした。ピジョンと呼ばれる小鳥のことは、今のところ最高機密にあたる。それを隣国の軍人に話すわけには行かない。

セレクが王になつた暁には、やっぱり国家最高機密として、しばらくは秘密の情報網として活用したいと考えてゐるのだ。

「仕方ありませんね、さつさと変えれば、それなりに、ましな未来が待っているのですが、私の将来のプランのために犠牲になつてください」

ジエルマンは穏やかな笑顔でそう宣言する。

そういう性格だから、根性の捻じ曲がったセレクに重用されるのだと、これはセレクの側近達にとって公然の秘密だ。

そして、ジエルマンはセレクの勝利を確信していた。

セレクは、自らの義務を、どんなにいとおうと、全うしようとしている。だから、そのためには手段を選ばない。

この場合、領地の被害を最小限に抑えること。そのために、アルカンジエルの軍勢にどれほどの無慈悲を強いるか。

新記録達成かもしません。

ジエルマンの胸は怪しくときめいた。

セレクは、報告書を片手に、砦の上部に張り巡らされた、防御壁に寄りかかっていた。

防御壁と言つても等間隔に細長い矢狭間が開いており、そこから矢を射掛けるようになつてている。

そして、セレク発案の武器も、すでに用意されている。これが最初の使用になる。

理論は完璧だったし、テスト使用もしばらく前にした。

そして、地図で、地形や周囲の状態も何度も確認した。これは、万が一にもその計測に誤りがあれば、大惨事になる可能性があるためだ。

すべてが、整つた、いざ実践あるのみ。セレクは拳を握り締めた。セレクの周囲では、部下達が忙しく立ち働いている。

経験の浅いセレクより、ジュリアスのほうに意見を求めるものが多い。

元々ジュリアスとはじっくりと意見のすりあわせが住んでいるので、セレクの考え方とそう遠くないところに落ち着くのがわかっていて

るので、セレクもそう気にしない。

それでも居心地悪そうにセレクをちらちらと見る者がたまにいる。セレクとしても、そんなに気になるなら、はつきりとまっすぐ自分で言つたらどうだと怒鳴りそうになる。

自分はまだ十六にしかならない子供だが、それなりに義務は果たしているはずだと。怒鳴りそうになる。

その時、遠眼鏡を使う部下が叫んだ。敵軍は危険領域に入つた。

アルカンジエルは、道の様子を見ていた。

少しずつ歩き易くなつていく道。綺麗に石畳で舗装され、周囲の草木も適度に刈り込んであるので見通しがいい。

砦が近づいてきている。

アルカンジエルの隣にアイーダがやつってきた。

アイーダは馬に乗れないで、一頭立ての、御者席をかねた二人掛けの座席しかない、携帯用の一輪馬車を使つていてる。

アイーダは御者を務めるリュシーと並んで坐つている。

「アルファは出てくるでしょうか」

魔法使いアルファにおそらく自分は勝てない。しかし、表立つてアルファを使うようなまねをするだらうか。

魔法使いは切り札中の切り札だ。最初から使うはずもない。

アルカンジエルとしても、アイーダを使うことはできるだけ避けたいと思っている。

今のアイーダは、下手すれば死んでいたかもしれないような負傷を押して出てきている状態だ。そんな人間に戦えなどどうかつには言えない。

「見事なものですね」

アイーダは道を見てそう言つ。

きつちりと敷き詰められた石畠には雑草一つ生えていない。それは定期的に道の手入れに人を使つてていると言つことだ。

「セレクの統治は相当うまく言つているようですね」

アイーダはそう言つてアルカンジエルを見上げる。

「戦つたと言う実績のみを残し、早々に引き上げるのがよろしいかと」

アイーダの助言にアルカンジエルは小さく頷く。

実際戦つて勝てる状況ではないのは自分が一番よくわかっている。隣で馬を進めるサージェントもアイーダの言い分に少々驚いたよう、目を瞠つた。

アイーダがまともな提案をしてくるとは思わなかつたのだ。

しかし、横で聞いているリュシーは、アイーダの本心とかの組織の行動理念を聞いてしまつたため、それが純粹にこの軍団を案じてのことではないだろうと考えた。

魔法使い組織が求めるもの、ほとんどの人間が、終わつたと思っている戦争に戦える人材を確保すると言つこと。

むしろ、アイーダの意中の人物はセレクなのではないだろうかと、リュシーは疑つた。

いまさらアイーダに、アルカンジエルへの忠誠など期待してはないが、アルカンジエルが誤解しないことを祈るばかりだ。

聞いてしまつた真実、聞かなきやよかつたと思う真実。後悔しても始まらないが、リュシーは墓までその秘密をじょつしていく覚悟はできた。

それ以外何ができる。かの組織への庶民の崇拜を知つていて、上層部の魔法使いへの依存を知つていて。そんな真実は公表したとたん潰されるに決まつていて。

その辺の判断ができる人間だとアイーダが思つてるのは確かだ。無駄な信頼を背負つてしまつたとリュシーは自嘲する。そんなりュシーの内心も知らず、サージェントとアルカンジエルは戦略のおさらいをはじめた。

先ほどから徐々に見え始めていた。今ようやく全体像が見えてき

た砦をアルカンジエルとサーチェントはつぶさに観察する。

元々は山の麓に立てられていたであろう砦は山肌を覆いつように増築していったらしい。

緑の山肌に、灰色の石で、かなりの高層階にまで建てられている。その最上階には細長い穴の開いた壁。それが矢狭間だろうといつことぐらいは遠眼鏡を使うまでもなく簡単に見当が付いた。

その山頂部に白い小鳥らしいものが何羽も出入りしているのが不釣合いにのどかだ。

脇に付いた溝は、おそらく雨水を受け流すための排水施設だろう。「セレクはおそらく籠城の形をとるでしょう」

サーチェントの言葉にアルカンジエルも同意した。

セレクの行動様式を見ていると、自分の身内に極力犠牲が出ないよう振舞っている節がある。

そして、セレクは卑怯な手段をためらわない。

毒の塗られた武器など、まともな軍人ならまず扱わない。ましてや女装して、相手の油断を誘うなどと言う行動は論外だ。それを平然とやってのける相手の精神を考えれば、セレクは自分を軍人とみなしていないことがわかる。

「セレクの最終目的はやはり、自らの領土の安定だろうな」

アルカンジエルはそう言ひて、その成果である整備された道を見つめる。

「それ自体は悪いことではないのですが、もつ少し手段を選ぶと言ふことを覚えなければいけませんね、あの子供は」

サーチェントはそう言つて、そろそろ見えてきた砦を見上げる。

「では、将軍、突撃命令を出してください」

アルカンジエルは無言で頷くと、背後の部下に片手をあげて見せた。

剣の代わりに腰につけたラッパを構えると、高らかに曲を奏でた。まず前衛の槍を構えた歩兵隊が進んだ。

その後方の盾を持つた部隊が、砦上部からの矢を防ぐために盾を

かざした。

砦前方に、すでに布陣されていた歩兵が、アルカンジエールの軍勢を受け止める。

黒尽くめの軍服は珍しい。黒は染めるのが難しい色だからだ。アルカンジエールの軍隊も末端の歩兵は生成りの軍服を着ている。いや、ほとんどの国では、歩兵は生成りと決まっている。色がついている軍服は幹部だけだ。

しかし、セレクの歩兵達の軍服は黒い。そのため敵味方が非常に見分けやすい。

「同士討ちを避けるためにはいいかも知れんな」

思わず感心してしまったアルカンジエールを、サーチェントがビツいた。

「そういうことを言つている場合ですか、とにかく、歩兵たちにあの扉ぐらいは攻略してもらわねばならないんですよ」馬に乗つたままアルカンジエールの首を締め上げる。

「とりあえず、上官殺しで訴えられたくなれば、手をのける」数秒締められたぐらいでは、さして痛痒も覚えないのか以外に平靜な表情で、アルカンジエールはサーチェントの手を振り解いた。

サーチェントは、今のところ、砦の扉を死守する姿勢の、黒い歩兵達を睨んでいた。

砦最上部のから矢が降つてくる、それは陣の最奥にいるアルカンジエールやサーチェントには届かないが、何人かが負傷した。

今のところ、砦の守りは歩兵の軍服以外は定石を崩していない。

セレクは、戦闘指揮には関与しておらず、その直属の将が全面指揮をとつてているのだろうかと、サーチェントは考えた。

だとすれば、それがどう出ることになるか。

「いや、こちらから攻めるか、火矢を用意しろ」

アルカンジエールが命じた。

砦は、ほとんどが石造りだが、正面のものは木造だ、焼き落として、内部に攻め込むことにした。

大木の丸太を馬で突っ込ませる方法は物資の不足でできない。  
元々が急ごしらえの軍団だ。

その頃セレクは、砦の上部で、自分が考案した作戦のための装置を作動させるのを見ていた。

ぎりぎりと寄り合わされた、人の胴ほどの綱がよじれる。その綱が限度を超えたとき、ばねと化して、仕掛けられたものを飛ばす。かつて投石器と呼ばれた物を模したそれが飛ばしたのは石ではなかつた。

皮袋に詰められた粘ついた液体、それが、後方、アルカンジェルのいる周辺にまで飛んでいった。

その傍らで弓兵たちが追い討ちをかける準備をしている。

周囲は、砦に関わるものしかなく、田畠の類は、川を隔てた場所にある。今の時期ならば周囲の樹木も水分をたっぷりと含んでいる。だからこの手が使える。

「火矢、用意」

セレクは静かな声で命じた。

いきなり飛んできた皮袋にアルカンジェルは戸惑った。  
石ならばわかる。だが、皮袋からあふれたのはどろりとした黄色い液体で、被つた連中も、べたべたする感触に辟易しているようだが命に別状はないようだ。

それでも飛んでくる皮袋に慌ててよける。その時、リュシーはその液体の匂いにそれが何であるか悟り、まさかと背筋をあわ立てた。

「火矢が来ます」

リュシーの言葉に、アルカンジェルがようやく何が起こっているか悟る。

「被つた奴は下がれ、それは油だ」

油にまみれたところに火矢が来る、それは大混乱を誘発するには十分すぎた。

ついで、さらに油を充填された皮袋が飛んでくる。

そして飛んできた火矢に油が引火して地面にのた打ち回るものも出てきた。

「消せ、火を消せ」

怒号が響き渡り、上着を脱いで服が燃えている仲間の火を叩き消す者、油の染みた上着を慌てて脱ぎ捨てる者、我先に戦線を脱出しようと走り出す者、それらで收拾が付かなくなる。

「あの餓鬼、よくこんなえげつないこ心思いつくな」

目の前の狂態を見てアルカンジエルが呻く。

「茫然としてないで、何とか軍勢を立て直してください」

サーチェントが叫ぶ。彼も周囲の混乱に直面し混乱していた。

普段ならば、アルカンジエルを押しのけて、混乱を沈めるために奮闘している。それがアルカンジエルに何とかしろと言い募るだけで、自分で何をしていいかわかつていな。

そして、その混乱に付け込むように、国威の兵士達が突っ込んでくる。

油を避けるためにそれほど深くは突っ込んでこないが、浮き足立つているときには被害拡大だ。

「がたがた騒ぐな、もう油はこない、そろそろ出てくるぞ」  
アルカンジエルが声を張り上げた。

「ああ、混乱してる混乱してる」

遠眼鏡で下界を覗き込んでいたセレクが、のんきに呟いた。

「いくらなんでもやりすぎじゃないのか？」

ジュリアスは、引きつった顔で、こちらは肉眼で下界を見ていた。油を頭からぶちまけられて、そこに火矢を打ち込まれたら、誰だって混乱するだろう。

いつたいどうやつたらここまでえげつない作戦が立てられるのか、一度頭をかち割つて調べてみたいと心底思った。

「まったく、これだから普段料理をしない殿方は」

セレクは遠眼鏡から手を離すとふつと気障に笑う。

「蠅燭やランプに何故芯があるのか考えたこともないんだな  
ちっちちと人差し指を振つて見せる。」

「油つて言つのは、低い温度じゃまず燃え上がらないんだよ、だから芯を燃やして周囲の油を温めて、それから油を燃やすんだ、だから油を被つたところに火矢を打ち込んだとしても、そうそう火達磨になる奴なんて出ないのさ」

爽やかに笑うセレクにジユリアスは、目に付いた光を指差して見せた。

「しかしあいは火達磨になつてゐるようだが」

服に火が付いて、のた打ち回る何人がセレクの目に入つてきた。

「あれ？」

きょとんとして下を見下ろすセレクにジユリアスは冷たく追い討ちをかける。

「芯があれば冷たい油でも燃えるんだろう、服が芯の役割を果たしたようだな」

「おお」

思わず手を打ち合わせた。

「撃つて出るぞ、今こそ敵が浮き足立つてゐる、今こそ反撃のチャンスだ」

セレクの宣言にジユリアス以外の全員が歎声を上げて同意した。

「それでも俺はごまかされんぞ」

びくつとセレクの肩が跳ねたが、それでも意氣揚々と階の下方へと駆け下りて行つた。

遠眼鏡で、ジェルマンはその光景を見ていた。

ジユルマンのいる場所は、最上階から少し下つた場所にあり、特等席とは言ひがたい。

その上、危ないからと言ひ理由で、窓を開け放つことは許されず、壁の小さな穴から覗きこんでいた。

それでも、火に巻かれて右往左往する姿ははつきりと見えた。

「シンプルですが、意外に誰も思いつかない作戦でしたね」

不自由な状態で、それでも根性で覗いていたジェルマンは、今日にした光景に満足の笑みを浮かべる。

また一つセレクの悪名が上がったとほくほくしていた。

実際はセレクが想定していた以上の被害を出したのだが、そのことはセレクが先ほどしていた説明を聞いていなかつたので彼が知る由もなかつた。

「本当にあの方は楽しいことを思いつく方ですね」

そう言って、彼は遠眼鏡を片付け始めた。

見るのは見た、再び自分の仕事を始めよう。

彼は自軍の有利を疑つていなかつた。そして、この後は、ジュリアスの仕事だ。

ジュリアスの実力は疑つたことがない。ひそやかな信頼の視線を扉を開けて、廊下を通る黒衣の集団に送つた。

そして軽く腕を上げることで無言の激励を送つた。

騎馬の五十人が、先頭に立つセレクの合図を待つていた。  
そしてその時が訪れた。張りのある声が、告げた。

「開門」

きしりながらゆつくりと巨大な扉が開く。

扉の前に立つっていた兵士達が一斉に飛びのいた。

馬の前に立つていた弓へいた、開いた扉から飛び込もうとするものたちに矢を射掛けた。

あらかた矢がなくなつた頃に、先頭に立つジュリアスが扉の向こうに進んだ。

その後をセレクが続く。そして背後に立つ二十騎もまたそれに続いた。

最初に鼻に付いたのは焦げ臭い匂い。そして金鏑の血の匂い。そしてどこか餓えたにおいだつた。

「そつ、か、俺風呂に入つたんだ」

昨日までは自分もこの匂いを漂わせていたんだなと、場違いなことを考えてしまう。

そして、大きく息を吐く。

「出撃」

その言葉に一斉に馬が走り出す。

セレクは、細身の槍をつかんでいた。

馬では、高さがあるので、剣では歩兵に届かない。騎兵の標準装備は大概槍と決まっていた。

それぞれが、長い槍を手にしているので、馬を扱うのも氣を使う。それぞれの槍同士がぶつかつたり絡んだりしたら目も当てられない。等間隔を置いて、順に扉から走り出る。

セレクの部下達はすべて黒尽くめだが、金箔張りの鎧を着たセレクが大将首だと氣付かない者はいなかつたようで、セレクに集中して、寄せ手がくる。

ジュリアスがかばうが、それでも、捌くには苦労する。

セレクは槍を突くのではなくなぎ払うように使う。

うつかり深く刺してしまうと、人の身体から抜けなくなり、唯一の武器を失ってしまうからだ

こうした乱戦状態ではじご硬直は絶命した瞬間に起りこじることもある。

もしそんな身体に打ち込んでしまつたら槍は人力ではけして抜けないという。

いつしかセレクを中心に守るように、騎士達が円陣を組んでいた。

周囲に焦げ臭い匂いを振りまいていた兵士を後方に送り、アルカンジエルは前方の扉を凝視していた。

扉が開き、黒衣の騎士達が、躍り出た。

その中にあつてひとりわ小柄な姿を見つける。

実際はそう小柄なわけではない。周りの人間が大きすぎるだけだ。

その顔には待った金の輪を見て思わず駄く。

「あいつ、がちや田になるぞ」

おそらく、金の輪には待った田の形にくじぬかれたそれが、素透しガラスであることくらいは見当がつく。

いくら素顔をさらすわけには行かないと言つてもそんなものを常時つけていれば左右で視力が大きくなる可能性がある。

「何の心配をしているんです」

サービスメントがとげとげしく戒める。

「いや、つに思ったことを」

とはいえ、セレクの部下達が結構な精銳ぞろいであるのは疑う余地もない。

そして、先ほど大きく陣を崩した。

「これはちょっとまずいか」

セレクの軍勢が、別の場所からも現れ始めた。

扉を守っていた兵士に倍する数の兵士が現れた。

いや、その軍勢は地下から湧き出している。

「皆には、ずいぶんと凝った仕掛けがあるようだな」

アルカンジエルは呆れて言った。

まさしく主そのままで一筋縄ではないか。

中心の騎士達、そして周囲を囲む歩兵達。どうやら包囲網を張ろうとしているらしい。

そして、アルカンジエルはセレクが、下級兵士まですべて黒で統一している理由にも思い当たった。

黒は、相手を威圧し威嚇する色なのだ。

騎馬が、アルカンジエルに向かつて進んでくる。

「どうやら、大将同士の果し合いでも仕掛けてくるんじゃないかな」

アルカンジエルは嬉しそうに言つ。

「そうですね、貴方の首を取れば、それあととの馬鹿馬鹿しい戦を終わらせることができますね」

そうすれば自分もさつさと帰れる。

思わず期待がにじんだサーチェントの声をアルカンジェルは聞かなかつたことにした。

生成りの白っぽい色を切り裂いて漆黒が近づいてくる。

そして、その背後から漆黒が押し寄せてくる。

リュシーが自分の馬車に積んでいたアルカンジェルの槍を差し出した。

槍と戦うときは、槍でないとあまりにも不利だ。特に騎馬戦は、「サーチェント、どつかに誘導しようとする動きがあつたら気をつける。相手は勝てばいいと考えている。危険すぎるお子様だ。罷に送り込もうとする動きかもしねー」

サーチェントはこくりと頷く。

それらしいものには、今のところ見つかっていないが、落とし穴の一つも掘られていたとしても、たぶん自分は驚かない。

セレクは、ひとりわ田立つ騎馬の巨躯に向かつて進んだ。「数日で、嫌と言つほど見慣れたそののんきそうな顔が直接確かめられるほど近く。

「ジュリアス、露ばらいを頼む」

ジュリアスは視線だけで、同意して見せた。

華奢な女性の腰ほどあるといわれる豪腕で、槍を振るつ。

その槍先に引っかかった不幸な敵兵が、しばし宙を飛んだ。

目の前で繰り広げられた剛毅な技に、アルカンジェルもしばし声を失う。

気がつけばすぐそこにまで漆黒は迫ってきていた。

ジュリアスの背中をすり抜けて、セレクは前に出た。

その手には血に染まつた槍が握られている。

今更だ、そもそも最後に分かれた晩もこいつは何人も殺してくれた。

そうして胸のうちによぎりかすかな怒りをアルカンジェルは押し殺した。

鐙だけで馬を操り、二人流行を叩き付け合つた。

体格とリーチ、その双方であるかんじえうるが有利だつた。しかし、セレクは小さいがゆえに的として当てにくい。

アルカンジエルが打ち込みセレクが受け流す。そういう攻防がしばらく続いた。

しかし元々地力が違いすぎた。セレクの体重はアルカンジエルの三分の一もないだろう。

ましてや騎馬と言う状況では、セレクの唯一の利点、敏捷性はまったく生かせなかつた。

槍と槍がかみ合う嫌な音がした。

唐突にアルカンジエルの槍が、セレクの槍をへし折つた。

瞬間味方に喜色がよぎる。

しかし相手は常識と言つものを知らなかつた。

折れた槍をそのままアルカンジエルの顔めがけて投げてきた。その槍を払う間に、細身の投擲用針がアルカンジエルの右肩に突き刺さる。

持つていたのが剣ではなく槍だつたのが運が悪かつた。

小回りの聞かない武器では、小さな張りは防げない。

「隠し暗器とは」

偶然かそれとも故意か、刺さりどころが悪かつたらしい。右腕がしびれたように力が入らない。そのまま槍を取り落とす。

「アルカンジエル」

副官が、アルカンジエルの前に立つ。その時、セレクも数人の騎士達に囲まれて、アルカンジエルの視界から消えていた。

「引いたほうがいいんじゃないですか」

リュシーがおずおずと囁く。

この乱戦状態の中魔女とその付き添いは、台風の目状態で、矢も剣も飛んでこなかつた。

「それに毒を塗った刃物でイリスは殺されたんでしょう、さつき刺

そつたものに塗つてあつたりして

おそらく、その場にいた全員がまさかと思ひながらもその可能性を考えていた。

「軍を引かせます」

サーチジョントが断言した。

「もういいでしよう、これで進軍して來た義理は果たしました。撤退させましょう」

アルカンジエルは肩を抑えた状態で、無言で周囲を見回す。そして振り絞るように叫んだ。

「撤退する」

じりじりと、砦から離れ、軍を後方に戻す。それを戦いながらも、セレクの軍隊は、一定以上の場所から進むことはなかつた。

「追撃しますか」

ジュリアスが、セレクにそう進言してみると、答えはわかっていたが。

「いっそり探らせるだけでいい、これ以上の戦闘ははつきり言つて無駄だ」

予想通りの言葉に、ジュリアスは苦笑する。

「どうして、毒を塗つておかなかつたんですか」

問いかけると、セレクは虚を突かれたように去つていくカーヴァンクル軍を見つめる。

「どうしてかな」

そう言ってセレクは、苦笑する。

なんとなく殺したくなかった。そんなことを言えば、ジュリアスはどんな顔をするだろう。

埒ないことを考えながら、先頭の後片付けの指示を出すべく振り返つた。

## 第十一章 から元気な戦後処理

死骸は自軍の物は砦の中に安置しカーヴァンクル軍のものは砦から離れた場所に穴を掘つてまとめて埋めた。

砦の地下は気温が低いので、遺体の安置場所に使うことにした。元々食料を保存するための場所だったが、これから作物を取り込んで収める予定だったので今はちょうど空いていた。

その様子をセレクは無言で一部始終見ていた。

「少ないほうです」

ジュリアスの言葉に、セレクは目を瞬かせる。

意外そうな顔に、この少年は、人殺しをしたことがあっても戦争は今日が初めてだったのだと思い当たる。

「少ないほうです、貴方はよくやりました」

重ねてそう言えば、彼は小さく頷いた。

「そつか」

氣のない言葉だった。表情も変わらない。だからジュリアスはそれ以上言ひのを止めた。

「ジエルマンに被害と、死傷者の名簿を作るよう言つておけ、それと、後をつけた連中に、森に入つて三日以上奴らが出てくる気配がなくば戻つて来いと伝えろ」

よどみなく続く言葉を、ジュリアスは黙つて聞いていた。

「奴らが戻つてきたら、砦に匿つている農民どもを家に戻せ」

その言葉を最後に再びセレクは黙る。

ジュリアスは一礼すると、セレクの命令を伝えるためにその場を後にした。

馬車の元まで、戻ると、カーヴァンクル軍は、負傷者の治療を始めた。

「追つてこないですかね」

リュシーが不安そうに呟く。

「監視はつくでしょうが、森のあの田印を越えたら、もつこないでしょ。彼らは防衛のための戦いをしたのであって。殲滅する気も必要もないようですし」

アイーダはそう言つて、早々に自分の馬車に戻り、いつもの場所に坐つた。

リュシーはそういうわけにはいかず、負傷者達についていた。リュシーは背後を振り返る。重症でも生きているものはかるうじてだが回収された。

しかし、明らかに死んでいるものはそのままおいてしまつた。「気にしなくとも、あっちで埋めるだろ。死体の野ざらしがあれば、疫病を生む。それくらい連中もわかっているはずだ」

肩に刺さった針を抜いてもらひながらアルカンジェルが言つ。実際それはお互い様なのだ。自分の敷地内にある死体は、敵味方区別なく。責任を持つて埋めるという暗黙の了解があつた。

針を抜いたとたん、腕の痺れは收まり、安堵の息をついたアルカンジェルは、医師と部下に負傷者を異動させると命じた。

「とりあえず、怪我人は、上級士官用の馬車で運ぶぞ。リュシー、アイーダにしばらく同居人に耐えてもらうと伝えて置け」

リュシーは顔をゆがめる。慣れない人間の横にアイーダを置いておくなんて、その軋轢に考えただけで目の前が真つ暗になる。

「そうだ、俺の本棚をここにおいて置け。あれを置いていけば一人くらいは余計に置ける」

そういつたアルカンジェルにサーチントが驚いたように目を瞬く。

「どんなに高価でも、本はまた買える。しかし、それを惜しんで、部下を見捨てたと言う汚名は着たくないんだよ」

そう言って。アルカンジェルは自分の馬車に戻り本当に本棚を地面に置いた。

サーチントはやれやれと溜息をついた。そういうことを言い出

すなら、最初から持つてこなければいいのだ。  
愚痴をこぼしながらも、撤退準備を続ける。

「これで、終わりだ。サージェントは背後の皆のある方向を振り返る。

「負け戦にしては、被害は少なかつた、それだけは感謝しますよ大

公殿下」

それが、最後のセレクへの言葉だった。

リュシーがアイーダに話をするど、アイーダは馬車を完全に降りて、騎馬で旅をすると言ひ出した。

そういうわけで、リュシーは青ざめた。アイーダも十分に重症者を名乗る資格があるのだ。そのアイーダが騎馬で移動するとなると、馬車で異動する人間の立場というものが。

「かまいません、どの道痛むわけではないのですから」

「痛くないと言つのが理解できません」

リュシーのあまりに正論に、アイーダは不機嫌に応じた。

「たかが右腕一本でしょ！」

「右腕は普通たかがとは言わないんです」

リュシーの心からの叫びに、会話を漏れ聞いた者達は全員リュシーに賛同した。

「だつて、どうせ不器用ですもの」

どこか拗ねたような口調に、アイーダが何を言つてゐるかしばら  
くリュシーは理解できなかつた。

しかし、不器用と言つ単語に一つだけ思い当たることがあつた。

「もしかして、あれ、わざとじやなくて」

その言葉にアイーダはそっぽを向く。

リュシーは力なく笑つた。

「わかりました。腕が治つたら、最初から丁寧にやり方を教えますから」

「習つたつてどうせ私は貴女みたいにできないから」

「基礎の基礎くらいはできるようになるはずです」

リュシーはそう言って説得した。これで心置きなく内職ができると。アイーダに教えると言う大義名分があれば、内職道具は持ち込み放題だ。

どこまでもちやつかりしたその思考をアイーダは気付かなかつた。「でもアルカンジエル様がいなくなつたら、組織に帰つちゃうんですね」

「そんなことにはならないでしょう。組織はあの方をそれなりに評価しています」

アイーダは、やれやれと疲れた顔でアルカンジエルのいるほうに視線を向ける。

「おそらく、対セレクの切り札として今後も活用しようとする勢力を動かすでしょう」

「よかつた、失業しなくて済んで」

リュシーはどこまでも利己的だつた。

アルカンジエルは、愛馬にまたがり、森を進む。馬車は怪我人に明け渡したので、これからは、正真正銘の野営で過ごすことになる。これから、本国で別の戦いが待つてゐる。

「サージェント、かつて、不毛の荒野に立つた先祖から見れば、今この世界は楽園に見えるかもしれん、だが、けして楽園じゃない」サージェントは視線を送るだけだ。

「いや、かつて滅びた文明も、今の俺達からすれば、どれほどまばゆい世界化と思うが、そこもまた楽園じやなかつた。人が人である限り、楽園など永遠に得られない。これが現実だ」

彼は目を閉じて、瞼の裏の面影を思う。

「子供すら殺しあう今が楽園じゃない」

「アルカンジエル、それ以上言つべきことではありません」

実際、セレクが子供だったことに、アルカンジエルは地味に傷ついているようだと、サージェントは思う。

「もう終わりました、彼は彼の戦いを生きるでしょ。貴方が貴方の戦いを生きるようにしてたぶんまた戦う羽田になるような気がします。」

返つて良かつたとサーチェントは思つ。これでまだアルカンジエルには利用価値があると思わせられる。そんな思惑を死つてか知らずか。

アルカンジエルは無言で馬を進めた。ゆづくじと軍団が進み始める。

セレクは戻ってきた部下の報告を聞くと、農民を開放しようと命じた。そして、戦死者達の遺骸を家に戻す手続きを始めると命じた。  
「今日はこれで終わつたけど、これですむわけないよな」

セレクはうんざりと呟く。

これで、国内の敵のみならず、隣国まで敵に回したと。

うんざりと、会議用の円卓に突っ伏す。

「少し休みなさい、もう貴方にできる」とはない

ジュリアスの言葉に、セレクの顔に傷ついた色がよがれる。  
「休みなさい、貴方は自分が思った以上に疲れているんですよ」  
諭すような言葉に、セレクは納得したわけではないが、それでももう仕事を回す気がないと悟り、自室へと戻つた。

その田舎の向こうで、かすかな泣き声が聞こえなかつたと、誰もが言つた。

かつて導き手となつた組織は今もその力を失つてはいなかつた。  
そして、かの組織に見出されたセレクとアルカンジエル。二人は、  
彼らを害しようとするものから、密やかに守られた。  
表立つては、けして、現れない。しかし、彼らの都合のいいよう  
に世は動いた。

かの組織は、今も、天の彼方の敵に備える気持ちを失つてはいな  
い。

優秀な戦士を見出し、それを害させないように。  
優秀な戦士を見出すために、戦場に、同胞を送り込む。  
世界が壊れたその後も彼らの戦いは終わらない。  
再び天の彼方から、来訪者が現れるその日まで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4884w/>

---

戦う者達の哀歌

2011年9月28日03時22分発行